

明治大正の國文學

岩城準太郎著

凡　例

一、明治大正時代の國文學を研究する氣持は、自分みづからの經歴を回顧する氣持である。そこに明治以前の國文學を研究する時とちがつた特殊の感味がある。それは作品の優劣とか、作家の大小とかを比較することから起る判斷ではない。全く自分と連れ立つて生長して來たものを懷かしむ情意の問題である。此の親しさの心から、此の時代の國文學に關する追憶錄を書いて見たのが、即ち本書である。

一、曾て明治文學の史的研究を試みた小冊子を公にしたことがある。もう二十年も前のことである。まだ此の方面に纒まつた著書の無かつた當時に、貧しいながらも組織的の叙述を試みた點が、多少江湖に認め

られたのか、久しく絶版になつてゐる昨今に至つても、尚ほ之を求められる諸君が少くない。自分はこれら篤學の諸君に酬いるが爲めに、此の研究を大成したいと思ふ。然しこれは可なり困難な仕事であるから、先づさし當り三十餘年間の思出を記錄して本書を編上げたのである。

一、本書は自分の少年時代からの追憶錄である。生涯の春ともいふべき中學生時代に、始めて現代の文學を讀みならつた頃からの追想を記述したものである。唯今自分の子供が中學に通つてゐる。それが小倉の制服を著けて書齋に出入するのを見て、そゞろに當年の自分を想ひ起さずにはゐられない。その頃讀んだ書物など、特更に感興を惹く。かうして蘇つて來る記憶を辿りながら、新たに筆を執つて此の稿を起した。それは昨年梅の綻びる頃であつたが、中途支障があつて筆を停め

てゐたので、霜の嚴しい頃になつてやつと稿を脱したのである。

一、本書を出版するに方つて、その因縁になつてゐる舊著「明治文學史」を公にした當年をも追想する。そして種々の點でそれに關係のあつた、文學博士芳賀矢一先生、故文學博士藤岡作太郎先生、文學士長谷川福平氏、文學士志田義秀氏、其の他多くの友人を憶ふの念がしきりに起るのである。

一、本書に挿んだ三葉のコロタイプ、及四個のカットは、思出の深い書物や人物の中から適宜に七の數だけ拔き出して、その肖像や表紙を寫眞に撮つたもの、又附錄の文學年表は、多年蒐集に骨を折つて來た可なり澤山の資料の中、特に主要な文學現象だけを選んで、之を年月順に編輯したもの、どちらも自分の過去を記念するにふさはしい意義を有つてゐるのである。

大正十四年四月十五日記

著　　者

目次

一　少年の日（序に代へる）……………………………二
少年の日の追憶。未知の世界の憧憬。民友社本と博文館本。近松と西鶴。「文學界」と「早稲田文學」。一葉と柳浪。藤村晩翠の新体詩。子規の俳句。明治新興の文學への愛著。
二　新文學建設の主張……………………………九
現代謳歌と現代破壞。新興文學の現代破壞。舊文學破壞の運動と透谷。紅葉露伴の文學と生命の文學。「文學界」の人々。透谷全集と小說「春」。新文學建設の主張。

三 西洋文學の影響……二一
新文學建設の目標。異國文學への憧憬。英米の浪漫文學。露西亞の自然派文學。二葉亭の新文學。逍遙の小說論と創作。「小說神髓」と「浮雲」。人生の斷片。新興文學の草わけ。露西亞文學の翻譯。
四 詩歌革新の運動……三五
短歌俳句の世界的寄與。詩歌界の先覺者と短詩。短詩の目覺め。子規の俳句運動。二百年にして明治。眞實の描寫。客觀寫生の作風。東洋の美學。子規の短歌運動。
五 新體詩界の曙色……四六

軍歌と「新体詩歌」。少年の詩歌憧憬。學者の詩歌運動。「東洋學藝雑誌」と「新体詩抄」。小説家の新体詩。擬古文家の新体詩。「於母影」の譯詩。抒情詩人の群。透谷の抒情詩。「國民の友」と「帝國文學」。「若菜集」と「天地有情」。

六　小説界の進境……………………………………………………六〇

閨秀作家の輩出。一葉の短篇小説。紅露の影響から獨自の境地へ。女性の懊みを訴へた小説。「濁江」と「別れ道」。一葉の閲歴。現實の根柢。「たけくらべ」の描寫。一葉の日記と其の文學生活。

七　狂飈時代…………………………………………………………七三

急激な變轉。文壇の動搖不安。混亂の中の白光。眞實相の直視。歐洲

大陸の文學。敎化の弘通と醒めた人々。思想問題の高潮。淸澤滿之と綱島梁川。時代苦と高山樗牛。近代主義の文學。スツルム・ウント・ドラング。價値の顚倒　現實描寫の精神。

八　近代文學の樹立……………………………………九〇

現實へ眞へ。花袋の小說「妻」。人生觀の變化。生活の變化。制作態度の變化。「破戒」と「春」。獨步と秋聲。晶子の短歌。泡鳴の新体詩。自然主義の文學。ナチュラリズムの歷史。近代的文學の建設。

九　新興の文學……………………………………一〇四

國境の別なき文學。文學の實際的意義。西洋文學との間のパラレル。ロマンチシズムからナチュラリズムへ。新興文學の性質。唯物的人生觀。

宿命的人生觀。直接經驗の事實。日常平凡の事實。暗黑面の描寫。頽唐の生活。研究的態度。人生の記錄。

一〇　口語体文章の創始……………………………………一一九

制作と表現　新文章の要求。口語体文章の創始。假字交り文。「經國美談」と「佳人の奇遇」。「當世書生氣質」と「探偵ユーベル」。美妙齋の言文一致体。二葉亭の言文一致体。「浮雲」と「夏木立」。「あひびき」と「めぐりあひ」。

一一　口語体文章の發達……………………………………一三七

新文章の試練。紅葉と言文一致体。「二人女房」と「多情多恨」。文体革命の困難。子規の文章革新運動。寫生文と口語体文章。口語体文章の弘

通。内容からの要求。口語体文章と口語の筆記　後進文學者の新文体。

一二　劇壇の黎明……………………………………一四八
劇文學は後れる。脚本の發達は遲い。劇文學に附帶する條件。試作と試演。逍遙の史劇論。逍遙の新作史劇。劇文學運動と逍遙。「桐一葉」と「新曲浦島」。文藝協會の事業。ページエントと兒童劇。社會劇の要求。

一三　劇壇の啓蒙……………………………………一六〇
脚本の翻譯。月郊の「イブセン」作社會劇。新社會劇の要求。鷗外の脚本翻譯。獨墺那瑞の近代劇。脚本界の啓蒙期。啓蒙期の指導者鷗外。翻譯脚本の文体。劇詩から口語脚本へ。「ハムレット」から「ノラ」へ。逍遙と鷗外。文藝協會と自由劇場　近代社會劇の特質。長篇から短篇へ。

一四　青年の文學から壯年の文學へ……………………………………一七六
作者の年齡と文學。讀者の年齡と文學。明治文學の側面觀。ロマンチシズムからナチユラリズムへ。詩から散文へ。現實描寫の大道。青春純情の文學。實際生活の文學。文學者心境の變遷。詩人から小說家へ。自己革命と年齡。自然主義文學と壯年文學者。青年讀者と自然主義の文學。

一五　近代文學の一生面……………………………………………………一九〇
自然主義以外の文學。「白樺」の人々。愛と人道との文學。快美境創造の文學。神經の生活と技巧の生活。人生の肯定。漱石の文學。俳諧的態度と東洋風の人生觀照。

一六　人生肯定の文學……………………………………二〇五

文學史上の反動。新浪漫主義と理想主義。人生觀上の特色。肯定、靈性、神秘、人道。題材の新味。心靈の力。象徴の世界。人工の生活。耽美、享樂、デカタン。情意の生活。超人、第三帝國、人間愛、眞勇。人道主義の文學。實行生活の描寫。

一七　暗示の文學と理想主義の文學……………………二二三

直觀の力と綜合の手法。暗示象徴の筆法。制作上の新技巧。象徴詩の翻譯と創作「海潮音」と「春鳥集」。有明と泣菫。新理想主義文學の文章。新理想主義文學と青年讀者。青年の若々しさ。歐州大戰と表現派文學。自然主義と表現主義。

一八　人間味の文學……………………………二三六
三種の人間生活。文學の題材としての生活相。神性、獸性、人性。人間味の生活。耶蘇の人間味　親鸞の人間味。強い人と弱い人。日蓮と老子。最近文學の主要な題材。
一九　開拓者の悲劇（跋に代へる）………………二四七
目まぐろしい變遷。明治時代の回想。華々しい開展。開拓者、革命家、先覺者。事物開展の形式、開拓者崛起の時代。開拓者の人物。二葉亭、透谷、一葉、子規、樗牛。殊動者と犧牲者。美しきは脆し。
□　□　□　□　□　□
挿繪及カット

雑誌文學界と北村透谷……一五
小説浮雲……三
正岡子規と其の筆蹟……二九
樋口一葉……六二
小説夏木立……一二九
森鷗外……一六二
夏目漱石と其の筆蹟……二〇一

□　□　□　□　□　□

附録

明治大正文學年表……二五八
索引（人名書名件名）……二六五

目次終

明治大正の國文學

岩城準太郎著

一　少年の日（序に代へる）

野末の森に霞こめて、道ばたの草の芽が青む頃になると、少年の日がそゞろに追懷せられる。

北國の冬は長かつた。そして又暗かつた。その長い暗い冬が去ると、急に世の中が生きかへる。晴れた空には暖かい日が照つてゐる。茅葺の小屋の隅にも明るい光が行きわたる。背戸の木の花も田畑の草の花も一時に咲きそろつて、南枝北枝の遲速などは無い。半里も隔つた小學校に通ふ少年は、陽炎のもゆる野べの行き來に、羽虫の群と共に草の原を飛びまはるのである。

かうした光景を想ひ起す毎に、二里の田舍道を歩いて或る都市の中學

校に行つた頃の記憶が蘇へる。始めて知識の眼を明けられ、情感の流れの動きそめた少年は、書籍を讀むことを覺えて、本屋の前に佇むことを樂しむやうになつた。都市といつても地方邊鄙のことであるから、本屋の數も少く、特に新刊の圖書や雜誌を取扱つてゐる店はたつた一軒しかなかつた。自分はその店に入つて、硝子戸の棚からインキの匂ひのする小冊子を引出して見るのが、何よりも好きであつた。

時は明治二十五六年の頃である。新刊書は大抵洋裝假綴の安つぽい小冊子で、値段も二三十錢位のものが多かつた。無けなしの小使錢でその一二冊を求め得た時は、嬉しくてたまらなかつた。宮崎湖處子の「歸省」を買つたことを覺えてゐる。德富蘇峰の「吉田松陰」も買つた。田山花袋の譯した「コサアク兵」も買つた。西洋の樂器に何か横文字をあしらつた表紙の雜誌「文學界」も買つたと記憶する。「十二文豪」だの「國民叢書」だの、總べて民

友社の本が氣に入つた。春陽堂の菊版假綴の小說は皆綺麗であつたが、店で見るだけで買ふことはしなかつた。買つた本は直ぐ檬印を捺したり覆ひをしたりして、大切に本箱に入れて置いた。そして下宿して居る三疊の部屋で、二分心の石油ランプを燈して遲くまで讀耽つた。

此の種の本を讀む者は、自分の仲間にも極めて少かつた。お互に讀後の感想を語り合ふやうな機會は殆んど無かつた。仲間には寄席を好む者も居た。落語、祭文、講談、小芝居、淨瑠璃、かうしたものの評判をし合つてゐる連中は多かつた。自分も好奇の念に驅られて行つて見たが、格別面白くなかつた。淨瑠璃の文句など、友達の賞める部分を見ても一向つまらなく、唯わざとらしいいやみのある敍述としか見えなかつた。總べてこれらは不自然で、內容空虛で、因習的である點が嫌ひで、どうしても親しめなかつた。

其の頃古典文學がはやり出して、「日本文學全書」がよく賣れた。「日本歴史譚」といふやうな擬古文の本が少年の間に讀まれた。自分も此の仲間であつたが、間もなくその文体の弱々しいのがいやになつて、若い心を引かなくなつた。無論後年の學生のやうに、新しい陳いの差別からクラシツクを輕蔑したわけではない、又自己の生活に遠いとか近いとかいふやうな氣のきいた考からでもない、唯これらの本が自分の知らない世界を教へてくれることが甚だ少かつたからである。

幾くもなくして、古文學の流行が貴族的な和文から、平民的な雅俗折衷文に推移り、元祿文學を始め江戸時代の町人文學がもてはやされる時が來た。「早稻田文學」の文士達がやり出した「近松の研究」といふやうな讀物が、若い學生の氣に入つた。近松や西鶴を口にしないものは、その仲間入りが出來ないやうな勢であつた。自分もこれにかぶれて、「武藏屋本」を

借りて來たり「帝國文庫」を買込んだりした。

然しながら自分の若い心はどうしても此の江戸時代の作物とピッタリ合はなかつた。可なり多く之に親しむ機會を持ちつゝも、どこか隙間があつた。何となく深味が足りなくて、もつともつと未知の世界を探り入りたいと渴望する若い心を滿足せしめなかつた。洒落れた、輕い、皮肉な、遊戯的な、頓智的な、かうした調子はむしろいや味だつた。何よりもあの「粹」だの「通」だのといふ趣味は、田舍出の手織の木綿縞の綿入れを著てゐる自分には、甚しく不調和であつた。

だから當時評判の齋藤緑雨を讀んでも旨味がわからないし、泉鏡花の江戸前氣取りがキザに思へた。小説はやつぱり樋口一葉がよく、廣津柳浪が好きであつて、一葉がなぜあんな文體を用ひるかと、もどかしく思つたこともある。それよりも新體詩がもつと氣に入つて、島崎藤村、土

井晩翠の詩集は出るに從つて買込んだ。なほもつと親しかつたのは日本派の俳句で、正岡子規の俳風が自分の仲間を吹靡けてゐる概があつた。

これらの文學から本當に自分の若い心を動かすものを得たので、未知の世界が續々眼前に展開せられるやうに思へた。人生も自然も追々見えて來るやうに感じた。流行を追ひ附和雷同をするのでなく、本當に自分の要求に適ふものは、やつぱり明治に生れて明治に育ち、江戸の傳統を離れた田舍の空氣を吸ひ、既成の趣味ばかりに固執しないで西洋の風にも當つたことのある、純然たる新興の文學であつた。それは丁度明治三十年頃のことである。

今にして既往をふり返つて見ると、その新興の文學も若かつた。その讀者たる自分も若かつた。すべてが春である。明治文學の黎明である。青年から少年へ溯り溯つて、三十年以前を追憶すると、現代文學の源頭

に立つてその清い流れをジッと見つめてゐる少年の日の自分を思ひ浮べないではゐられぬ。筆を取つて先づ當年の文學界に對する管見から述べるのは、かゝるなつかしさの思出からである。

二　新文學建設の主張

文學の歴史的研究をなすものは、何れの國に於ても、或時代には現狀に滿足を表する思想の横溢するを見、又或時代には之に滿足しない思想の旺盛なのを見る。前者は大体に於て樂天的で、當代の社會組織にも、道德習慣にも、制度文物にも、格別不平を抱かず、現狀に安んじて之を棄てようとも變へようとも思はない。後者は之に反して、當代一切の文明に平かならず、現狀を破棄して何等か新境地を開拓しなければ止まじと努める。之れに又二通りある。一は即ち現世を棄てて理想的の過去世界若しくは空想世界に神往しようといふのであり、他は飽くまで現世に反抗して之を破壞し變革しなければ承知しないのである。前者を假りに

現代謳歌の思想と名づけようならば、後者の第一は現代超越の思想で、第二は現代反抗の思想又は現代破壞の思想である。

例を我が國文學に取つて言へば、平安朝時代の文學は現代謳歌の思想で一貫してゐるし、鎌倉室町時代の文學は現代超越の思想に充滿してゐる。江戸時代の文學では、前期の元祿享保時代の文學には平安朝時代のと相似た色彩があり、後期の天明文化時代の文學には鎌倉室町時代のと相通ずる面影がある。無論之れは大体の觀察であつて、細かに調べて行くならば、各時代に於ける各小期を區切る毎に、二者消長の關係が變化してゐることを知り得よう。唯あの第三の思想即ち現代破壞の思潮が一代の文學に橫溢したといふ時代だけは、まだ一度も現はれてゐないやうである。尤もその間にも、世を憤り世に拗ねて有らゆる舊物を破壞して新た世を創り出さうと翹望する思想は、必ずしも無いではない。然しな

がら、それは唯一箇の文學者の個人的傾向であつて、時代文學の大勢を支配するものではなかつた。本當に現代破壞の思想が文學の内容となつて現はれ、而も一代の趨勢がこれに傾くといふ現象は、實に明治新興の文學に於て始めて見るところである。

現代破壞の思想は、あゆらる舊文物に反抗して之を破棄しようといふ思想である。有らゆる因習を擺脫しようとする思想である。だから此の思想の横流するところには、舊い文學も亦捨てられ、因はれた文學も同じく抛たれる。卽ち舊文藝の破壞といふ事は、此の思想から生れる主張の中で最も有力なものであらねばならぬ。

舊文藝破壞の運動は、明治文學に於ける重要な現象の一であつて、可なり長い間に亘つて眞劍に試みられてゐるものである。然らば此の運動の起原は何時であり、その源泉は何所にあるか。三十年の歷史を溯つて

見ると、どうしても北村透谷の文學を見逃すことが出來ないのである。

明治二十五年三月、透谷は「女學雜誌」に元祿文學攻撃の論文を書き始めた。二十五年の當時に於ける元祿文學攻撃、これは極めて意義深い事象である。

當時は明治文學が既にその第一歩を踏み出してゐたとはいへ、まだ本當に新しくなりきつてはゐなかつた。既に坪内逍遙の「小說神髓」が出て、江戸時代末期から明治時代の初期にかけて世に行はれてゐた馬琴一流の讀本や合卷が、漸次文學社會の表面から姿を隱したけれども、その代りに復活して來たものは元祿の文學であつた。

尾崎紅葉を始めとして硯友社の諸作家は、西鶴の作風を學びその筆致を摸倣した。幸田露伴も亦西鶴の文章を取つた。而もさうして出來た彼等の作は世人の喝采を博した。紅葉の「伽羅枕」は明治の「一代女」として大評

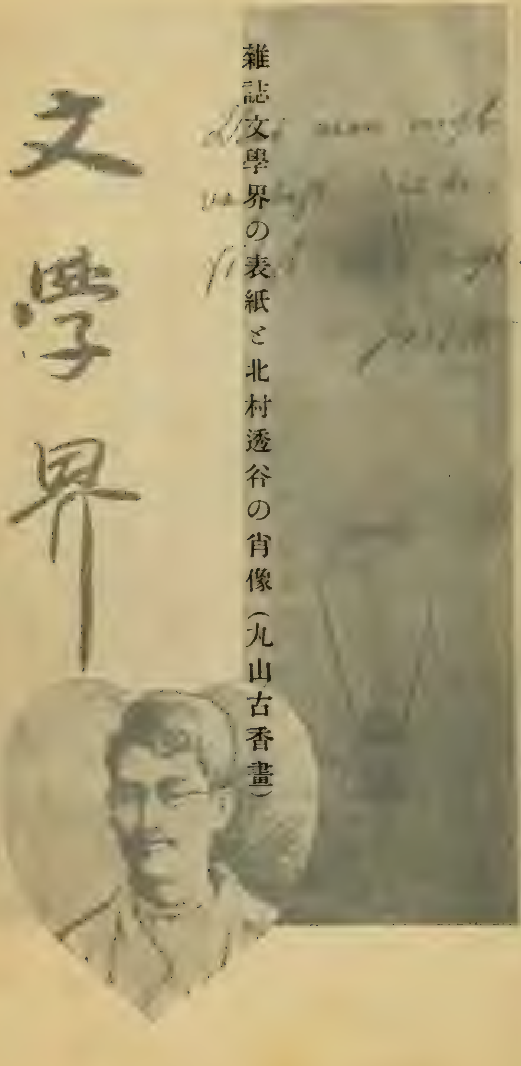
判であつた。饗庭篁村の八文字屋張りの作風は、是れ亦一方に雄視して崇拜者を集めてゐた。「當世商人氣質」は明治の共積ともてはやされたものであつた。又彼の坪内逍遙の劇の研究に伴うて、近松の戯曲が文壇の注意を惹き、これが研究も漸次盛んになつて來た。要するに當時の文壇は元祿文學全盛で、わけて西鶴は文人仲間の偶像であつた。透谷が攻擊の矢を放つたのは、卽ち此の時である。

一体元祿文學は江戸時代に於ける新しい文學であるが、その思想の傾向を大局から見ると、やはり現代謳歌の氣分に滿ちてゐて、現代反抗の思想だの、文明批評の意見だのといふものは、甚だ影の薄いものである。かやうな文學を學んで出來た當代の文學の如何なるものかは、大概想像がつくので、作者自らは唯文体を學ぶだけだと心得てゐるかも知れないが、崇拜と摸倣とには知らず識らずその著想內容にも套襲の痕跡が

ついてゐるのである。一二の名作は必ずしもさうではないけれども、多くはまだまだ安つぽいもので、俠だ粋だと型に嵌まつた江戸時代の趣味を持出し、意氣だ通だと舊式の理想を立てて、うかうかと遊戯文字を弄してゐたものである。透谷は即ち此の種の文學に向つて破壞の手を下したのである。

之を今日から見れば別に大した事でもないが、明治二十五年の當時にあつて早くも此の點に批評眼を向けたのは、實に空谷の跫音であつて、先驅者の風丰をこれに認めなければならぬ。透谷の主張は、よし其の思想にまだ幼稚な理想家の影が附纒つてゐるにしても、文學史上等閑にすべからざる有意義の文字である。透谷の死後明治三十五年に出版せられた「透谷全集」に就いて、その說くところを要約すると先づかうである。

元祿文學に唾棄すべきは、獨り其の章句の放逸なるが故のみでなく、



雑誌文學界の表紙と北村透谷の肖像（丸山古香畫）

ついてまはるのである。一二の名作は必ずしもさうではないけれども、多くはまだまだ安つぽいもので、[illegible]

[illegible]

[illegible]である。通俗は[illegible]此の[illegible]の文[illegible]に[illegible]

したのである。

雜誌文學界の表紙に北村透谷の肖像（丸山古香畫）[illegible]に

あつて早くも其の點に批評眼を向けたのは、實に當時の[illegible]であつて、[illegible]に認めなければならない。[illegible]の主張に、よし其の思想にまた[illegible]な[illegible]想家の[illegible]つてゐるにしても、[illegible]等閑に付すべからざる[illegible]意義の文字である。通俗の[illegible]三十五年[illegible]た[illegible]に[illegible]いて、その[illegible]くところを[illegible]ると[illegible]つてある。

[illegible]文學に[illegible]すべきは、[illegible]の其の[illegible]句の[illegible]なるが故のみでなく、


文學界
Was man nicht
versteht. das be-
sitzt man nicht.
Goethe

其の想髓の輕佻なるが爲めである。元祿文學が本邦文壇に作つた最大の罪は、戀愛を其の自然なる地位から退けたことである。彼等は遊廓を以て其の天國となし、偏曲輭弱なる意氣から朴直剛健なる野暮を嘲り、至善至惡に對する妙念は殘らず脫し去つて、唯欲火炎上の曲りくねつた一時の快さを此の上ないものと珍重する。明治の大家が遊廓内の理想を描くに汲々として、我が文學を元祿の昔に復らしめるやうなことがあるならば、吾人の遺憾如何ばかりであらう。――粹とは愛情の公然ならぬところから其の障子外に發生したもの、俠とは武士道の軟弱になつたところから其の屛風外に發達したもので、共に遊蕩の敗風から起り、遊廓を以てテムプルとしてゐるものである。かゝる理想を描ける元祿文學を尙ぶは日本文壇の恥辱である。

斯樣にして透谷は當代の文學に反抗の聲を揚げ、之を破壞して新たな

る文藝を打立てようとした。透谷の舊文藝破壞の主張は、同時に新文藝建設の主張であらねばならぬ。彼れが「內部生命」を論じ「ヒユーマニチー」といふことを說いたのは、即ち此の方面の主張である。文藝は嚴肅なる事業である、人間內部の生命に觸れなければならぬ。深く人性の奧底に入り生命の泉を汲むにあらずば、文學として何の尙ぶべきところがあらう。吾人が不肖を顧みずして明治文學に微力を致さうとするのは、即ち此の範圍の中に存するのである。これがその要點であつた。

これらの言說は、無論組織立つたものでもなく、哲學的基礎のある精細なものでもない。內部生命などといふ概念は漠然としたものである。戀愛の神聖、藝術の尊嚴といふやうな現實に遠い考へ方も少からずある。夢のやうな靑年の空想が影法師の如く附いてまはるのも否まれない。然しながら當代の人生觀文藝觀にあきたらざる初生な靑年が、眞面目に人

生を研究する熱意から出た言論であることは之を認めなければならぬ。

透谷は右のやうな元祿文學攻擊を手始めとして、あらゆる舊文藝を排斥した。「女學雜誌」と「文學界」とは此の運動の機關であつた。彼れの同志には、星野天知馬場孤蝶平田禿木戶川秋骨島崎藤村などがあつて、各自人生研究の嚴肅な努力を進めた。此の間の消息は、藤村が明治四十一年に出した小說「春」によつて覗ひ知られる。今「透谷全集」と「春」とを照らし合せてその間の情態を述べて見よう。

「春」の青木駿一(透谷に當る)はその風丰からして破壞感傷の趣を帶びてゐる。世を破ると共に自分をも傷けなければ休まぬ相を現はしてゐる。「全集」の中に、齋藤綠雨の小說「油地獄」を批評した文章があるが、その中に次のやうな激烈な文字が見える。

世に罵倒すべきものあり。爆裂彈を行る虛無黨員が敵を倒す時に自ら

も共に倒れて硝煙の中に露と消ゆる趣味を解せば、いざ語らむ。現社會といはず、幾千年の過去より幾千年の未來に亘るべき人間の大不調子是なり。

彼れは卽ち此の人間の大不調子に向つて爆彈を投じようとするのである。爆彈を投じて自己も共に倒れるのを辭さないのである。「吾等は先づ破壞すべし」とは透谷等の主張であつた。

「春によれば、青木は國府津の旗亭で沈痛慷慨な語氣を以て舊い習慣と形式とに束縛せられた多くの思想を攻擊した。彼れは當時の似而非愛國者、樂天家、宗教家、英雄などを數へて、壯嚴な威容を具へた人間のする事の多くは憐れむべき戯れに過ぎないと歎息した。今の祖國は唯青年の墓である。淺薄な泰平の歌を聽くのみで、何等の新しい生命を見ることが出來ない。破壞！破壞！破壞して見たなら或は新しいものが生れる

かも知れない。今日までの自分の苦戰は總べて此の精神から出た努力に外ならぬ。彼れはかう結論した。

透谷は自ら告白していふ。「我が物に感ずるは世間の衆生が感ずるが如きに非ず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むことを知らず。形を穿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。」又「丕集の卷首にある禿木の序文によると、彼れは天王寺畔の一破亭で感傷の聲をあげて言つた。「一休悟るといふことが氣にくはぬ。迷ふなら飽くまで迷ふに若かぬ。尊氏にせよ光秀にせよ、何故に一生の終りに此の悟りといふものに欺された。清盛のやうに將門のやうに、何故迷ひ盡さぬのであるか。」これは唯一場の氣焰に過ぎないけれども　傳習の思想に囚はれてゐる者の多かつた當時に在つては、實に先覺者の面目を具ふる者と言はねばならぬ。

斯うして彼れは二十七年五月過度の激昂と傷心とに心身を勞して、生

命の火漸く盡き果て、世を破らうと努力して却つて其の身を破つた。彼れは新運動の犠牲となつて陣頭に仆れたのである。虚無黨員の如く自己の發火した硝烟の中に自ら倒れたのである。要するに「文學界」の同志が人類に對する深厚なる同情沈痛なる人生の批判を標榜して舊文藝を排撃しようとした運動は、時代の潮流に對して少しく早過ぎた。豫言者先覺者は往々こんな憂き目を見るものである。

透谷等が志した新文學建設の事業は容易に出來るものでなかつた。明治二十七八年の國家的大事變のあつた後、文學界に幾多の新人が現はれるに至つて始めて此の事が緒に就いた。高山樗牛等の出現するに及んで始めて此の思潮が滔天の洪波を揚げたのである。

三　西洋文學の影響

かやうな運動を起し、こんな主張をなすに至つたのは、現狀にあきたらないで新しい境地を開拓して行かうといふ改革家の氣質に基づくことは言ふまでもないのであるが、總べて破壞をなし建設をなすに當つては、何等か目標とするところを有つのである。時代の文學を是非するものは、必ず比較對照の上にその優劣を批判してゐるはずである。元祿文學復興の時文主潮がいけないといふ時には、必ず正に何々の如くあらねばならぬといふ目標を假り定めてゐるのである。

透谷の同志が明らかに目指してこれと取擧げてゐるものが無いけれども、彼等の胸の奥には漠然たる異國憧憬の情緒が動いてゐたに相違ない。

異國は英米か大陸か、中世か近代か、ロマンチシズムかナチユラリズムか、キリスト教思想かギリシヤ思想か、そんな區別は明確でなかつた。ミルトンもダンテも、シエークスピアもゲーテも、ゾラもトルストイも、カーライルもエマーソンも、すべて新しくなつかしかつた。思を人生に沈潛する人々から見れば、これら歐洲や北米の文學者は、實に彼等に精神の糧を給與する人であつた。時代の文學を輕浮淺薄として斥ける人々の目には、何れも眞面目で深みがあつて、ドッシリと落附いて見えた。若い人達の心はあこがれの念に憬えずにゐられなかつた。

然しその漫然と異國を憧憬するといふ中にも、彼等の教養の上から自然とその出發點が定まつてゐる。それは唯偶然であつたかも知れない。けれども始めて異國文學に深くはいる機會を得た靑年、今日のやうに自由に各種の外國語を學び各國の文學に接することの出來なかつた時代の

若者には、自己の教養の上で最初に接觸した思想、最初にはいつた文學によつて基礎を作つたことはおのづからのことである。で彼等の新しい思想情緒は、先づキリスト教に養はれ、聖書に養はれた。英米の國語で養はれ、ロマンチシズムの文學で養はれた。其の論ずるところ爲すところ作るところは、大體に於いて英米の文學、ロマンチシズムの文學、キリスト教の文學の影響の下にありと言つてよろしい。大陸近代のナチュラリズムの文學などは、まだ自覺ある批判の上に出て來なかつたのである。

かう言ふと透谷も存外古いやうに聞えるかも知れないが、當時に於いてはこれが最新であつて、今日の青年が輕蔑するやうにたやすく片附けるわけには行かない。ところがこれより尚五年も早く、既に歐洲大陸の近代文學に接觸して、深くその影響を受けた青年文學者があつた。それ

は二葉亭四迷である。

二葉亭の舊文藝を棄て去つたのは、やはりその氣質の上で之をあきたらず思つたところに發足する。彼れも亦人生研究の徒であつて、深く掘下げて物の眞相に透徹せずんば止まぬ概があつたのである。江戸に生れて江戸に育つた青年でありながら、江戸文學の輕く淺いのが氣に入らなかつた。そして歐洲文學の眞摯な研究的態度に感服したのである。

此の方面から歐洲文學を觀察すると、同じく歐洲でも、英國よりも露國の方が遙かに嚴肅であり徹底的であり、且又近代的であり寫實的である。二葉亭と露國文學とは、本來共鳴すべき性質のものであつた。會々その教養の上で眞先に露國文學に近づく機會を得たものだから、何等の障害も指導もなくて直ちに之にはいつて行つた。

二葉亭は外國語學校に入つて露國語を學んだ。露國人グレー教授は語

學教授の方便として、ゴンチャロフ、ゴーゴリ、ドストエフスキー等の小說を讀ませた。美術研究家で批評家であるベリンスキーの論文集を讀ませた。これらによつて見ると、露國文學はただに人情を描き戀を寫すだけでなく、人生全般の深刻な解剖をしてゐる、社會的で政治的で且學術的である。これならば男子一生これに携はつても恥かしからぬものだと思つた。又これらの文學を通じて露國の國狀を知り國民を解し得たと感じた。國際關係の研究もこれから出發しなければうそだと考へた。自らその衝に當つて實行家にならうとまで思つた。同時に又こんな文學ならば自分も筆にして見ようといふ創作欲の刺擊をも感じた。

丁度その時である、坪內逍遙が文壇に現はれて來て、小說を書き小說論を吐き、二葉亭の創作欲を煽り立てた。

明治十八年逍遙は春の屋朧の雅號で、文學士の肩書を附けて、「當世書

生氣質の第一卷を公にして世を驚かせた。小説作者といへば一九や春水のやうに戯筆戯稿の徒と思はれてゐた當時、有爲の青年は天下國家に勞すべきもので、小説など手を觸るべきでないときめられてゐた當時に、文學士である青年が小説を書いた。作そのものは大した傑作でないにしても、地位あり前途ある堂々たる男子が小説を書いて愧としないことを示した點が、ひどく四迷の氣に入つた。

逍遙には又同時に「小説神髓」を出して理論的に小説の價値と方法とを說いた。その要旨にいふ。小説は美術品であつて實用品でない。小説は人の世の眞實を摸寫するものであつて、架空と虛飾とはその禁物である。小說の描寫は人情を主とすべきもので、脚色や事件の珍らしきを求むべきでない。人情の描寫はどこまでも現實の摸寫であつて、作者の揑造であつてはならぬ。

斯やうな說論は今日から見れば格別珍らしくもないばかりでなく、當時に在つても二葉亭などのやうに既にベリンスキーの美學說を讀んでゐる青年には、もう耳新しいとはいへなかつた。けれども明治二十年頃の日本ではとてもありさうに思へなかつた新しい文學論が、突如として鼻先につき出されたのであるから、二葉亭の眼には今まで遠い外國の事として眺めてゐた事柄がもう手近に行はれさうに見えて來たのである。それで文學にうち込んでもよいといふ氣がそゞろに動いて、とりあへず春の屋を訪うて教を乞うた。

二葉亭の創作「浮雲」第一編はかうして出來た。明治二十年六月のことである。第二編は翌年、第三編はその翌年相續いて出た。

此の小說は我國では空前の新味をもつた作である。之を江戸時代の小說類に比べると、第一題材は平凡尋常で、人物も事件も何等奇拔なこと

も偉大なこともない、いはゞ日常茶飯のことに過ぎぬ。草雙紙のやうに義理人情にからんだ結構があるでもなく、讀本のやうに英雄烈女の非凡な言動や境遇を描き出すでもなく、はた人情本のやうに特殊の人々にのみわかるやうな事柄を穿ち寫したものでもなく、明治の東京によくある家庭のたゞの出來事を取扱つてゐるのである。

その上題材を取扱ふ態度は極めて眞面目な研究的のもので、モデルに取つた人物の言動などに就いて精細なスケッチをしたのは言ふまでもなく、人間心理の迂餘曲折する消息に關する研究などは、苦心を極めたものである。當年やつと二十四歳の青年の作として、今日から見ても水際立つた腕前に驚かれる。中に往々江戸時代文學の名殘りの筆癖がこびりついてゐることもあり、新しい心理說明の委曲周到なのが却つて小うるさく感ぜられることもある。然しながら全体としてこれ位の作の出現は、

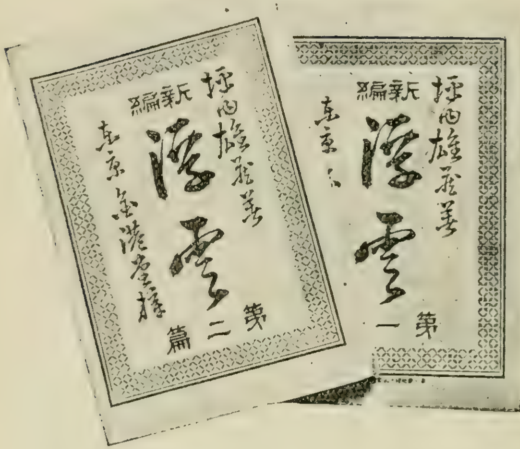
本當に奇蹟的だと言はねばならぬ。

此の行き方は、要するに人生の一斷片を如實に又暗示的に見せるといつた西洋大陸文學、特に近代露國の小説の行き方であつて、馬琴一九三馬春水等のやり口でない。特に新文明を迎へた過渡期の我國の國狀が、丁度西歐の文明に接觸して思想的革命を起しつゝあつた當年露國の國狀を描いたツルゲネーフやゴンチャロフ等の小説の題材に似てゐたので、二葉亭は深く之に刺擊せられたと考へてよろしい。彼れの筆を執つた直接動機は春の屋朧の作と論との發表であつたが、その遠く深い原因はゴンチャロフやベリンスキーの耽讀にあるのである。

二葉亭の文學論は「小説神髓」から得たといふよりも、ベリンスキーから來てゐるといふべきものである。彼は思ふ。美術は眞理の直覺である、直覺し得たる眞理を形象を借りて活現するのである、眞理とは即ち人生

の現實である、美術はこの現實を具体的に寫し出すものでなければならぬ。……………故に文學は哲學も宗教も到り得ない或る地點に達し得るので、そこに文學の獨自の意味がある。現實を掘進んで行くと、そこに人生そのものの相と思はれる一大事實に逢著する。之に逢著するとライフそのものにピッタリ面を合せたやうな思ひがする。その味は哲學も宗教も取殘してゐるもので、文學の働くべきところは此所だと。こんな考へ方だから、美しいものに醉ひ幻を作つて嬉しがるやうな文學は、棄てて顧みなかつた。「小說神髓」には馬琴を斥けながら春水等を取る傾があつたが、二葉亭にはこれがなかつた。

春の屋はやはりその教養が英國文學の流れであるだけに、露國文學から出た者程に重厚であり革命的であるわけにはいけなかつた。「浮雲」の出版された時、表紙には坪內雄藏著と署し、タイトルには春の屋主人二葉



亭四迷合著としてあるけれども、此の作は到底春の屋の畑のものではなかつた。全く周圍からかけ離れた獨自の境地を有つてゐた。其の獨自の境地は之を理解してくれるものも少く、之を賞揚してくれるものも少かつた。つまり時勢に先だつこと餘りに遙かであつた。透谷さへも早かつたのだから、それより尚五六年も早過ぎたわけである。

されば先覺の名譽、草創の功

績はむしろ二葉亭にあるわけであるが、二葉亭は進んで文學的運動を起し、新しい主張を提げて文壇の革命を呼號するやうな積極的行動に出ないで、却つて世間の低級なのに愛想を盡かして消極的に手を引いてしまつた。文學では眞劍になれないと言つて文壇からも退いた。だから彼れの新しい文學の建設に貢獻したところは、「浮雲」といふ作そのものが一つの目標となつて青年作家を刺撃した點にある。ゴンチヤロフともツルゲネーフともかつぎ廻らないでゐて、それで暗々裏に西洋大陸文學の面影を我が文學者によく見せてくれた點にある。同志を率ゐて改革の旗を上げるといふ目覺ましさは、やはり透谷等の「文學界」一派の青年文士團の方にあつた。

二葉亭の功績が右の點にあるのだと思ふ時、その意味に於いて「浮雲」よりも尙一層當年の文壇に貢獻した仕事があると思へる。それは即ち露國

文學の飜譯である。

明治二十一年「浮雲」第二編を出すと同時に、雜誌「國民の友」に「あひゞき」を、雜誌都の花に「めぐりあひ」を出した。共にツルゲネーフの「獵人日記」の一節を譯したものである。彼れは以前からツルゲネーフの「父と子」を譯したり、共の他二三の露國近代ものに手をつけてゐたが、世間に發表したのはこれが始めである。

二者共にほんの短篇に過ぎぬのだけれども、當年の飜譯界を刺擊した寶玉のやうな名譯である。獨り當時に群を拔いてゐるのみならず、後になるほど益々光つて來る底力を有つた作品である。苟も文學に携る靑年の中で、心あるものはこれに心を引かれずにはゐられなかつた。第一には西洋文學特に原語の讀めない露國文學を味讀することが出來た。第二には飜譯といふものはかうも手際よく出來るものかといふことを示され

た。文体の新しさに就いては後節に之を述べることにして、こゝには言はないが、その新しい口語体の文章と相俟つて青年の心を撃つたのである。後年文學上の新氣運を作つた文學者で、この飜譯から深刻な刺撃を受けたものが少くないのである。國木田獨歩、田山花袋、島崎藤村、松岡國男、蒲原有明などは、少くともこれによつて露國近代の小說の研究的な、暗示的な、重厚な、精緻な作風を味ふことが出來たのである。

然しながら、西鶴と近松とのもてた當年の文壇では、その眞價を解してくれなかつた。二葉亭は例の癖を出して飜譯をも止めた。其後再び飜譯に筆を執るやうになつたのであるが、それは例によつて文學上の主張からでなく、何か他の必要から出たことであつた。

四　詩歌革新の運動

我が國の詩歌は、世界の詩歌の中で最も切詰めた簡潔な形態を有つた文學である。律語の詩歌は、詩想のエキスを表出した時、詩情の焦点をつかみ示した時、詠み出づる場面の最も印象的な中心點を描き現はした時に、その特有の威力を發揮する。此の點から見て、短歌や俳句は、我が國の文學の中で、世界の文學に寄與することの出來る資格を有つところの、唯一無雙のものともいひ得る。

然しながら、こんな見方は最近の批評家、鑑賞家によつて始めて唱へられるところであつて、明治新文學の搖籃時代にあつては、思ひも及ばなかつた見方である。異國憧憬の情緒に燃えてゐた時代、西洋詩歌の長

大な體裁と規模とに驚異の眼を睜つた時代には、詩歌の本質的研究の上から、日本詩歌の特長を正當に理解することは困難であつた。先覺者といはれる人達は、日本詩歌の短小な形体を見て、直ちに新時代の大詩想を盛り得る器でないと判斷した。歐洲の文壇に幅を利かしてゐる偉大なる詩歌に對しては、甚だ貧弱なみすぼらしいものと恥ぢ入つた。そしてこれに革新の手を下すことを斷念したのである。

彼等は又、我が詩歌に存する小ぢんまりと整つた制約に手こずつた。短歌と俳句とは、長い歷史の淘汰を經て今日に殘された最も精練した形体であつて、從つて整然たる一つの型に出來上つてゐる。此の制約は言語を束縛するだけでなくて、詩想をも束縛するやうになる。新しい人達の新しい情感を詠み出づるに都合がよくない。型に入らない新しい内容を表現しようとすると自由がきかない。此の點からも亦これらの短詩に

手をつけることをしなかつた。

明治十四五年に起つた新體詩創始の運動は、主として此の著眼から出たもので、後年に至つて幾多の變遷を閲してはゐるが、とにかく新体詩の出現は短歌俳句に對する信認の動搖を示すものである。

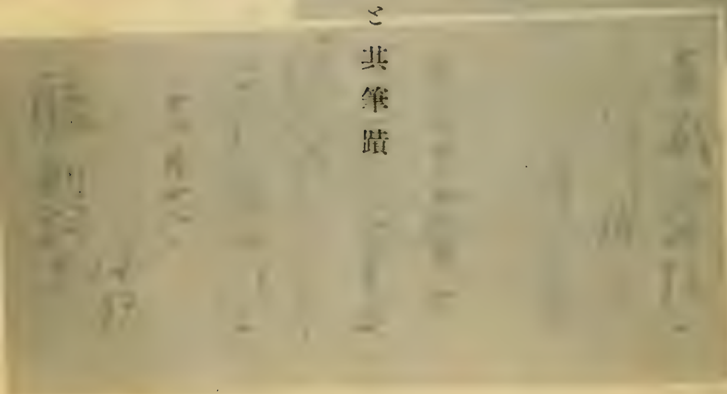
信認は動搖した。然しそれは短歌俳句の本質に關はりの無いことである。目覺めた作家がまだ現はれなかつたといふだけのことである。小說の方で見えた通り、青年文學者が此の方面に目覺めたなら、短歌俳句は依然日本詩歌の精粹として詩界の大きな分野を占めるわけである。明治二十四五年に起つた俳句革新の運動は、即ち此の意味を有つた文學運動である。

正岡子規が俳句を作り始めたのは明治十八年頃かと思へるのであるが、これに傾倒するやうになつたのは二十四年俳句分類の事業にとりかゝつ

てからである。俳句分類は、昔の連歌時代からこの方文學書に殘つたあらゆる俳句を蒐集して、之を彙類し類聚しようといふので、即ち類題句集の完全なものを作らうといふのである。子規は歴史的に時代を下つて研究を進め、元祿の猿蓑集を見るに至つて始めて俳句の趣味を覺え、此の世界への戸が開かれたやうに感じたと言つてゐる。そして何々百句何何十二ヶ月といふやうに、やたらに句を作つた。二十五年新聞「日本の主筆陸羯南に知られてこれに入社し、俳句を掲げ俳論を發表し始めた。此の俳論は後に「獺祭書屋俳話に纒められてあるが、中に芭蕉雜談と題する新しい研究がある。これが即ち俳句革新の曉鐘であつて、今まで現はるべくして未だ現はれなかつた詩歌の世界の新聲である。時は二十六年で、透谷の文學運動と略ぼ同じ頃である。

子規の俳論は俳句分類の研究の副産物である。歴史的研究は比較研究



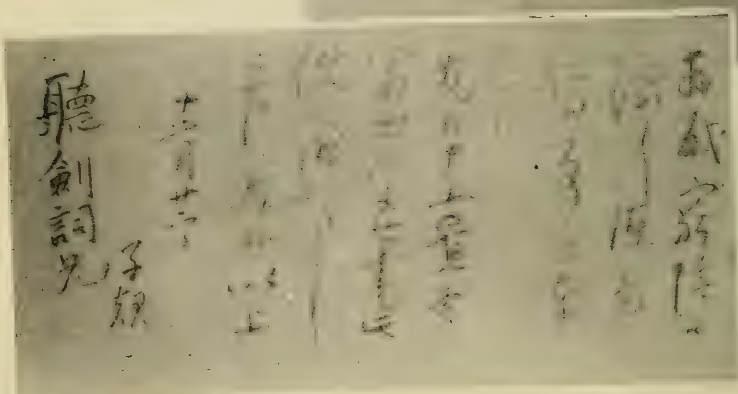


正岡子規の肖像（淺井忠畫）と其筆蹟

でからである。俳句分類は、曾の連歌時代からこの方文學者に纏つたあらゆる俳句を蒐集して、之を整頓し類纂しようといふので、而も類題俳集の完全なものを作らうといふのである。子規は隨時々に時代を下つて研究を進め、元祿の俳諧集を見るに至つて始めて俳句の趣味を覺え、此の世界一の扉が開かれたやうに感じたと言つてゐる。そして何ヶ日何句何何十二ヶ月といふやうに、やたらに句を作つた。二十五年新聞「日本」の主筆陸羯南に頼らるゝので入社し俳句を掲げ俳論を發表し始めた。此の俳論は後に「獺祭書屋俳話」に纏められてゐるが、中に芭蕉雜談と題する著しい研究がある。これが蓋し俳句革新の喚鐘であつて、今まで現はれべくして未だ現はれなかつた言葉の音響の警鐘である。時は二十六年で、透谷の文學運動と略ぼ同じ頃である。

子規の俳論の、俳句分類の蒐集の副産物である。歴史的研究は比較研究


C. Asai


十二月廿二
子規
聴剣詞兄

であり、比較研究は斯道に眼を開かせ悟入を導く。芭蕉翁の研究はその眞相の闡明であつて、又その眞價の發揮である。子規は從來の俳界に傳統的に唱へられてゐる芭蕉翁觀を全然棄却した。芭蕉の作品に對する評價には全く新しい初生な眼を用ひた。翁の作、その佳なるものは二百、他はすべて駄句なりとさへ言つた。而して其の佳なりといふ句は、すつかり傳說を離れた獨自の見方から評價してゐるのである。翁は俳諧の大人物で且つその創始者であるといふ言葉は、從來のと同一であるにしても、その意義が大いに違つてゐた。

子規の研究は進んで安永天明の蕪村時代の俳句に及んだ。そして從來畫家としてのみ高名であつた蕪村を俳人として評論し始めた。これも芭蕉に對すると同樣に、全く獨自の標準から見直したのであつて、從來の俳界には曾て無かつた觀察である。芭蕉の高古閑寂に對する蕪村の雄渾

華麗な趣味を指摘し、蕉の主觀冥想的傾向に對する村の客觀描寫的な傾向を說破して、蕪村といふ文學者を精細に紹介したのである。

かうして子規は俳句に對する新しい鑑識を示し、批評を試みると同時に、新聞日本に據つて創作を發表し又同志を招いた。彼れは每日スケッチブックをもつて寫生に出かけた。眞實の句は斯うして得られると唱道した。青年俳人の日本新聞に集まるもの日々に多かつた。高濱虛子、河東碧梧桐、夏目漱石等、後年名をなした作家が少からず現はれた。二十八年にはもう推しも推されもせぬ大勢力になつてしまつた。世間で日本派と言つたのは新聞日本の名によるのである。

此の時代の作句を集めたのは、三十一年出版の「新俳句」であるが、卷頭に內藤鳴雪が、「百年にして天明二百年にして明治の初日影」と題したのは、最も簡明に俳史上の地位を敍したものである。當時の子規の心境は蓋し

可なり複雜なもので、恐らく虛子が小說「柿二つ」に描いたやうな心持があつたであらうと思へる。「三千の俳句を閱し柿二つ」の句は、「日本」の募集俳句を閱してゐた時の實感を詠んだものであるが、子規の生活と事業とが微妙に表現せられてゐる。自分は此の句を讀む每に、根岸草廬の病子規の風姿を想起する。草廬の蕪村忌に參會する青年の數が年每に增して行くのを見て、床上の子規は病苦を忘れて句案に耽つてゐた。臺所で用意してあつた風呂吹が、意外に多かつた會衆に一切れづゝしか行きわたらなかつた時、彼は記念の寫眞に題して、風呂吹の一切づゝや四十人と書いた。

子規の俳句鑑賞の標準は眞實の描寫といふ點にある。自然人事のいろいろを觀察して、其のありのまゝを忠實に描くのを俳句の神髓とした。彼れは寫生といふ言葉を用ひたが、それは繪畫の用語を借り用ひたので、

その手法は頗る西洋畫家のスケッチに類してゐる。蓋し子規は西洋詩學の說くところによつて詩歌の何たるかを考へた。そして俳句も亦詩であると考へた。丁度その時に逍遙の「小說神髓」を讀んで大に動かされた。これから暗示を得刺擊を受けて、終に眞實描寫の俳句を開いたのである。

此の點からいへば子規の俳句革新は俳句を詩歌の正しい道に引き直したといふことに止まる。彼れの自覺はまだ俳句の短詩としての特長と本質とに及んでゐない。子規の美學はまだ西洋の美學說を俳句に應用したといふ範圍に止まつて、俳句の眞諦に觸れる獨自の美學を創設してゐない。然しながら彼れはこゝに思ひ至つてゐないのではない。段々研究を進めるに從つて西洋美學ではあきたらなくなり、適はぬところや足りない點が澤山で、到底俳句の極意を說明するに不滿足なものだと悟つてはゐたのである。彼れの獨創的天分は、すべて過去既成の說論や觀察に煩

はされないで、淸新な初生な鑑識をするやうに出來てゐたから、外國既存の美學で滿足するわけに行かなかつたのである。彼れは現に自己の美學を創設しようと言つたのである。然し二十八年俳句革新の事業が出來ると同時に病に臥して復た起つことが出來なかつた。而も天賦の事業欲が彼をして一俳道だけに專心する時を得しめなかつた。短歌の革新もしなければならぬ。散文も新面目を開きたかつた。彼れは事業に急ぎあせつた。遂に獨自の美學を立てる暇なくして世を去つた。

事業欲に燃えた子規は、病床に敗殘の身を横へながら、更に短歌革新の運動に取りかゝつた。新聞「日本」と雜誌「ほとゝぎす」とに據つて日本派の新風が俳界を靡けてしまつた三十一年、子規は日本紙上に歌人に與ふる書」といふ短歌評論を發表し、回を重ねて十回に及んだ。當年の沈滯し凡化した短歌を詩歌の本領から見て、忌憚のない批評を加へたものである。

彼れは言ふ、古今の歌集に見るべきものは萬葉集だけである。古今集以下は取るに足らず。萬葉以後の歌人では實朝曙覽宗武の數人に止まる。その他は多く古今集の糟粕を嘗めるに過ぎない。短歌の沈滯は詩歌の本領を忘れ、同一の趣向を蹈襲し、用語を制限することから來てゐる。よろしく詩歌の領域を擴張し、內容を充實せしめ聲調を緊張せしめなければならぬと。かく論ずると同時にその創作を發表して世の批評を求めた。

子規は短歌の作には竹の里人の名を用ひた。住家が根岸にあつたからで、その同志の作家達を世間では根岸派といつてゐた。其の主張は大体に於いて俳句に關するものと同一で、客觀寫生を入門の修行として、技巧的に曲げられた從來の短歌を自然の狀態に復すのを目下の急務としてゐる。第一步より蹈み直して出るといふ點に運動の意義があるので、萬葉集をかつぎ出したのは此の態度から出た事である。萬葉の語を濫用し

たり、萬葉の歌を摸倣したりするのは、もとより其の本意とするところでない。その實生活の印象を詠み出るといふ歌の蹈出しの態度に就いて、萬葉歌人から教へられる點が頗る多いのである。

此の運動は短歌史上の重要な事實で、明治の歌壇では革新の第一聲を擧げたものと言はねばならぬ。三十三年與謝野鐵幹が雜誌「明星」を出して新しい詩歌に關する運動を起したのは、その第二聲に當るものと言つてよろしい。

子規は事を創めてその終りを見るに至らず、三十五年三十六歲で世を辭したのであるが、其の短歌は伊藤左千夫、長塚節等に繼承せられ、齋藤茂吉等によつて今日に傳へられ、依然短歌の世界における主要な仕事を受持つてゐるのである。

五　新體詩界の曙色

短歌俳句の信認が動搖した頃、將來の日本詩歌として新時代の要求に應じて生れたものは、新体詩といはれた詩歌の一体である。

まだ小學校に通つてゐた頃、始めて軍歌といふものを謡つた。活版刷の薄つぺらな袖珍形の小本で、軍歌集とか何とか題したのを有つてゐたことを記憶してゐる。「我は官軍我敵は、天地容れざる朝敵ぞ」だの、「一里半なり一里半、並びて進む一里半」だの、「嗚呼正成よ正成よ、公の逝去のこの方は」だの、「延武の昔正成は、肌の守りを取出し」だの、今も口に乘つてゐる二三の詩句は、此の小本にあつたものである。同じ學校の上級に進んだ頃、「新休詩歌」と題した小本を有つてゐたが、これにはさきの軍歌

集にあつたやうな歌は、大抵收めてあつたと思ふ。竹内節編といふ署名も記憶に存してゐる。兵式で隊列を組んで歩く時、必ず之を開いて謠つたものであるが、此の方は軍歌ばかりでなく、「鎌倉の大佛に詣でて感あり」とか、「グレイ墳上感懷」とか、「四季の歌」とかいふやうな多少藝術的なものや、「勸學」の歌、「自由の歌」、「外交の歌」といふやうな實際的なものや、平野國臣の月照上人を詠める歌、太平記の俊基朝臣東下りの道行などの古い作をも合せ編輯してあつた。明治二十年頃から二十四年頃までの間のことである。

當時これらの作が、新体詩といふ名稱で、始めて日本の詩歌の世界に生れて來た一種の歌謠であるなどとは、夢にも考へなかつた。況んやその本元が明治十五年出版の「新体詩抄」であることなどは、聞知る機會だになかつた。然しこの詩体が何となく少年の日の心をそゝつたもので、自

然まねて作るやうな心持にもなつたのである。

こんな思出のある新体詩も、その源に溯ると多少ちがつた感じのするものである。蓋し新体詩は、その初め全く學術的の見地から意識的に文學運動として創始せられたもので、藝術的要求として或は創作欲の發現として自然に作り出されたものでない。創始者は何れも學者で、發表せられた雜誌は科學の方のものであつた。「東洋學藝雜誌」といつて、明治十四年に發刊せられた理學の雜誌に集まつた學者の中で、外山ゝ山矢田部尙今井上巽軒の三人が、從來の和歌の西洋詩歌に比べて貧弱であるのを慨し、彼れに劣らない長大な新詩歌を得ようといふので、試みに英米の詩を飜譯し、又數篇の創作をもなし、之を雜誌に揭げたのが、抑も新体詩の始まりである。

三人は何れも當代新進の學者であつて、理論上の要求によつて此の試

作をなしたのであるから、文學作品の尺度を之に當てることは無理であるが、あらゆる學術皆西洋のを移植して此の國の文化を進めようと努めた啓蒙時代の現象として、詩歌界にも此の事があつたのは興味ある事である。從つて他の文學全般の狀態に比べて、突飛に早過ぎて、小說にも脚本にも評論にも何等連絡を有つてゐない孤立的の現象であつた。

　發表し始めたのは十四年であつたが、翌年結集して「新体詩抄」第一集として刊行した。すべて十九篇、大部分は飜譯である。前に掲げたグレイの「墳上感懷」、テニソンの「輕騎兵進擊」を始め、セークスピヤの「ハムレット獨白」ロングフエローの「人生」キャムベルの「英國海軍」等の飜譯、「勸學の歌」「拔刀隊」「鎌倉大佛」「社會學の原理に題す」「四季の歌」等の創作を載せてゐる。第二集以下は出ないで終つたから其後の計劃は分らないけれども、此集に取つた詩体は、西洋の古典詩の形式であつて、四行六行八行などの一節

が相重なつて一篇を構成するのである。而してその行を形作る律語として、取あへず從來の歌謠に最も廣く用ひられた七五一聯十二音の句を採用した。但し用語は必ずしも古語に限らず、漢語俗語を嫌はず、すべて現代普通の用語を收めてゐる。

撰者の主張は、その序文に巽軒の述べてゐる所で窺はれる。曰く、從來我國の詩歌として漢詩と和歌とが行はれてゐるが、何れも吾人の情志を發舒するに足らぬ。漢詩はもともと支那の詩で、我國の文學として發達すべきものでない。和歌は我國の文學として尊重すべきものではあるが、畢竟過去の文學であつて、新日本の現在及將來に行はるべきものでない。新しい文明の潮流に棹す吾人が、その情志を發舒するには、現時の國語で自由に平易に且つ大規模に歌はなければならぬ。從つてその詩形は、之に伴ふ雄大のものでなければならぬ。西洋の長詩に則つて、全

く新しい一体を創めねばならぬ。

此の考は、詩歌の本質に觸れた藝術上の意義に乏しいものであるが、とにかく斯界に大きな波紋を起す機となつた。和歌和文の側からの反感も買ひ、文學評論家の嘲笑をも招いたが、それでも從來の和歌俳句の著想とちがつた一つの領域を開き、用語形体に於いても窮屈な制忌の埒外に出て、粗笨ながらも思索沈潜の新味を見せ、蕪雜ながらも無礙自在の一体を創め得たのは、將來の詩界に對する大きな功績であつた。

自分が「新体詩歌」を手にした頃は、こんな改革意識で出來た新詩も、明治二年に福澤諭吉が世界の地理歴史を飲込ませる爲に七五調で作つた「世界國盡」も、六年に同じく教育上の目的で出來た「諳誦十詞」も、十四年に兒童の唱歌として編んだ「小學唱歌集」も、其頃兵隊に歌はせた軍歌も、皆一しよに見なされて流行の歌謠のやうに傳唱せられてゐた。これが又新詩

の弘通に役立つたわけであつて、其の渾沌の中から本當の藝術たる詩歌が萠え出すのであつた。

小說家山田美妙齋が詩の方にもその才藻を試みたのは、やはり此頃であつた。二十年に雜誌「以良都女」を發刊して、之に小品を載せ、尙ほ女學雜誌や國民の友にも現はれた。美妙齋は小說に言文一致体を採用して世を動かした作家であるが、詩歌には口語体を採らうとはしなかつた。代りに律語組織に種々の試みをなし、「新体詞抄」のやうに七五に限らず、八六、五五、五七五等を用ひ、押韻に關しても特殊の研究をなし、遂に二十三年日本韻文論を發表して新詩論を捲起した。彼れは藝術としての新体詩を出した點に於いて注目せらるるが、作の內容からは特に後進を引附けるものがない。功績はやはり詩形詩律の研究にある。尾崎紅葉丸岡九華は、美妙と共に「新体詩選」を二十年に出してゐるけれども、美妙ほど

に注目すべきものはない。

新体詩の創始に刺撃せられて、古典學者の中から長篇の韻文を作る者も出來た。落合直文などが主なるもので、二十一年東洋學藝雜誌に出した「孝女白菊の歌」など、當時有名であつた。中村秋香や大和田建樹もその仲間であつた。これらは詞藻の古典的に鍛錬せられてゐる點で當時に人氣があつたけれども、それは詩歌に對する自覺のない世俗の歡迎に過ぎぬ。題材の取り方、事物の見方に何等進境を見ない擬古文學である。藝術としての新体詩の味は、むしろ森鷗外等の譯詩から豐富に取入れることが出來た。

鷗外は二十二年「國民の友」に譯詩「於母影」を出して、レナウ、バイロン、ゲーテ、シエツフエル、ハイネ、ホフマン等獨英詩人の作を紹介した。「新体詩抄」の英米詩人に對し、これは獨逸詩人を主としてゐる點を注目す

べきであるが、特に著しく變つてゐるのは藝術味の高いことである。センチメンタルな哀調に傾くといふ非難は免れないけれども、抒情詩の新趣を傳へて嚴肅な人生の觀方が出てゐる點が青年讀者を引つけた。恐らく自分のやうな讀者が外國の詩に直面した感じを受けたのは、此の時であつたらうと思ふ。しやれた美妙の小説的感興の詩篇よりは、重厚な無意氣なドイツ詩人の抒情詩が胸にひゞいたのであつた。

形式に就いても色々の試みがあつたが、それは美妙齋に比べて特に目新しいものは無い。八七、十十、七七、七五七、七七七など交錯して用ひられてはあるが、畢竟音數律の範圍内の變化である。此の點の研究は後々までも續くけれども、格別の成績は得られないで今日に至つてゐる。中西梅花、岩野泡鳴、薄田泣菫等の努力は認められるが、詩歌の形式の上では明治の晩年に於ける口語詩自由詩の出現に至るまで、大なる變遷

意義ある現象はなかつたと言つてよろしい。

用語と格調とは別に問題ではなかつたが主觀抒情の新傾向を誘致し、短歌以外の新抒情詩を生み出した一件は、可なり重大な事實である。宮崎湖處子、中西梅花、矢崎北邨散士、戸川殘花、大西操山、磯貝雲峰、岩野泡鳴、北村透谷、馬場孤蝶等は、二十六年頃迄に現はれた作家で、國民の友を始め女學雜誌、日本評論、文庫、文學界等を舞臺としてゐた。個人の詩集の出たものは、大和田建樹の「いさり火」が二十二年で、最も古いのであるが、梅花の「新休梅花詩集」は二十四年で、新しい詩集で一人の作を出したものの最初である。

湖處子の「歸省」にある數首は、本文に比べると光がないが、純情の少年の心にはよくはいつた。梅花と雲峰とは狂詩人の肌合で、才氣は認められる。透谷は理想家でロマンチストで、悲痛な厭世の情感を熱烈な口調

で詠出した天成の詩人であるが、その作品だけに就いて見れば、彼れの評論ほど壓力をもつてゐない。梅花や殘花に比べて勝るとは言はれないのである。然しながら彼れの生活とピッタリ即いてゐる點に於いて、詩人の制作といふことを忘れしめるほど眞實の强みが出てゐる。彼れの新体詩は雜誌「文學界」の体裁や中身の新らしい味と共に、當年の若い讀者に忘れられないものになつてゐる。彼れの作には「蓬萊曲」など劇詩の体を取つた長篇もあるが、楚々たる情趣が逆つて愛誦すべきものは短篇の抒情詩である。

ゆふべの光をさまりて　　まづ暮れかゝる草陰に
わづかに影を點せども　　なほ身を恥づるけしきあり。

羽虫を逐うて細川の　淺瀬をはしる若鮎が
靜まる頃や螢火は　低く水邊をわたり行く
腐草に生を享くる身の　かなしや月に照されて
もとの草へもかへらずに　たちまち空に消えにけり。

此の「螢」を始め、「蝶のゆくへ」「双蝶のわかれ」「眠れる蝶」「行だふれ」等は、二十七年の「透谷集」に收められた小品である。

新体詩はやつと我國の詩歌の間に地步を占めるやうになつたが、その創始者の考へてゐるのとちがつたものが出來たかも知らぬ。西洋の詩篇と匹敵のものといふ段になると、まだ物足りぬ。萬葉の長歌が奈良時代に有つてゐた地位にすらまだ上り得てはゐない。島崎藤村が現はれた二

十八九年の頃までは、この有樣で過ぎた。その間に國歌そのものに對する自覺が起つて、子規の革新運動が成功した。落合直文等に根ざして與謝野鐵幹等に育てられた抒情短歌も出來た。もう新休詩だけの世界ではなかつた。

二十八年「帝國文學」が出て、落合直文の流を英獨の詩風で行つた古典詩が現はれ、續いて土井晩翠の漢詩の格調を以上のものに加へたのが出た。「國民の友」の詩人には國木田獨歩、松岡國男、田山花袋、太田玉茗等の新顏が見えた。歌人鐵幹も俳人子規も詩に手を染めた。三十年に至つて新休詩は確實に一分野を占める文壇の勢力になつてしまつた。その間に頭角を拔いたのは「文學界」の後進藤村と、「帝國文學」の新進晩翠とであつた。

自分は「若菜集」の初版と「天地有情」の初版とを今も座右に置いて、當年の思出に耽ることがある。これらの作を得ては、もう西洋の詩歌を羨むに

及ばないこととなつたのである。これは決して自惚れでない。買被つてゐる外國の雄篇大作なるものを、忌憚なく批判すれば、誰しも直ちに理解するところである。これらの集をくりかへすと、すゞろに青年の浪漫的情感、詩歌時代の空想、新文學の朝の光が自分の心に蘇るのである。

六　小說界の進境

明治二十八年の終に、雜誌「文藝俱樂部」の特別號に「閨秀小說」といふのが出されて、當年一時に輩出した女流小說家を網羅した短篇集が現はれた。口繪に誌上十二名の作者の寫眞が小さく菊版一頁に銅版細目で刷り出されてあつたと記憶する。揭載せられた閨秀は、三宅花圃、樋口一葉、若松賤子、小金井喜美子、北田薄氷、田澤稻舟、大塚楠緒子等であつて、二三を除くの外は皆妙齡未婚の女流作家であつた。

自分が一葉の名を知つたのは、此の雜誌の上で群を拔いて光つてゐる「十三夜」の作を見てからであるが、彼女の世に現はれたのは、それより三年前の二十五年のことである。當時既に七篇の作があつて、その中「埋れ

木」といふのが「都の花」に發表せられたのである。その後も、「文學界」や「文藝倶樂部」に掲げられたものが數篇に上つてゐるけれども、中學時代の少年であつた自分には、全く知るよしもなかつた。「十三夜」と同年に、「たけくらべ」が「文學界」に連載せられ、「行雲」が「太陽」に出で、「にごり江」が「文藝倶樂部」に現はれて、盛名俄に世に知られたのであるが、自分が本當にしみじみと讀んだのは、やはり「十三夜」が初めであつた。


樋口一葉（下村爲山畫）

才華開いて僅かに四年、二十五歲の若さで惜い夭死をしたのは、翌二十九年のことであつて、三十一年に「全集」が出たが、其の頃はもう當代第一流の作家として、推しも推されもせぬ地位に置かれてゐたから、文豪

崇拜に傾き易い青年時代の自分は、直ぐに之を買求めて二十餘の短篇を一氣に讀んだものである。菊版假綴で表紙に薄紫の地に桐の一葉を散らした極めて質素な仕立の本を、ひどくなつかしんで幾度となく繙いたことを記憶する。

著作の年次を追うて讀んで行くと、一葉の文章は、最初は西鶴を學んで紅葉露伴等の作に見えるやうな雅俗折衷体であつたことが知られる。蓋し一葉は先輩作家として最も露伴に私淑したもので、その題材も亦露伴の好んで取扱ふ藝術家風の熱血兒で、意氣あり張りあるロマンチストを取つたのである。然しながら、一作毎に躍進して遂に獨自の境界を開き、文は平正にして而も氣のきいた名品になり、題材は廣く人生の現實に蹈み入り、態度は客觀的に深く見、平かに眺めるやうになり、紅葉露伴の圏外に地步を占めるに至つたのである。

一葉の文体は淸楚な雅俗折衷で一貫してゐるが、若し幾年か生き伸びたら必ず行詰つて來たであらうと考へられる。彼れの作風を推進めて行くと、どうしても口語体にならなければならないからである。其の素養が古典文學で出來てゐるのであるから、習熟した文語驅使の能力を捨てかねたのであらうが、題材が現代生活の實相に觸れて來れば、畢竟その文体をも改革しなければならなくなるのである。

一葉の小說は日本の女を描いた小說である。特に舊時代の遺風で取扱はれてゐる明治の女を寫した小說である。女性の靈が境遇によつて虐げられる時、如何に變化發展するものかといふことを描いて、其の頃までの日本の女が、女に生れた悲哀を訴へてゐるのである。「行雲」の中に「二葉の新芽に雪霜の降りかゝりて、これでも伸びるかと抑へるやうな仕方」といつてゐるが、こんな世の中に處して「まゝならぬ憂き世」とかこつだけな

ら、甚だお手輕に濟むのであるが、婦人の自覺が間近に迫つてゐる明治の女、天才的な作者自身のやうな女、勝氣で一節ある女などは、到底唯では濟まない。昔なら遁世したかも知れぬ、又自害したかもわからぬが、一葉の小說では、人知れず流し盡した淚の目を痛ましく見開いて、悲壯な諦めをしてゐるやうである。此の諦めは、無論聖僧のやうな達觀でなく、無教養の者にあり勝ちの自暴自棄でもなく、全く異常な悲劇的な忍從である。その忍從の種々相を描いて、かゝる人生の消息を寫し出したのが、即ち一葉の小說である。「十三夜」や「われから」もさうであるが、特に「濁江」と「わかれ道」とが著しい例である。

一葉がまだうら若い良家の女でありながら、こんな世相の表裏を剔つた作品を出したので、當時その閱歷に關して色々の噂を立てたものであるが、これは立てる方が間違つてゐるので、一葉の詩人であり文學者で

あることを忘れたものの言分である。然しながらこれらの作品の成り立ちは、やはり作者の閲歴に關係があるので、良家の女であつても、世間知らずのお孃樣ではなく、幼少の中から既に世路の辛酸を嘗めてるたが故に、苦勞は人並以上にしてるるわけで、斯やうな世相人情を觀察する機會にも遭へば、之を受用し判斷する頭も出來てゐたのである。一家の貧苦は先づ作者を世帶の苦勞に投込んだのであるが、親戚の不幸は更に作者をして世の中の醜い裏を見しめるやうにし向けた。生計を立てる道として思ひ切つて文筆の方を選ぶと、第一に經濟上の壓迫を受け、次に師たる人や同門學友の叱責と惡聲とを被り、又世間からもあらぬ難くせをつけられ、更に文壇では思ひがけない嫉妬と嘲罵とを受けて、一葉は全く立つ瀨がなかつたのである。斯うした複雜な閲歷を有つてゐるが故に、見聞の範圍が良家の處女には珍らしく暗黑方面にまでも行亘つたわ

けである。あの惻々と讀者に迫る强い底力は、實に此の閲歷の賜であつて、作品の權威は、その題材が主に直接の見聞であり、變化の多かつた作者の生活の中から出たものであり、すべてが體驗の裏づけがしてあり、現實の土臺が築いてあるところに存するのである。

一葉の作が現實といふ土臺をしつかり蹈まへてゐることは、右に述べた通りであるが、人生の觀方が略ぼ一定してゐるが故に、人物や事件の選擇の上に一つの傾向を作る處れが無いではない。「濁江」や「わかれ道」は、即ち此の傾向の代表的の作品といふべきである。獨り「たけくらべ」は、作者の眼前に擴がつてゐる人生を、そのまゝに說明もせず批評も加へないで、生き〳〵と描寫して、寂しい人生の哀愁味をその中に髣髴と現はし出した類例の少い作である。一休の風俗餘所と變りて、少年少女のませかた恐しい市井の一廓を舞臺とし、春は櫻の賑ひ秋は仁和賀の折々に、

かたみにくらべ來し振分髮の子女を登場人物としたもので、作者が下谷區龍泉寺町に寓居してゐた頃の見聞を題材とした短篇である。此の特色のある少年の世界を、開くがまゝに開かしめ、展ぶるがまゝに展びしめて、始末もつけず解釋もしないでしみじみと描き現はした作である。「濁江」や「わかれ道」にはふりしぼる熱涙があるが、これにはふりしぼつた後に見る寂しいほゝゑみがある、ものの靜かな觀照がある。一葉の作の中に類例が少いのみならず、明治の文壇の進境を記念すべき珍らしい作品である。

「一葉全集」は明治四十五年に增訂せられて、創作の外に日常の記錄を併せて出版せられた。日記は本來公刊すべきものでないかも知れないが、作家の研究には最も貴重な材料の一である。此の日記出でて一葉の褒貶が一しきり賑つたが、槪して失望の聲が多かつたやうである。それは當

時ちやうど自然主義の文學論の榮えた頃であり、婦人自覺の唱へられた時であつたから、其の見地に立脚して一葉を取扱はうとした誤りに由るのである。むしろ一葉の生活の如實に見られるのを便として、かゝる資料の出現を喜ぶべきであつて、その窮厄と窮厄の中になした勵精とが第一に注目せられ、萠え出たばかりでつゝましくも胸の中に秘め終つた戀心が第二に注意せられ　最後に文學者としての日常生活がうかゞはれる。いづれも此の日記に非ずば知られないことである。

就中文學の人としての一葉に關する記事は、最も貴むべきものである。日記によると、一葉が何ものにも代へられないとしてゐるものは、やはり文章のこと文學のことであつて、針仕事に夜を更かし、生業の苦心に夜を明かしても尙ほ讀書を怠らず、圖書館通ひを止めず、偏に文學のため創作のために努めた。人一倍家を思ひ母を思ひ妹を思ひ、又戀愛に關

して苦悶することも一通りではなかつたが、それでも文學の創作に關する一念は、尙ほそれよりも強く心胸を壓して起つたのである。日記を書き始めた動機なども、文章練習の方便といふ點にあつたやうである。

だから始めて自作の小說が新聞に載つた時の感想なども、純眞にして嚴肅、全生活の中最も眞劍な努力であることを示してゐる。著作の筆を執つても、思ふ樣に行かない時に、ふと自信を失つてしまひさうになる深刻な惱も起るのである。營利の爲の筆となら、かう苦しむにも當るまいが、さうかと言つて母子三人の口過ぎの爲と決めれば、心の外に文を賣るといふものだとも記してゐる。小說に筆を染めた時師と賴んだ人で、同時に其のうぶな娘心を動搖せしめた人である半井桃水に對しても、戀の情に悶えながらも其の作品の批判になると、盲目にはなれなかつた。桃水から新作「胡沙吹風」を贈られた時、之を限なくなつかしみつゝも、作

風が讀本ぶりであきたらぬと言つてゐるのである。

和歌の方ではとう〳〵舊套を出ないでゐたけれども、小説の方面では恐ろしいほど透徹した覺醒が見られる。現代生活を現代語で描寫する作の價値を主張し、川上眉山の作風に一轉化を要求する等、その片鱗を示すものである。文名高くなつて慕ひよる者うるさい程になつても、尙ほ自省の眼を睜つて自惚れないのである。二十八年十月の水上日記にいふ。

これも眼前の烟なるべく、昨日の我と何事のちがひかあらん。小説書く文作る。唯是れ七つの子供の昔より思ひ還きつることのその片はしをもらせるのみ。……今は我身のかゝる名得つる如く、やがて秋風立たんほどは、忽ち野末に顧るものなかるべき運命、あやしう心細うもあることかな。……

同十一月の記事にいふ。

恐しき世の波風にこれより我身の漂はんなれや。思ふも悲しきは、やう〳〵幼子の境界を離れて、爭ひしげき世に交るなりけり。名上りて唯春の花の榮ある如く見ゆるものから、淺ましきはその底に潜めるさま〳〵なりけり。女流の第一人よ、紫淸の再誕よともてはやせど、もと學なく文なく、昨年の今頃は大音寺前に一文菓子並べて身過ぎせしものなり。よしや一時の光を放つとも空しき名のみ。我より學才の勝れりし嵯峨の舍美妙齋の末路を見よ。

此の强い自省、徹底した自覺は、天性の内氣なところからばかり來るものでない、具さに嘗めた世路の辛酸から体得したものである。こんな謙虛な人にも、名高ければ嫉みが加はつて、「友のねたみ、師の憤り憎みなど限りも無く出で來つる」有樣で、二十九年五月の日記に、「そも〳〵の始より、うき世にけがれの名を取らじ、世の人なみにはあるまじの思

ひなりしを……」とうちうめくこともあつたのである。かうして此の年十一月、世間の賞讃と嫉妬との中に、小說壇に新しい生命を吹き込んだ不朽の功績を殘して世を辭した。

七　狂飈時代

新しいものの建設といふことはなまやさしい事ではない。透谷が流星のやうに生滅し去つてから約十年、文壇革新のために戰ふ人が今に絶えない。絶えないのは翹望するものが得られないからである。時代は變化し、進歩する。特に當時の變化と進歩とは急激を極めてゐる。百年を十年に縮め、二百年を二十年に搾つた速かさである。此の迅速な進歩、急激な變化に會つては、追求するところの理想も先きへ先きへと伸びる。文壇の新建設は刻々に高く廣く大きく深くなることを要求せられる。動搖ははてしなく、革新の戰は止む時を知らぬ有樣である。

特に此の事の甚しかつたのは日露戰爭の前後である。思想界には從來

見ることの出來なかつた大なる動搖があつた。文藝界には其頃までの狀勢を一擧に破壞したやうな大なる混亂があつた。人々の心には今日まで經驗しなかつた不安と重苦しさとがあつた。國運は益々伸張した。文明は益々進步した。生活は益々向上した。それにつれて國民の內面生活が一層の複雜と混亂とを增して來たのである。

物質生活が內面生活に及ぼす影響は、案外夥しいものである。世間がせち辛くなると生活が眞面目になり、人間が嚴肅になる。人は困つて來ると、始めてこれまで考へなかつたことをも考へるやうになり、愈々行詰まつて來ると、始めてこれまで觀なかつたことも見えて來る。これは決して貧乏を意味するのでない。生活の危機に臨むのは貧富の如何によるのでない。貧乏は貧乏なりに、ウカウカと暮すことの出來た昔は、むしろ仕合せであつた。今日は富が增し世が開けて、却つてせち辛くなつ

た。生活は遊戯でなくて眞劍な努力になつた。これまで見もせず考へもしなかつた事物の眞相に、ハタと面接するやうになつたのである。

字を知るは憂を知るの始めといふのは、古い言草ではあるが味ひの深い言葉である。まこと學問が發達すると、人間が嚴肅になるべき筈のものである。これまで知らなかつた自然や人生の事實を知つて來ると、嬉しい事も多いが、その代りに悲しいことも澤山に現はれて來る。わけても科學の異常な進歩が人間の內面生活に影響を與へたことは一通りでない。科學は事實の學問である。事物の實相を究明するを目的とする學問である。これが發達して來れば、否でも應でも事物の眞相に透徹の眼を見開かねばならなくなる。

外國文物の輸入は、明治維新以來日に月に盛んになつて來た事ではあるが、國民の內面生活に深刻な關係を有つやうになつたのは最近の事實

である。衣食住に關する事などはさて措いて、學問文藝などに就いて見ると、これまで我が國民に採られたものは、先づ厚生利用の學問、でなければ世俗超越の學問であり、教訓寓意の文學、でなければ天上憧憬の詩歌であつた。事物の眞實相を見せるといふ點から言へば、稍距離のある學問であり、文藝であつた。然るに此の頃になると、これまで厚生利用にばかり使はれた科學も、追々事物の本體につき込んでその實相を明かにしようとし、これまで世俗と沒交渉の別世界に立籠つてゐた哲學も、段々實生活の問題に觸れて來て、從來肉體を離れて天上にフワフワしてゐた心靈を地上に引ずり下ろして、仔細に其の眞相を究めようとした。御伽話だの、政治小說だの、學術小說だの、歷史小說だのといふやうな、役に立つことを目的としてゐた文學も、人間といふものの赤裸な相、社會といふもののむき出しな狀態を描くのを主とするやうになり、天に在

つては星、地に在つては花、人に在つては愛など高尚がつた詩歌も、人生のどん底に掘込んだ殺風景なきたない作品になつて、何れも事物の眞相を露骨に描寫究明したものになつて來た。

例を文學に取つて見ると、西洋文學の中でも、古典文學や浪漫文學に比べて、近代の文學は一般に眞相暴露の文學と言へるし、英國文學に比べて大陸文學は、一般に實相描出の文學と言へる。その近代の文學、特に大陸の近代文學が、丁度此の頃盛んに輸入せられたのである。戰爭の相手がロシヤであつたといふことが、とりわけ此種の文學を取入れるのに好い機縁になつた。無論大陸の近代文學の我が國に傳へられたのは、決して今日に始まつた事ではない。ツルゲネーフは明治二十年の昔から知られ、ドストエフスキーは二十五年に既に譯されてゐる。トルストイは二十四年頃から大分詳しく紹介せられ、プーシキンその他の近代作家

は二十六七年の交に矢崎嵯峨の舍が「櫻草紙」に紹介してゐる。然しながら當時の文學社會のこれらに對する理解のし方はまだ〳〵出來てゐない。ロシヤの現實が大膽に暴露せられてゐる點などに着目する者は殆ど無く、ロシヤの社會の眞相を描寫した點などはわからずじまひであつた。ロシヤ文學や其他の大陸近代文學を讀んで、その本當の味ひをしみ〴〵味つて、現實暴露の痛切ぶりを深く感受し得たのは、やつと此の頃のことである。

敎化の發達は人間に小智慧をつける。維新以來敎育普及の努力が追々効果を結んで來た。敎育を施すといふことは、その方針の如何に係はらず、人々の眼を明るくし、物の見分けをつけるやうにならしめるものである。まして明治の敎育は物質文化普及の敎育、科學偏重の敎育であつたから、何よりも先づ人の知力を進めずにはおかなかつた。無知のまゝ

で置き、愚昧のまゝで抛つて置けば、世間は無事に濟むのであるが。人間が聰明になると段々口やかましくなる。何事もあなたまかせにするやうな盲目的信仰や、一酌の酒で陶々と醉つぱらつて善い御機嫌で太平樂な詩でもならべるやうなおめでたさや、偉人だの戀人だのの前に自我を置忘れにして拜跪するやうな敬虔さや、これらの類がすつかり無くなつて、その代りに、何事に對しても懷疑の眼を光らして其の奥底をも見逃すまいとし、何物に對しても批判の眼を尖らして其の裏面をも見露はさうとする。醒めた心で自我を押し立てて、何處までも我見を通さなければ承知しない。主我の念は日に益々强くなつて、目をつぶつて濟ますの、歸依渴仰するのといふやうな態度にはどうしても出られない。かうして萬事に眞相の究明を求めるのである。

以上列擧した諸々の現象は、總べて日露戰役前後に熟し來つた事ども

であつて、事情は色々趣を異にしてはゐるけれども、共通するところは、事物の眞相にぶつつかり實相を觀察するやうになつたことである。彼の思想界の動搖、文藝界の混亂は、直接間接に此の事實に關聯する。

當時の狀勢は、今から顧みても多大の興味がある。先づ思想界でいはゆる思想問題なるものが論議せられて、人間生活の上に眞劍な意義をもつやうになつて來た。思想に關する論議が始めて起つたといふのではない。人間の實生活の上の直接の問題として眞劍に論議せられたのは此の頃からだといふのである。學者が學問として論じるのでなく、宗教家が教說の上から議するのでなく、銘々の生活そのものの上に密接な關係をもつ事柄として取扱はれるに至つたのである。當時中江兆民が不起の病床にあつて「一年有半」を著し、黑岩淚香が「天人論」を著し、共に非常の人氣で馬鹿に賣れたものである。大正十三年の今日から見ればをかしくも思

へるが、それでも二書共に他人の翻譯や受賣でなくて、著者自身の體驗から得たものであつた。近藤燕處の「仰臥三年」もその類であるが、よほど思索的の深さが加はつてゐるし、清澤滿之の雜誌精神界に述べた言說(全集に出づ)になると、佛教界の新人が本當に惱んだ魂の有樣を、なまのままで紙上にさらしたやうな眞劍さがあつた。綱島梁川が「宗教的眞理」を說き「見神の實驗」を述べた頃になると、此の傾向が殆ど頂點に達したと言つてよい程に高潮して來た。彼所にも此所にも、神を見た佛に出遭つた、いや我は神なり佛なりと名乘りを上げる連中が出て來て、一時は出來立ての神樣や自覺者が鼻をつき合せる程大勢現はれたのである。從つてこれに關する是非の論が、又一しきりはづんだことはいふまでもない。心靈問題や人生問題の解決に苦しんで自殺するものもポツ〳〵あつて、華嚴瀑上の「巖頭の感」なども此の頃に書かれた。かう病的になつては聊か利

き過ぎた嫌ひがあるけれども、いはゆる健全な向きに於いても、宗教、倫理、哲學、文藝の諸問題が眞面目に論議せられたのである。

眞面目であり眞劍である。然しながら、各種の主義が何等の系統もなく歴史もなく、順序もなく組織もなく、勝手次第に並べ立てられたのであるから、唯心論も唯物論も、主觀思想も客觀思想も一所に持出され、神秘主義と功利主義とが隣合せをしたり、無神論と無我說とが同居したり、個人主義と國家主義とが一座したりするやうな奇妙な現象があつたが、銘々は皆本氣になつて自分自身の問題として論議してゐるのであつた。而して此の思想界全般の惱み、史上稀に見る精神的大動搖の眞中にあつて、此の時代の象徵のやうに立つてゐたのは、即ち高山樗牛であつた。

……………………

樗牛の死んだのは三十五年であつたが、晩年二三年に亘る言說は、よ

く時代の懊惱を現はしてゐる。「人生は價値なり、價値は我自らの創造するところなり」と說いたのをはじめ、「美的生活論」で當時の青年の血を湧かしたのや、淸盛ロ蓮をかつぎ出して凡俗世界に對する反抗の聲を擧げたのなどは、時代に磅礴してゐた主我思想を代表してゐる觀があるし、ニイチエを說き、文明批評家としての文學者を論じ、個人の權威、本能の力、天才の偉貴を呼號したのなどは、卽ち時代の個人主義的思想を代辯してゐるやうなものである。又彼れがホイツトマンを說き、現實尊重を主張し、眞の追求を論じたのなどは、卽ち同じ時代に存した現實主義的思想の大きな見本である。かうして一寸見ると兩立することの出來ぬやうな二つのものが一つ所に收まつてゐて、多くの矛盾を包んでゐるが、その矛盾を藏してゐるところに、當年思想界の代表者として見られる點があるのである。

此の混沌とした狀態は、事物の眞相を觀るやうになつて、從來の見方のはかなく崩れ去つたところから出來上つたもので、取りも直さず幻滅の慘狀を現はしてゐるわけである。とにもかくにもこれまで有つてゐた信仰を失つてしまひ、安立の地を亡くしてしまつた心靈上の亡者共が、何かつかまへ所が欲しい、便りどころがもちたいで、探しまはつてゐるせつない場面である。而してその今まで有つてゐたものが虚妄だと知つた時に、新しく求めるものはどうしても實なるもの現なるもの眞なるものでなければならぬ。銘々に勝手な要求をもち出してゐるが、その奧底に動いてゐる基調基色は、即ちこんなところに存する。眞、現實、實行、彼等のねらひ所はこゝである。樗牛の言說なども一見矛盾に滿ちてゐるやうに思へるけれども、その要求をつきつめて行くと、やつぱりこゝに落ちるのである。「近代主義の文學」といふことを說いて當年の文壇に要求

したところなどは、正しくこれであつた。

次に文藝界に就いて見る。其の頃まで小説界の王者であつた硯友社の作家は、パッタリ行詰まつてしまつた。尾崎紅葉は考へ直し出直して、「金色夜叉」に手をつけたが、少々勝手が違ふのでひどくもて餘した。廣津柳浪は折角心理描寫の善いものを見せてゐたのに、感ずるところあつて創作を止めてしまひ、泉鏡花は横道に外れて、怪談の小さな城に立籠つてしまつた。最も有望であつた川上眉山は、創作上の惱みから氣の毒な最後を遂げた。斯うしてこれまであつた大なる勢力が倒れはしたが、さてどんなものが代つて出たかとなると、それは實に混亂を極めたものであつた。

新体詩に就いて見ても、一方で土井晩翠や島崎藤村などのやうな古典的或は浪漫的の抒情詩が行はれるかと思ふと、他方で新詩社の雜誌「明星」

に見えるやうな史實を題材にした敍事詩が行はれ、一方で蒲原有明や岩野泡鳴のやうな冥想的神秘的な象徴詩風の作が出るかと思ふと、他方では四行六行の短曲や童謠俗謠風の小曲がもてはやされ、それらのいづれが現在の人心を支配するのか、又將來の好尙を維いて行くのか、まるで見當がつかなかつた。

小說に就いて見ても、多數の新作家が輩出して、德富蘆花や柳川春葉のやうな家庭小說も出れば、木下尙江などのやうな社會小說も出る、小杉天外のやうな寫實的なのもあれば、德田秋聲小栗風葉のやうな自然主義的なのもあるといふ有樣で、斯界の主潮が何所を流れてゐるかは、容易に見極めのつくものではなかつた。以上述べたやうな現象は、ひとり新体詩や小說の上だけでなく、他の詩歌にも戯曲にも見えてゐるので、文學界全般に價値の顚倒をやつたり、新陳代謝をやつたり、暗中摸索の

不安な氣分が漲つてゐた。我が文學史上に、若しスツルム・ウンド・ドラングと言ふべき時代があるとするならば、それは正しく此の時期を推すのが妥當である。

混亂は殆んど極度に達してゐると言へるわけであるが、その中におのづから一味の共通點がある。それは即ち事物の實相を觀るといふ一つの時代思潮から生れた現實描寫の精神である。從來の文學と雖も寫實主義の作はあつた。然しながら從來の寫實は、外面的な事物の寫實に過ぎないので、衣服の縞柄や猪口の持方の寫實、目鼻のつき方や髮のちゞれ方の寫實に腐心しただけである。此頃の實相描寫といふのは、主として内面寫實を意味するので、生活そのものの寫實、ライフの意味を底深く掘り入つてその奥を見極めようといふ寫實である。樗牛が近代主義の文學を提唱したのは、丁度此の共通の要求を代辯したやうな形になつてゐて、

甚だ意味深い事實であつた。

樗牛のいふには、「近代主義の文學は美を求めるものでなくて眞を求める。空想を描くのでなくて現實を寫すものである。ホイットマン等の文學が我々の生活に切實の感を與へるのは、此の特質があるからである。我が國の文學も亦將來此の道を歩まねばならぬ。」此の言説に見える精神は、即ち現實思想の徹底といふ點にあるので、ニイチエをかつぎ出したのも、ニイチエがドイツの現實を暴露して其の眞相に切込んだ痛切さを讃美したのである。無論ニイチエが從來のものを破壞して新しいものを打建てようとする意氣の壯烈なのに共鳴したのでもあるが、その直接の目的とするところは、專ら當時の文學者のまだ現實の重みの足りないのを鞭つて、もつと人生を知り、もつと社會を知り、もつと修養を積み、もつと深みを有つやうにならしめることに存するのであつた。

斯うして思想界も文藝界も、共に動搖し混亂してゐたが、動搖し混亂しながら共の中から生れ出づるものは、畧ほ同じやうな色調を帶びてゐた。我が國の近代文學は此の動亂の中から生れたのである。

八　近代文學の樹立

文學界の黎明期も可なり長かつた。我が國の近代**文學**は前節に述べた大動搖の後に始めて樹立された。人生の摸寫といふことが唱へられてから二十年、ライフの精緻な探究が試みられてから十八年、生命の眞劍な研究が叫ばれてから十五年、實生活の描寫といふことが努められてから十三年。かうして**文學**の主潮が現實へ現實へと流れて來た。眞へ眞へと進んで來た。今日からふりかへつて見ると、一一**文學**的生長の筋道を跡づけることが出來る。

明治四十一年に出た小說に「妻」といふのがある。田山花袋の作である。中村と名づける**文學**者を主人公として、その**文學**的生活の動搖と懊惱と

を描いたものである。

曾てバイロンやウォルヅウォルスやハイネなどで、新しい藝術に對する憧憬の情を滿足せしめてゐた中村も、その友人である早川や西も、青年期の華々しい時節が追々終りを告げかけるに及んで、事物に對する考へ方が變つて來た。高い淸い理想に生きてゐた彼等の考は、實地の事物に觸れて忽ち壞されてしまつた。ツルゲネーフ、ズーデルマン、イブセンを讀んでゐた西は、詩人とか小說家とか特別のものとして生活するよりも、先づ人間として生活したいと言ひ出した。これまでは空想を取扱つてゐてそれで事足りてゐたけれども、今ではそれで濟まされなくなつた。中村は自分の思想にはもう黴が生へて來るし、文章も唯形式的に空疎なことを書列ねるに過ぎないものであつたことを悟るやうになつた。或時は世人が自分を滅さうとしてゐるのではないかと思ひ附くほど自信

を失つた。そこで西に蹴まされて輓近の海外文學を專念に讀習した。西の書架にゾラ、ドーデー、フローベール、ツルゲネーフ、トルストイなどの有つたのを見て、自分も丸善の二階を獵り出した。さうしてゐる中に妻を得た。子が出來た。實際生活の波に觸れて、始めて現實といふものに親しく顏を合したやうに感じた。本當の生活、眞實の生活はこれからだと自覺した。世間でも此の時丁度個人主義の思想が頭を擡げて來て、杉山の主張したニイチエ主義は、思想界文藝界を根柢から搖動かした。善惡標準の轉換、奴隷道德の超越、强者の世界、超人の出現を叫んで起つたニイチエは誠にえらい。自分はこれに比べて何たる弱さだつたらう。弱かつたがために、天賦の大なる力を縱橫無礙に發展せしめることが出來なかつたのである。地上に在りながら天上の星ばかり憧がれ望んでゐたのである。取りも直さず虛僞の生活をしてゐたのである。今からは地

べたの上の一生物であるといふことに甘んじて、眞實に自然に、眞の心眞の力の現はれるやうに生活しよう。中村はつくづくかう考へて友人の田邊に話して見ると、田邊も亦そんなことを考へてゐたやうであつた。

これは作者花袋の動搖ぶりを描いたものであるが、正に當時の文壇全体の狀勢を見るべき一つの標本としてよろしい。そして大勢の赴くところが何れにあつたかを觀測するにも適してゐる。然らば此の動搖混亂はどう落附いたか。

第一に觀察せられるものは人生觀の變化であつて、これまで有つてゐた萬物の靈たる誇りを棄てて、地上の一動物たるに甘んずるに至つた點である。第二には生活そのものの變化であつて、儀容の皮挍巧の衣を脫ぎ捨てて、眞率自然の生活を撤底せしめようとする點である。第三に藝術制作の態度に於いて、これまでと違つて自己の生活そのまゝを力強く

赤裸に大膽に表現することである。而してこれら三つの事柄を一貫して、その刺撃ともなり暗示ともなつたものは、西洋近代の大陸文學であつた。樗牛が七八年前に豫感してゐた內部自然の要求が、かうして文壇全般に擴まつて來たのである。いはゆる近代主義の文學、「眞」を描く文學が、我が國の創作界にも現はれるやうになつたのである。

花袋はこれまで取扱つたやうな甘つたるい少年男女の戀物語を捨てて、三十六年の「女教師」にハウプトマンの孤獨」の女主人公アンナのやうな人間を描いた頃から變りかけて、四十年に「蒲團」や「少女病」を書いた時には、もう彼れの新しい主張から出た露骨な描寫を試みてゐた。藤村もこれまで「若菜集」の新体詩に歌つたやうな題材で、「かなしいかなや」などと感傷してばかりもゐられなくなつて、三十九年に長篇小說「破戒」を作つた。

「破戒」の主人公は、信州の北部に特殊部落の人として生れた青年教師で

ある。彼れは共の素姓を恥としないやうな近代的の理知を具へてゐる。教師として生きるには、習俗に從つて素姓を隱してゐるに限る。素姓を明かすなとは亡父の固い戒めである。然しそれは一時の安きを偷む卑怯な生き方である。徹底を欲する青年の目覺めた心には、習俗を打破して本當の生き方をしようとする止み難い要求がある。此の本當の生き方を是とする醒めた知識と、まあ無事に過さうとする引込思案の感情との間に、苦しい爭鬪が絕えず行はれて、結局偷安の惱ましさに堪へないで、兒童の前に素姓を告白するのである。此の現實の眞相を包み隱すことに堪へきれないで、遂に之を暴露してしまふのが、即ち近頃の新しい傾向であつて、此の意味に於いて「破戒」は新精神を具象の事實で表現し得たものといへる。

藤村は續いて長篇小說「春」を書いたが、これは作者自身の閱歷と密接な關係のある、自敍傳見たいな作である。作者が青年の詩歌的感傷時代から、壯年の散文的現實的時代に入らうとする轉機を描いてゐる。青木駿一の死んだ頃まではさうでもなかつたが、その後境遇の上にも家族の上にも幾多の波瀾があつて、現實のなまなましい相を見せつけられるに從ひ、主人公岸本捨吉の心持はひどくぢみになつた。以前には趣味を同うし傾向を一つにして、お互の書きものに若い血を湧かした雜誌の同人にも、追々共鳴することが出來なくなつて、時々は雜誌に上る同人仲間の文章が、丸で別世界の音づれのやうな氣持さへするやうになつた。こんな事實を描寫してゐる點は、花袋の「妻」と同じく興味深い人生の實際の記錄である。

文壇に此の風潮が起ると、從來高名であつた作家の中には、此の變化

に應じて進展することが出來なくて、そのために文壇的壽命を失つたものが澤山ある。又その代りに從來知られなかつた作家、二流以下であつた作家の中に、俄かに認められ出して一躍大家に祭り上げられたものもあつた。國木田獨歩や德田秋聲などは後者の類である。

獨歩はその素質が詩人であり理想家であるが、その文學作品には常に眞實自然を描寫するのを旨として、不自然な作爲的な空想的な事物を取扱ふことを避けてゐた。從つて事實を重んじ經驗に立脚したものの外は書けなかつた。「牛肉と馬鈴薯」は三十四年に書いたものであるが、その頃から既に此の作風であつたのである。然るにそれが世に認められたのは、三十九年に短篇集「運命」を出した時であつて、「運命論者」だの「酒中日記」だの「女難」だのといふやうな舊作が、此の集に收められて再び世に出るに及んで、後ればせに名高くなつた。これには作者自身も少々驚いたことと思

はれる。

秋聲も始めから實生活に即した作風を取つてゐたが、硯友社の盛んな時代には、紅葉門下でありながら少しももてはやされなかつた。題材の範圍こそ狹くて特殊的であつたけれども、みじめな生活をしながらこれに執著してゐる樣子を描いた眞實味のあるものであつたから、同じく新時代に迎へられて俄かに大家になつた。三十九年の「おのが縛」を始めとして、「凋落」だの「黴」だの「爛れ」だの「あらくれ」だの、人生の暗黑面に於ける事實の斷片をつかみ出したやうな作が得意であつた。

かうした現象は詩歌界にも見えるので、與謝野晶子を中心とする新詩社の青年歌人が、雜誌「明星」に發表してゐた熱烈な然し大甘な抒情の歌は、戀と藝術と星と菫とに涙を流したので、星と菫といふ異名をつけられ、その名は後に家族合せといふおもちやのカードに名殘りを止めたのであ

るが、現實の强い壓迫は長くそのまゝには置かないで、晶子の歌も、求むる戀の惱みだの、求めて得たる誇りだの、得たる後の物足りなさだの、古來ありふれた戀の歌ばかりを詠じてゐないで、嫉妬や産前産後や夫婦喧嘩や衣食住の平凡事などを題材とするやうになつた。

新体詩に於いても、晩翠の現代離れのした懷古憑弔の詩は、星と菫の仲間入りはしなかつたけれども、現實の生活に卽した切實な感味をもつた詩でないことは新詩社の短歌と同樣であつたから、新興の文學とは步調が合はなくなつてしまつた。藤村は詩そのものを棄てて專ら散文の世界に逃げてしまつた。岩野泡鳴は引續き作つてゐる熱心家であるが、從來の作風が追々變つて、「悲戀悲歌」の集を出した頃になると、夫婦のいがみあひや嫉妬のさわぎ、墮胎や姦淫などの不倫事、喘息の苦惱や入墨の心持、總べて人生の暗黑面に存する事實を、包まず隱さず取入れて題材

とするものになつて來た。

俳句は詩歌の中で最も超然たる風姿を有つてゐる文學であるけれども、それでも此の潮流の渦を脫することは出來ないので、碧梧桐等の唱道したいはゆる新傾向の句や、荻原井泉水等の制作する雜誌「層雲」の句は、努めて實生活にこびりつき、實社會を寫生し、どこまでも現實の色を濃く出さうとしてゐるのである。

狂瀾時代の混沌の中に萠え上つた葦の芽のやうなものは、右に述べるやうな有樣で段々生長して來た。そして遂に文學界全部に行亘るやうになり、文壇の主潮として一世に漲るやうな勢を見せた。世間では之を自然主義の文學と言つた。蓋し西洋文學史上、十九世紀後半の文壇に榮えたNaturalismの文學と、略ぼ同樣の傾向を有つてゐたからである。此の名稱は必ずしも不都合でない。

然しながら我が國の自然主義の文學は、西洋大陸文學に於けるナチユラリズムの文學と同じ歴史から生れ出たものでない。彼の國のものと同じ文學史的變遷を經て來たものでない。我が國の二十世紀の文學は、西洋の文壇が、十八世紀以來一流れの歴史的順序を追うて次第に發展して來た各種の文學類を、同時に又同所に混然と雜然と所有してゐるのである。一方には十八世紀のクラシシズムに似たものがあり、他方には二十世紀の新ロマンチシズムに似たものがあり、十九世紀前半のロマンチシズムのやうなのがあるかと思ふと、それと入れまざつて十九世紀後半のナチユラリズムのやうなのがある。同じ作家の作風の變遷を見、評論家の言說の推移を見てゐると、新ロマンチシズムが先きに來てナチユラリズムが後れて出たり、新ロマンチシズムの主張を提げてナチユラリズムの目的に到達しようとしたり、性質の相反するものを同時に取上げて矛

盾を感じないでゐたりなどしたものである。だから西洋文學史の系統を之に當嵌めて作家評家を觀察すると、博學透徹の論評のやうに見えて、却つて本當の事情に疎い見當はづれの解釋に陷るのである。

樗牛の言說などは最も多くこの種の矛盾撞著を含んでゐたものである。絢爛の詞藻に眩惑し、意氣の奔放なのに共鳴して夢中になつてゐた讀者は、これを感知し發見することが出來なかつたけれども、頭の善い學者や評論家達は、よく之を指摘して頭の善さを誇つたものである。然しながらかう混沌として前後遲速の歷史を持たぬところが、即ち我が明治大正の文學の若々しいところで、まだ型にはまらぬ面白味のあるところである。頭の善い學者批評家より、矛盾だらけの樗牛の方が偉大であるといふのも、畢竟此の氣運を代表するからである。

新興の文學は、假令西洋文學の歷史を踏襲してゐなくとも、又假令西

洋文學の刺擊によつて出來上つたものであるにしても、とにかく從來の我が國に見ることの出來ぬ性質を帶びてゐる。我が國に文學あつて以來、此の種の文學程現實に卽したものは未だ曾てなく、又これ程空想を排斥したものも無かつた。眞を目標とする文學はこゝに始めて成立した。明治文學興つてこの方正に二十年、我が國の近代的文學は漸く形を成したのである。

九　新興の文學

二十世紀の文化は國境の別を破つてゐる。孤立して他國に交渉のない文化現象は、少くとも開明の國には見られない。明治大正の國文學は世界の文學と密接な交渉をもつてゐるので、日本だけを切離して國文學を說くといふことは、不可能の事になつた。わけても明治三十四五年頃以後の文學は、西洋近代文學の主なる潮流と相接觸して、その性質や特徵が殆んど相等しいと思へるものが出現するやうになつた。作家の態度といひ、作品の中心思想といひ、作中の人物といひ、近代の大陸文學と同じ空氣を吸ひ、同じ水に浴し、同じ惱みを惱み、同じ樂みを樂むと言つてもよろしいものが出て來た。我が國の文學はもはや西洋の近代文學の

理解なしには說けなくなつてゐる。

たゞに性質特徵が相接近したと言ふばかりでない。作品そのものの品位も、彼の國の大文學に對比することが出來るやうになつた。外來の刺擊は摸倣の繁昌を招致するのでなくて、國文學の水平線を高めるのに役立つたのである。文學は各種の文化現象の中で、最も實際生活に緣遠いものである。嗜みであり、趣味であり、閑事業であり、風流韻事である。こんな見方で見られた文學は、自然その品位や價値が低かつた。然し此の頃になると、もうそんなのんきな見方で看過してはゐられない。文學は政治經濟と同樣に、教育宗教と同樣に、勞働問題や人口問題と同樣に、外交や戰爭と同樣に、最も嚴肅な實際的意義をもつやうになつた。經世家も讀むべし、敎育者も知らなければならぬ、學者も企業家も、親達も兄姉達も、すべて眞劍に之を讀味つてゐなければならぬ。かういつたも

のに推進んで來たのである。此の實際的意義の重大になつたことは、一つは近代文學の性質から出てゐるのであるが、作品そのものの出來榮がよくなければ到底こゝまで行くことは出來ぬ。

新興の文學が右のやうな趣のものであるから、それが在來の文學と異なる點を考へる時には、勢ひ西洋近代の文學と相出入して觀察をしなければならぬ。題材にしても、制作の態度にしても、表現の形式にしても、それに暗示せられる思想にしても、いつも背景に西洋の近代文學が控へてゐるのであるから、これを引合に出さなければ徹底しない場合が少くない。

西洋の文學史では、十九世紀の前半には Romanticism の文學が行はれてゐたのであるが、後半には反動的に起つたやうな寫實的の性質の文學が榮えたといはれてゐる。此種の文學を Naturalism の文學と名づけてゐる

る。その名はフランスの小說家ゾラの作 Les Romanciers Naturalistes から取られたのだといふことである。その名の示す意義は極めて單純なやうであるが、內容は可なり複雜である。大體は前期のロマンチシズムに反動して起つたものであるが、總べてが相反してゐるわけでない。却つてその精神の著しい部分に於いて、前のものを繼承してゐると言つてよろしいのである。卽ち或部分は反動し、或る部分は繼承し、或部分は新しい分子を加へたわけである。

就中反動的に棄ててしまつた分子は、中古薄明の時代を憧憬して騎士と僧院と美人と勇者との物語に血を湧かすやうなことや、神と天國とを讃仰して地上人間の現實生活を賤しめるやうなことや、唯心主義理想主義の根柢に立つて、神秘を愛し情緒を重んじ美を尊び藝術にあこがれるやうなことなどである。次に以前のまゝに繼承した分子といふのは、因

襲を破り偶像を毀ちあらゆる教權を抛つことや、形式や法則に拘泥しないで專ら內容を取り、外在の條件や力を無視して直ちに內部の自我に殉ふことや、人爲人工を避けて原始的自然的無技巧的な事物を愛好することなどである。次に又新たに加はつた分子といふのは、知覺經驗に本づいた知識を尊び、科學的實驗的の知識を重んずることや、平凡尋常の現實生活を寫して醜惡を厭はず瑣末を嫌はないことや、汎神でなく唯一神でもなく、既成宗教を放下して無神虛無懷疑厭世の人世觀を立てることなどである。

此の流義で出來た文學は、大体に右のやうな性質をもつてゐるので、これに刺擊を受け暗示を得てゐる我國の文學も、おのづから此の色彩を帶びてゐる。

元來此の種の文學の著想の根本をなすものは、十九世紀文化の主なる

精神であるところの科學的精神である。十九世紀に於ける科學の驚くべき進歩は、學術のあらゆる部面に實驗實證の學風を起さしめた。哲學にも、心理學にも、倫理學にも、すべて此の傾向を有つた學說が唱へ出された。科學といふものはすべて既成の教權や信條に滿足しないで、直ちに實驗實證に取かゝつて新たに法則を發見しようと試みるものである。此の法則は空想の所要でもなく、迷信の賜物でもなく、正確な事實本當の經驗から得來つたものであるから、安心して採用すべき間違ひのないものである。而も其の法則は人間をも支配してゐるので、人間の言動、生活、歷史、運命等は、他の生物他の自然物と同樣に、すべて自然法則に從つて生起するのである。つまり人間と雖も一個の生物であり、一個の自然物であつて、人間生活なるものは、即ち此の一個の自然物が自然法則に從つて飮食し生殖し生老病死することに外ならぬ。色々の人事現

象は、或は物質と運動との物理法則により、或は遺傳と境遇との生理法則によつて必然的に起るので、人間の意志や靈魂によつて起るのではない。人間は自然の理法で定められた通りのプログラムを、一生涯汗みどろになつて演じ續ける役者であつて、自分で脚本を書く能力は與へられてない。不滅の靈魂だの、自由の意志だのといふものは、始めからないわけである。斯うした精神に立脚して考へると、こゝに一つの人生觀が作られる。

靈魂を否定してしまへば、殘るところは肉であり物質であつて、人間は自然法則といふ發動機によつて動かされる機械のやうなものである。戀の花さく美しい場面も、種屬保存のために自然が與へた本能といふものによつて、盲目的に機械的に他動的にあんなはめに陷らされてゐる喜劇の一場に過ぎぬので、愛したの惚れたのといふ自發的な現象ではない

のである。又意志の自由といふことを否定してしまへば、人間に責任といふことがなくなる。自己の言動はすべて外在的勢力によつて生起するので、內在自發のものでないのだから、假令罪惡を犯すことがあつても、それは遺傳や境遇や其他の自然法則のさせるわざであつて、人間の意志から出たことでない。かうなると人間は禽獸と大差がないので、種屬保存のために生殖の仕事さへ濟ませば、此の世にもはや用の無いものである。此のやうな人生觀は卽ち唯物的人生觀・機械的人生觀、科學的人生觀と言はれるものである。

此の種の人生觀によると、人間といふものは極めて馬鹿氣た役廻りのもので、何一つ自分の力で出來る事は無いのである。どんなにあせつてももがいても、行著くところはきめられてる。昔の詩人は「知らず何方より來つて何方へか往く」などと感傷したものであるが、それは問ふまで

もなくチヤンとわかつてゐる。人間の過去現在未來は科學的に究明せられてゐるので、不可思議でも何でもない。言はゞ一種の宿命を負うて生れ來り、宿命を負うて死に去るのである。ギリシヤ時代の運命觀は、人力の如何ともし難いものだといふ點だけがこれと似てゐるけれども、超自然の神秘不可思議の力であると認めてゐる點はこれと違ふ。ナチユラリズムの宿命なるものは、進步した科學の基礎に立つてゐるので、極めて自然な當然な明確な法則であつて、神秘でもなく不可思議でもない。

そこで又一種の人生觀が成り立つ。

世の中といふものが、若し果して右に述べたやうなものであるとすれば、甚だ感服しない厭なものである。さればと言つてその厭な世の中を破壞し改造することは、人力では出來ない相談である。そこで絕望の悲鳴が起り、どうでもなれの捨鉢な考も出る。厭世の念も起れば厭人の考

へも出る。他人が厭になるばかりでなく、自分をも厭に思ふやうになる。昔し屈原といふ詩人は、世の中總べてを否定しながら、「我一人清めり」と考へたけれども、若し退いて自己を正視したなら、誰でも愛想が盡きて忽ち自惚が無くなるはずである。かうなると世に生きがひのないことになるから、遁世か自殺か、何れにしても生活を棄却する方法を取るやうになる。然しそれは昔の文學に見える昔の觀方であつて、今の人間はさうはしない。飽くまで生きようとして未練がましくどこまでもこびりついてゐる。絶望しながらも生に執著して、齒切れのわるい不徹底な生き方をする。こんな時宗教家に相談したり、教育家に教を乞うたりすると、極めて安々と解決し、何の苦もなく説破してくれるけれども、無論それでは滿足することが出來ぬ。そこで無解決、無理想のまゝで生を續ける。此の人生觀は即ち厭世觀、宿命觀、決定論、虚無觀などと呼ばれるもの

である。

かやうな人生觀で文學の題材を選び、選んだ題材を取扱ふとなると、自然と一つの特徴が文學に現はれてくる。第一此の種の文學には作者の直接經驗の事實でなければ取上げない。好んで現前の人物や事件を題材にするのはそのためである。よく作者自身やその周圍の人物を取扱ふのはそのためである。モデル問題がもち上つて友人や親類が怒り出すやうな騷ぎの起るのは自然の結果である。作者は又日常平凡の事實を描いて、ヒロイックな生活を寫さない。近代の文明が人間を平等にし、デモクラチックにし、平凡にし　散文的にしたために、人生そのものが平凡であり散文的であるには相違ないが、特に此の種の文學ではこれを偏重するのである。

次に又人生の明るい美しい方面を寫さないで、暗い醜い方面を描くこ

とを努める。人間の眞相を割つて見ると、案外此の暗い醜い方が多いものではあるが、わけて近代に於ける現實生活の壓迫が强くなつてから、此の方面が露骨に見えて來たので、人生といふものの實相を描く時は、おのづから此の方面に傾くわけである。例へば人間の利慾から又は性慾から生れて來る獸的の生活や、主我の念から出る勝手氣儘な言動などは、此の種の文學によく取扱はれる題材である。前者の醜惡なことは言ふまでもないが、後者と雖も香ばしいものではない。近代生活の生存競爭の激しい中に自己を保存して行かうとする本能を基礎とするものではあるが、そのエゴイズムが甚しくなると、自己を擴張せんがために社會生活を無視するやうになる。平凡の徒は好い加減に妥協して行き、僞善の徒は假面を被つて順應して行き、强い者は憶面なく他をこき使つて、すべてを己が用に供して憚るところが無いのである。

次に又頽廢した病的な生活を題材にする。生理學者や解剖家の態度で近代生活を觀察すると、こんな題材は自然に取上げられるわけでもあるが、特に此の種の文學では、いはゆる健全な生活に比して遙に多大な感興を有つてゐることは爭はれない。近代科學的文明の弊として、人工人爲の力が人體の機關を退化せしめ、過度の勞役が人間を疲勞せしめ神經質にならしめる。遺傳と境遇とで人事現象を說明しようとする近代作家は、此の病的生活を題材にしないではゐられない。そこで神經の昂奮と體力の減退、精神病や惡性遺傳、都會病や疲勞倦怠、アンニュイ、デカダン、トスカ、世紀病、世紀末情調等、總べてロムブロソーやマックスノルダウの研究材料になるやうな人物なり事件なりを取つて來る。

以上述べたやうな題材を取り來つて、さてこれをどう扱ふか。作者の制作態度は如何。作者は先づその題材を十分に研究する。而してその研

究は客觀的科學的であつて、主觀的感情を排斥し、同情とか憐愍とか憎惡とか憤怒とか、これらは一切之を沒却し、全く受身の氣持になつて人生に應接する。次には心理生理病理に關する透徹の知力で、正確に精密に解剖する。時には理化學でやる實驗のやうなことまでもする。決して驚異したり、詠歎したり、感激したりしない。その結果は冷靜に嚴肅に人生の眞相を暴露することになつて、醜惡をも厭はず自分の事でも構はない始末になる。斯うして研究し闡明して後、始めて之を文學に表現する。表現するには、言ふまでもなく有りのまゝに、私意を加へず、誇張せず、精細に刻明に描出するのである。さうして人生に關する記錄、報告書を作製するのである。

新興の文學はこの人生記錄といふ重大な役目を勤めてゐる。これが即ち此の種の文學が社會的に地歩を占める所以であつて、經世家教育者が

看過することの出來ない理由もこゝに存する。無論明治三十五年乃至四十年の頃の文學が、全部ナチユラリズムの文學であるわけではないから、右に述べた通りの者ばかりだとは言へない。然しながら現實尊重の精神と、實相直寫の態度とは、あらゆる近代の文學に通じてゐる特色であるから、大体に於いて適用擴充して考へることが出來る。

一〇　口語体文章の創始

文學の題材と制作の態度とが、既に述べ來つた通りの大きな變化を遂げたとすると、之を表現する文章にもこれに應ずる革新が加へられなければならぬ。蓋し文學は表現を離れて成立するものでないから、題材や思想の變化は、必然的に表現の文章の變化を促すのである。

此の必然的の要求によつて生れた新しい文体は、即ち口語体文章であつて、先づ小説に用ひられ、續いて評論に及び、小品文に移り、散文詩に弘まつた。更に進んで詩歌にも口語及口語の語法を用ひるやうになつてゐる。新しい文學に於ける口語体の採用は止むにやまれぬ内部的必要から餘儀なくされたことで、その出發點は他の場合に於けるが如く、物

ずきや便宜からでなく、やさしいから骨が折れないからといふのでもなく、素養がなくて文語が操られないからといふのでもない。

口語体文章の創始、その弘通、及びその發展といふことは、明治大正の文學界に於ける最も著しい現象の一つであつて、文學の內容の變革と相並んで、過去の文學とキッパリ區別される要點になつてゐる。今を距ること三十年、此の体の創始せられた當時を追懷すると、本當に隔世の感が起る。

現今の人々が無雜作に書き放し、やすやすと書き綴つてゐる口語文は、之を創始した人々からいへば、慘憺たる苦心の餘に成つたものである。又今日の我々が極めて好都合なものとして、新聞にも著述にも書信にも廣告にも使つてゐる口語文は、これが創始せられた當時の公衆からは、不都合なものとして相手にせられなかつたのである。創始者の苦心、公

衆の輕蔑、それは今日の若い人々の想像だも及ばないほどのものであつた。

明治二十年前後の文章界をふりかへつて見る。新聞雜誌の文章は、硬い論說風のものはいふまでもなく、軟かい三面記事風のものまで、すべて漢文くづしの、修飾澤山の、誇張した措辭でもちきつた文章であつた。一般の著書も、文學作品も亦この種の文章で書かれたものであつた。自分が小學校に入つて作文を教はつた時に、「假名交り文」と「候文」と二通りの文章を授けられた。候文は候といふ字が使はれるからかういふのだらうと直感したが、假名交り文といふ名は、子供心にも變に聞えて、その意味が解せなかつた。漢字の交つてゐる文を假名交りといふのが何故だか合點がゆかなかつたのである。勿論漢字ばかりで書いた文章のあることは知つてゐた。然しながら四書五經を父の机上で見た自分は、漢文は讀

むものと思つてゐるだけで、作るものとは夢にも思はなかつたのである。餘程後になつて、假名の交らぬ文章即ち漢文を以て文章の本体として、それから出た變体文章であるが故に、假名交りと稱したのだとわかつて、覺えず苦笑したのである。明治二十年頃は、漢文くづしの文章の世の中であつた。

當年の文章家と言はれた福地櫻痴、成島柳北、末廣鐵腸、矢野龍溪を始めとして、「將來の日本」や「新日本の靑年」を書いた德富蘇峰でも、「東洋の佳人」や「佳人の奇遇」を書いた柴東海散士でも、皆この仲間であつた。今日から思へば本當に「恍として夢の如し」と其頃の口調で形容したくなる。試みに自分の愛讀して拔書したものの中から、一節を選んで揭げる。

返照既に收まり、瞑煙全く散じ、長空皦然、又雲翳を見ず。首を上ぐれば一輪氷の如く松間に懸る。

春風駘蕩朝霞烟の如し。散士獨り輕舟に棹し、高歌放吟、踏水の支流に遡り、漸く窟谿の岸に近づく。一清流あり、窟谿の幽谷より出づ。兩岸の碧蘚、數種の櫻桃と相掩映し、水色澄潭、鮮魚の游泳するを數ふべし。

これは「佳人の奇遇」の文章から抜萃したものであるが、此の作は龍溪の「經國美談」と共に、最も當時の讀書社會に好かれたものだから、流行の文章の見本とすることが出來る。

次に又小說や續きもの風の作に用ひられた文章は、すべて江戸時代の戲作の繼承で、馬琴の流儀でなければ種彦の摸倣、春水風でなければ三馬一九張りであつた。坪內逍遙でさへこの傳統から脫しきることが出來なかつた。逍遙は「小說神髓」を著はして文壇の新しい潮流を指導した先覺者ではあるが、それと前後して明治十八年に出した創作「當世書生氣質」

に用ひた文章は、やはり戯作の系統を脱することが出來なかつた。その卷頭の文はかうである。

樣々に移れば易る浮世かな。幕府榮えしその時は、武士のみ時に大江戸の、都もいつか東京と、名もあらたまの年毎に、開け行く世のかげなれや、貴賤上下のけじめもなく、才ある者は用ひられ、名を揚げ身さへたちまちに、黑塗馬車にのり賣の、息も驛を蓄ふれば、何の小路といかめしき、名前ながらに大通りを、走る公家衆の車夫あり。

讀み下すと、どうしても戯作者の文章であつて、江戸時代式の讀本や草雙紙に痛切な打擊を加へた新人たる逍遙の筆とも思へぬのである。

然らば外國文學の翻譯はどうか。リットンやヂスレリーあたりを抄譯してゐた政治小說者流の文章は言ふに及ばずとして、當時最も進步した翻譯と言はれ、斯界のオーソリチーとせられてゐた森田思軒の文を見る

と、今更に不思議に思へるほど味のないものである。漢文を直譯したやうな文体に、雅文の助動詞や助詞の用法をさし加へて、それで英文を逐字譯にしたやうな變なものである。試みに「探偵ユーベル」の一節を掲げて見る。これはユーゴーの原作を英譯から重譯したものである。

證人の申立を讀み終れる時、ラッチールは是より愈々確乎たる證據物件に入るよしを述べり。滿堂寂とせり。恍々とし惘々とし以て寂とせり。チャールスは余にさゝやけり。「以て探偵を處するの道を學ぶべし。」

これが當年可なり多くの追隨者をもつてゐて、皮肉な批評家齋藤綠雨をして小說八宗の一つに思軒宗を數へるに至らしめた著名な翻譯家の文であることを思ふと、文壇の變遷にも驚かれるわけである。

かういつた各種の體裁が文章界を支配してゐた當年に、思ひがけなくも口語で文章を作らうと試みる作家が現はれた。我が表現しようとする

ところを忠實に文章に書綴るには口語によらねばならぬと自覺した作家が現はれた。それは山田美妙齋と二葉亭四迷とである。

美妙齋は明治二十年に齢二十歳で既に文壇に名をなしてゐた早熟の才である。此の年「讀賣新聞」に「武藏野」と題する歴史小說を出した。その文章の体裁はかうである。

はや七つさがりだらう、日は箱根の山の端に近よつて、儀式通り茜色の光線を吐始めると、末野は些しづゝ薄樺の隈を加へて、遠山も毒でも飮んだか段々と紫になり、原の果てには夕暮の蒸發氣が、切りに逃水をこしらへてゐる。頃は秋。其處此處我儘に生えてゐた木も、既に上衣を剝がれて、寒いか風に慄へてゐると、旅歸りの椋鳥は、慰め顔にも澄ましきつて囀つてゐる。處へ大層急ぎ足で西の方から步いて來るのは、わづか二人の武者で、いづれも旅行の体だ。

何といふ新鮮なにほひのある文であらう。近代的の細かい神經のはたらきも見えれば、獨自的な自然の觀方も出てゐる。此の舊來の傳統を脱した作者の著想は、無論英文學の刺擊によつて出來たもので、作者の獨創ばかりではないけれども、とにかくこんな著想があれほどまでにあざやかに表現されてゐるのは、ひとへに文休の賜であつて、あれが在來の体裁と修辭とで綴られたならば、型にはまつた原野の秋景を見せるに過ぎなかつたであらう。

同じ年に二葉亭は浮雲の第一編を單行本で出した。これも美妙齋と同様、口語の句法で綴つた清新なもので、先づ次のやうな調子である。

庭の一隅に栽込んだ十竿ばかりの繊竹の葉を分けて出る月の凉しさ。月夜見神の力の測りなくて、斷雲一片の翳だにもない蒼空一面に照りわたる清光素色、唯ゝ亭々皎々として雫も滴るばかり、初めは隣家の

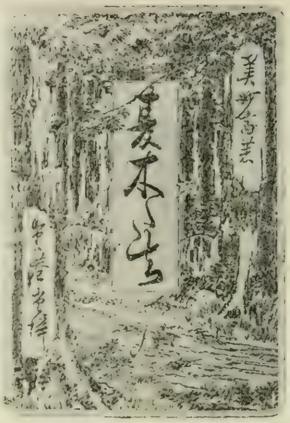
隔ての竹垣に遮られて庭を半より這ひ初め、中頃は縁側へ上つて座敷へ這込み、稗蒔の水に流れては金瀲灔、簷馬の玻璃に透りては玉玲瓏、座賞の人に影を添へて孤燈一穗の光を奪ひ、終に間の壁へ這上る。

これは大分漢文の修辭法を用ひた、傳統的分子の可なり多いもので、「武藏野」の文に比べると稍々舊いやうであるが、然し作者のねらひ所は言ふまでもなく文体の一新にあるので、翌年第二編を出した頃になると、すつかり洗錬されて見違へるやうになつてゐる。

淋しい……そら風が吹通る。一重櫻は戰慄をして病葉を震ひ落し、芝生の上に散布いた落葉は、魂の有る如くに立上つて友達を追つて舞歩き、フトまた云合せたやうに一齊にハラ〳〵と伏さつてしまふ。滿眸の秋色蕭條として春のきほひに似るべくもないが、シカシ寂びた眺めで、また一種の趣味がある。

右の一節などはその例である。二葉亭はなほ翻譯にも此の体を用ひて、筆力が追々進んでゐるやうである。

美妙齋は此の年、前の「武藏野」を始として六つの短篇を集めて、「夏木立」と題して單行本にして出した。「花の茨、茨の花」や「柿山伏」などには、夫々面白い文章上の試みがある。彼れは此の文体を言文一致体と言つてゐた。その後長く行はれた名稱である。



此の文体は實に思ひ切つた試みであつて、今から見れば當り前の事であるのに、當時では斯界の外道と見られ、文章道の墮落と目され、或は一時の物數奇で、長續きのするものでないと輕蔑せられたのである。此の新しい試みが如何なる要求から生

れたかといふことには、何等考慮を致すことなしに、一般文章界は唯々俗悪の一語を以て、名譽ある口語文章の先祖を葬り去らうとした。

さて此の先祖が誰れであるかに就いては、異説が多いので、之を決定する材料が足りない。「武藏野」が新聞に出たのと「浮雲」の刊行されたのとは同じ年であるから之に後先がないけれども、二葉亭はその前年に既にツルゲネーフの「父と子」の翻譯を言文一致で書いてゐるし、美妙齋は同じく十九年に、「風琴調一節」といふ處女作を言文一致で公にしてゐる。「父と子」は公にしなかつたから、世間に知られたのは美妙齋が先であつたと言つてよろしいのであるが、別に又廣津柳浪が美妙齋よりも先に之を試みてゐるといふ説がある。

二葉亭が印度洋上で客死して文壇の痛惜を受けた時、美妙齋が「世間では自分を言文一致の先祖だと言つてゐるが、實は二葉亭が先きである。

これを明かにして置かなければ故人に氣の毒だ」と言つたといふ話を某雜誌で讀んだことがある。然し習作の先後に至つては到底分らないもので、發表の先後にしても數月の相違に過ぎないのであるから、史的見地からは先づ大体同時と見てよろしい。但し研究は銘々別々であつて、お互に知人ではあつたが、相談もせず、一方が他方に影響するといふこともなしに、各別個に習作をしてゐたのである。

大体は先後なしとしておいて、さて當時では美妙齋の方が鮮やかに光つてゐた。言文一致を賞めるものも難ずるものも、共に美妙齋を目標としてゐた。それは美妙齋が、作品を矢繼早に公にして作家の名聲が高まつてゐたのと、言文一致に就いては研究もし、主張もし、非難に對する應酬もして、奮闘甚だ努めたのとによるのである。その點から言つて、言文一致の開拓者として第一位の功績を認めねばならぬ。「夏木立」のはし

がきを見ても、文体に關する苦心の尋常でなかつたことの一斑が窺はれる。

かうして美妙齋は言文一致の第一線に立つてゐたのであるが、彼れの文章そのものに反感をもつ讀者は可なり多かつた。「……だ」と結ぶは下品である、「……です」は輕薄である、「……であります」は冗漫である、「……である」は澤山續いて單調に流れるなどと、非難を加へたものである。然しながらこれ等は美妙齋の苦心の跡をこそ現はせ、文そのものの褒貶に價しない。若し彼れの文に非難があるならば、それは修辭のいやみから來る。即ち技巧のいやみである。言語らしからぬ、不自然な、誇張した、とつてつけたやうな修辭技巧は、作者の苦勞を語るものであらうが、讀者には可なり迷惑ないやみになる。假りに一二の文例を擧げる。

夜は根城を明渡した。竹藪に伏勢を張つてゐる村雀は、あらたに軍議

を開き始め、闇の隙間から斫込んで來る曉の光は、次第に四方の闇を追退け、遠山の角には茜の幕がわたり、遠近の溪間からは、朝雲の狼烟が立昇る。――「武藏野」

西山を啣む二十三夜の殘月、今些し前まで降り續いた五月雨に洗はれた顏の淸さ、まだ化粧は止めずに雲の布巾を携へて折々はみづから拭つてゐます。夜半、それが此時の「美」の原素で、山里、それがこの處の「美」の源です。――「胡蝶」

右の例に見えるいやみは、譬喩其他の修辭技巧のうるささから出てゐるので、口語体といふ文体の缺點から來てゐるのではない。

二葉亭の「浮雲」にも大袈裟な言ひ方、浮つ調子な筆つきがあつて、反感をもつものからは、口語体文章非難の材料に惡用せられたのであるが、二十一年に出した譯文「あひびき」や「めぐりあひ」になると、原文の性質にも

よるけれども、思ひ切つた普通の言語らしい、眞實の氣の充ちた文であつた。

口は晴々とした蒼空に低く漂つて、薄く弱い影は踪きはせずに朦朧とさしてゐる。日沒にはもう半時しかあるまい、天末には微かに夕燒が見える。風が黃ろく乾びた刈株を渡つて烈しく吹きつけるので、反りかへつた細かい落葉が、周章てて起上つて、林に沿いた往來を橫ぎつて、自分の側を駈通る。壁のやうに野に向いた林の一面がざわ〳〵として、光るのでないがちら〳〵する、枯草や野草や藁には、蜘蛛の巣が一面に絡み著いて、風に煽られて浪を打つ。自分は心細くなつて立止まつた。……(中略)――秋に遊ひない。誰やら禿山の向うを通ると見えて、空車の音が高く響き渡る……

これは「あひびき」の一節であるが、樺の林の描寫と相並んで當年の文學界

での出色の文章である。「めぐりあひ」の菩提樹園の月夜の條なども、これと比すべき文字である。今日から見ても、よくもこんなにこなしつけたものだと感服される。ましてや外國の事物を移すのに適當な國語のまだ作られ　かつた當時、特に會話用の國語で外國人の口吻を髣髴すべきものの無かつた當時に、何等の粉本も暗示もなしに、よくもあんなにすらすらとやつたものだと驚歎せられる。

口語体文章もこゝまで出來上つた實例を見せられると、推しも推されもせぬ堅い基礎を作るやうになる。反感をもつてゐた人々でも、かうまでこなされるなら口語体を取つたかひがあると考へ直すやうになつた。幸田露伴の話にもあるやうに、心ある人々をして言文一致の文章といふものに就いて内心に或省察を抱かしめ、若しくは感情の上に或動搖を起さしめたのは、二葉亭のこれらの譯文であつた。わけても當年の若い文

學讀者、新しい考へをもつてゐる青年文學者は、これに刺撃せられたこと一通りでなかつた。國木田獨歩でも、島崎藤村でも、田山花袋でも、皆その仲間であつた。

口語体文章は右のやうにして、我が文學界に生れて來た。爾來各種の研究が遂げられ、試驗が積まれ、多くの作家と評家との鍛練を經て、漸次發達して遂に今日のやうな有樣になつたのである。

一　口語體文章の發達

口語体の文章はもはや知識の判斷からは何人も是認するやうになつた。殘るところは感情と習慣との問題だけである。然し此の習慣の力、感情の力は、案　頑强なものであつて、先覺者が折角の奮鬪も、正當に酬いられることなくして、世間一般にはまだ漢文体、和文体、雅俗折衷体が幅を利かせてゐた。天下はまだ〳〵文語体の全盛期であつたのである。

美妙齋は最初「……だ」の式で習作した。それが不評であり且つ自らも不都合を感じたので、二十一年の花車」に「……です」の式を試み、二十二年の「胡蝶」にも之を用ひた。これも廣く行はれなかつた。二葉亭は最初「……でございます」の式と「……だ」の式との得失に就いて逍遙に質した。逍遙は散

語なしの方を可としたので、彼れは「浮雲」に「……だ」の式を採つた　柳浪は却つて美妙齋よりも早く言文一致を用ひたと言はれるけれども、作品を見ないから何の式であるか不明である。

二人に次いで言文一致を用ひたものは、矢崎嵯峨廼舍主人である。此の作家は二葉亭と同じく外國語學校の露語科から出た人で、同じくロシヤ文學から刺擊を得てゐる先覺の一人である。二十二年の「初戀」が既に言文一致で、同年の「流轉」もさうである。但し「……であります」の式で出來てゐる。

紅葉は雅俗折衷体の巨頭で、又文章道の苦勞人である。輕々しく言文一致に移ることをしない。まだお粗末な境界を脫しなかつた言文一致体はむしろ嫌ひであつた。然し苦勞人であるだけ言文一致体の長所を認識してゐた。花袋の話によると、二十四年五月頃、紅葉が「何と言つたつて

しまひには言文一致だね、外國の作品のやうになるにきまつてゐる」と彼れに語つたといふことである。二十四年は紅葉が「二人女房」を書いた年である。「二人女房」は全然口語体になつてはゐないが、彼れの最初の試みとして注目すべき作である。これに思ひ合せると、彼れの考へのある所を推知することが出來る。

紅葉は「……である」の式を採つた。然し濫發して單調に流れるまづいことはしない。動詞形容詞の終止形で言切る形を多く交へてその弊を救つてゐる。此の手法は二十七年の「紫」と「冷熱」とに用ひられて、更に洗練を加へられた。但し紅葉は之を唯一無二の文体と信じて、全然革命の態度に出るやうな決斷をしなかつた。

然るに明治二十八九年に至つては、もはや是非の時代を通り越してゐた。雅俗折衷体の本家である硯友社の作者達も、追々口語体を採用する

やうになつた。川上眉山は二十八年「暗潮」を出して作風を一新しようとした時に、文体をも革めた。廣津柳浪も小栗風葉も口語体を用ひた。紅葉は二十九年の「多情多恨」に於いて、殆んど完成した新しいスタイルを見せた。美妙齋以來約十年、色々の曲折を經ては來たが、結局紅葉の試みた「……である」の式に落附いて、小說に於ける新しい文体の型がこゝに出來上つた。

かうした運動が著々として成功してゐる間に、知識の判斷では是認しながら、自己の問題としてはその必要を痛感しないでゐる作家も多かつた。逍遙鷗外露伴の大家連は、既に各々一家をなしてゐる在來の文体を棄てかねてゐた。新進の樋口一葉でも、文体だけにはまだ保守的であつた。「早稻田文學」や「帝國文學」の新人も、まだ文体の革命を叫ぶに至らなかつた。描寫記載の文章ですら此の有樣であつたから、評論風の文章など

には、此の運動はまだはいり込んではゐなかつた。高山樗牛のやうな近代文學の主張者でも、そのスタイルは絢爛の趣を極めた漢文直譯系統の文語体であつた。

此の時に方り、全く意外の方面から口語体宣傳の運動が起つた。それは正岡子規の散文革新の主張、及びその同志の寫生文研究である。

詩歌革新の事業を遂げた子規は、晩年更に又散文の改革を企てた。三十二年同志の俳人を集めて文章研究會を催し、俳句や短歌に於ける客觀寫生の主張を散文に應用して、現實の正直な描寫を試みた短篇の散文を作つた。當時新聞「日本」に發表した主張は大略寫生的叙述、印象的描寫、口語に近き文体の三條に約することが出來るのであるが、その中文体に關する說はかうである。「文体は言文一致か、又はそれに近き文体が寫實に適するなり。言文一致は平易にして耳立たぬを主とす。言葉の美を弄

するは別に其の体あり。寫實に言葉の美を弄すれば、其の趣味を失ふと知るべし。」

子規はまだ言文一致でなければならぬと說いてはゐない。當初の作品を集めた「寒玉集」を見ても、言文一致でないものが少くない。然し彼等同志の主張を徹底すると、どうしても口語体でなければならなくなるので、其の以後彼等の作は專ら口語体で出來てゐる。これが後に寫生文の名で文壇に新領土を開拓したものであつて、子規の沒後に大きな發展を遂げた。

此の運動は、小說に於ける美妙齋の主張や、紅葉の試みと直接の關係はなく、全く傳統を異にするものであつて、むしろ子規の俳句によつて養つた文學觀から生れた獨得のものと言つてよい。即ち彼れの言葉を借りて言へば、摸寫、寫實、寫生、實敍、具象的敍述をなすのには、此の

文体によらなければならぬといふ判斷から出發してゐるのである。その影響の及ぶところも、美妙齋や紅葉のとちがつて、小說よりも一般の文章の方に擴がつてゐる。寫生文の名が殆んど普遍的に行はれて、文章習作上の必修階梯のやうになつてゐるのを見ても、此の運動の成果の大であつたことがわかる。

子規は又此の文体を評論隨筆にも用ひた。新聞雜誌の評論隨筆に之を用ひることは、此の頃から著々行はれて來た。鷗外も態度を革めた。島村抱月や高山樗牛等も此の体を交へ用ひるやうになつた。初めは平弱でだらしがなかつたのであるが、試練の積むに從つて緊張した新味に充ちたものになつた。

口語体文章はもう文章界のすべての分野に行亘つたのであるが、愈々徹底的に文体革命の行はれたのは、三十五六年の狂飈時代以後のことで、

三十八九年の近代的文學樹立の前後である。それは此の舞臺に働いた文學者は、多くは舊文体の素養を有たない後進であつたから、馴れた筆を棄却す…苦勞なしに、始めから新文体に入り得たのにも由るけれども、主要な理由は文學內容からの要求で、どうしても此の文体でなければ忠實な表現が出來ないといふ點にある。

世には口語体文章を以て、文体を平易にし讀み易く書き易くするといふ要求から出たものと解する者があるけれども、それは誤りである。文体の平易化運動ならば、福澤諭吉の文体改革がこれに當る。文學に於ける口語体文章は、全く藝術上の要求、表現の苦心から生れたもので、作者から言へば、止むに止まれぬ內部の壓力から、慘憺の努力を以て案出したものである。我等の藝術は現實の生活を如實に描寫するものである。現實生活を如實に描くには、現實生活の上に用ひられる言語によらねば

ならぬ。現代語を外にして現代生活を描寫することは不可能である。これは獨り小説だけでない。詩歌もさうだ、隨筆評論もさうだ。現實生活の詩歌思索説論等は、皆現代語でなくば發表することも味讀することも困難であるからだ。

故に文學に於ける言文一致体の文章は、全く過去の傳統を有たない創始的のものである。世には言文一致の源流として、三遊亭圓朝の講談の速記を指摘する評論家がある。けれども美妙齋や二葉亭の言文一致は、圓朝の「牡丹燈籠」とはまるで緣の無い藝術的作品である。口語体文章は、藝術としての文体の名であつて、口語の筆記でない。演説や落語を筆記したものなら、昔から少くない。鳩翁松翁の道話もあれば、平田篤胤の講本もある。圓朝の「牡丹燈籠」を待つまでもないのである。

全く新しい要求から生れた文体は、從來他の文体で養はれたことのな

い新時代の文學者には、最も自然に取扱はれ得るわけである。國木田獨步が三十四年に書いた「武藏野」は、二葉亭の「あひゞき」などから暗示を得たのでもあるが、何等の傳統を有たないで、直接に武藏野の自然を觀察した通りに描寫したので、あの出色の文章を得たのである。文學に於ける口語体文章の發達は、實に此の描寫といふことの研究に促されたので、微妙な氣分、纖細な情緒、複雜な性格、曲折ある氣質、すべてこれら近代的のこまかい描寫を要する事項は、到底他の文体では表現し得ないのであるから、なまじいに既成の文体に熟してゐる作者達が、棄てにくい感情やら、馴れたものによる習慣性やらで、躊躇して移りかねてゐる間に、まだ誇るべき熟練をもたなかつた後進の作家が、却つて一擧して新文体の研究にはいることが出來たのである。

かうして口語体文章は、獨步藤村花袋秋聲白鳥泡鳴等の現實描寫の作

風を採つた小説家、夏目漱石高濱虛子等の寫生文の流れを汲んだ作家、島村抱月等の評論家の手に培はれ養はれて、三十五年から四十年に至る約五六年の中に略ぼ完成せられ、我國の文章界の面目を一新してしまつた。

此の趨勢は爾來韻文の方面に伸びて、口語詩の運動になり、口語短歌の宣傳となつて、今日に及んでゐる。

二　劇壇の黎明

あらゆる文學の中で、その發達が他の部類に比して何時も後れ勝ちなものは、劇の脚本である。我が國の文學史に就いて見ても、詩歌小說の著しい進境に對して、脚本の部面は出現の時代も遲く發達の度合も少なく、殆ど比較にならぬ有樣であつた。謠曲と狂言とは、蓋し日本の劇文學の始めて形をなしたものであつて、演劇の脚本ではないにしても、歷史上劇文學の基礎をなすものであるが、その出現は古今集あつて以來七百年に餘り、源氏物語あつて後五百年に上るのである。而もその後劇文學の發展は遲々として捗らず、淨瑠璃が現はれても純粹の劇の脚本でなく、純粹の劇の脚本が出來上つても甚だ幼稚な程度に止まつて、謠曲や

淨瑠璃に比べても却つて低級なものであつた。

文學としての脚本の出來榮は、同じ劇文學の中でも甚しく見劣りのするものであつて、江戸時代の芝居が非常な繁昌をしたといふ傳說のあるにも係はらず、今日に傳へてなるほどとうなづかしめる脚本が一つも無いのである。偶々名を擧げられるやうな脚本は、謠曲の書直しか又は淨瑠璃の脚本化であり、會々作者の名が傳へられてあつても、名人といふ評判だけが仰々しいのである。並木正三や奈河龜助が作者だと言つても、さてどんな作があるかと問はれると、返答に窮する。鶴屋南北や河竹默阿彌が古今の名人だといつても、これが近世の脚本だとして推奬すべき作があるとも思はれぬ。

恐らく江戸時代の藝道に關する傳說には、すべて此の種の割引を要するものがあるのであらう。俳優に關しても、芝居道そのものに就いても、

然しそれらに今日からその證跡を知ることが出來ないので、まだごまかされもするが、脚本のやうに歴とした證跡の殘るものでは、いかに傳說の上に空名を謳はれても、その評價は容赦なく變動するのである。

蓋し演劇は色々の方面に交渉をもつ藝術であつて、獨立の發達を遂げるのには色々の障害が存する。從つて脚本は、文學の中でも最も多く社會的の拘束を受けるものであるから、詩歌小說のやうに獨自の針路を驀進することが出來ない。無論詩歌小說といへども、讀者を豫想するのであるから、全然讀者を顧慮することなしには發表せられないけれども、もと／＼讀者は素養のある階級であり、知識階級であるから、目標はおのづから高きに在る。然るに劇では看客を迎へるのにこれと同じ高さの目標を立ててゐては、興行が成立たないから、勢ひ盲千人の俗衆を相手とせねばならぬ。脚本が一二世紀づゝ後れて行くのは、主として此の關

係に因るのである。此の現象は西洋の劇壇に於いても見られる。
されば明治の世、各種文學の新潮が流れ初めても、脚本には推及ばなかつた。さすがに寫實の風がこゝにも吹込んで、從來の荒唐無稽を排斥する運動が起つたけれども、それは文學者の自覺からでなくて、常識家の漫評から出たものである。決してリアリズムの要求でもなく、又ナチユラリズムの理論から來たことでもない。明治の新文學をうち建てようと叫び出した透谷や子規の運動は、まだ劇に及ばなかつたのである。
若し脚本が興行といふことを切離して書かれるものならば、興行主や劇場主にも容喙せられることなく、俳優にも顧慮する必要なく、看客にも頓着することなく、極めて自由に作者の理想通りに書き下され得るはずである。江戸時代にはまだそんな文學者が出なかつたにしても、明治の文學界にはこんな作者があつてもよいわけである。某々俳優に書下し

たものばかりでなく、百年の後を待つやうな作が出てもよいのである。西洋に讀む脚本といふのがある。然しこれは本來舞臺に上場され難い性質のもので、唯脚本の体裁を借りて或る題材を取扱つたといふだけのものである。こゝに言ふのは此の讀む脚本でなく、上場することが可能であり、又上場することを目的として書かれた純粹の脚本である。脚本の改良は、先づ此の種の脚本を試作することから始められねばならぬ。

試作は現在の興行狀態や、俳優の素質や、看客の程度を顧慮しないで作られる文學作品である。然しながら脚本として書く以上、舞臺に上せて始めて鑑賞せられ得るものであるから、こゝに試演といふことが企劃せられる。小範圍の俳優と看客とが集つて、營業としての興行を離れて實演するのである。脚本の進歩を計るには此の種の組織が必要である。

試作　試演、此の方面の事に手を下した先覺者は、坪内逍遙である。

逍遙は文學の廣い範圍に亘つて、有意義の足跡を殘した人であるけれども、特にその功績の著しく認められるのは劇――脚本の方面である。

逍遙は曾て「小說神髓」を書いて、小說革新の氣運を促した人である。が自ら小說を書いたことは少かつた。そして明治二十六年劇の革新を唱道してから以來、今日に至るまで專ら劇の事にその力を傾け盡してゐるのである。「早稻田文學」の誌上で我國の史劇を論じたことは、丁度小說界に於ける「小說神髓」刊行に相當するので、その論旨も略ぼ歸著を同じうする。曰く、我國從來の史劇を見るに、近松のは夢幻劇であり、默阿彌のは野史俗說を題材として之を江戶時代式町人の眼で見た史的人物の劇であり、依田學海や福地櫻痴のは史實の考證や俳優のはまり役を云々するだけの劇である。本當の史劇といふものは、史的人物を一個の眞の人間として取扱ひ、その性情の流動を實人生の通りに描きなすものである。要旨は

こんな點にあるのであるが、實人生の通りといふ要求は、即ち新時代の精神であつて、從來の劇はすべて此の要求に合致しないのであつた。

論者は此の考へで史劇脚本の新作を試みた。二十七年の「桐一葉」三十年の「沓手鳥孤城落月」「桐一葉續篇」、及二十九年の「牧の方」の三篇である。「牧の方」には尙續篇がある筈であるが、暫く中止せられたのである。前者は豐臣家滅亡史の裏面にうごめいてゐる隱微の消息に著想した悲劇であり、後者は源家衰亡史の裏面に存する鎌倉幕府の罪惡に關する隱微の消息に著想した悲劇であつて、總べて從來の史劇とちがつて、人間らしさをもつた人物が史的大事件を經緯して活躍する眞相を穿つたものである。

劇の脚本としてこれ程の出來榮を見たのは、我が文學史あつて以來の新事實である。脚本が我國文學の一つの分野を占めるのは此の時以後の事である。逍遙が此の業績は、主として英國の劇を研究した結果に出た

ものので、特にシエークスピヤの史劇から暗示を得たものだといはれるけれども、これらの作には、十六世紀のロマンチシズムの作家であるシエークスピヤに見ることの出來ぬ近代精神が現はれてゐる。又逍遙がシエークスピヤに傾倒してゐることは事實ではあるが、これらの作は決してシエークスピヤの後塵を拜するものでない。

さはいへ逍遙は、改革家としては穩健であり漸進的である。此の脚本には尙ほ幾多の舊文學の手法を殘してゐる。作者自らの用語にいふところの國劇の形式を尊重すること多きに過ぎて、見馴れ聞馴れた從來の型を棄て兼ねてゐる。新人の改革運動としては物足らぬところがないではない。然しながらこれでさへ當時の劇界では直ぐに上場せられないで、約十年を經た三十七年「桐一葉」が始めて實演せられたのである。小說詩歌にあつては既に世界の文學思潮に棹してゐる時に際し、脚本は僅かにス

タートをきつたばかりである。

爾來逍遙は劇の改革運動を繼續して、或は純正な科白劇と相並んで振事を主とする舞踊劇の成立すべきを主張し、或は舊來の劇のこみ入つた經濟組織や因襲的な俳優養成に見きりをつけて、新たに役者の敎育や脚本の試演に從事する計劃を立て、或は興行者の商賣と金力看客の遊樂とから劇を切離して、民衆的なものに解放する手段を講じ、或は見物人の玩弄からも役者の虛榮からも遠ざかつた純一な藝術の創作を樂しむといふ境地に劇を置かうとして、家庭劇を案出し、次から次へと努力を惜まなかつた。

舞踊劇に就いては、能樂、歌舞伎の振事、常盤津長唄の振事などの長所を集めて、新たな樂劇を創り出さうとしたので、三十七年以來「新曲浦島」「新曲赫哉姬」を始め數篇の新作を公にし、その幾篇かは實演せられた。

然し此の運動の結果はあまり重大ではなかつた。

脚本の實演と俳優の養成とに就いては、三十九年文藝協會を組織して大規模に取りかゝつたので、劇に關する研究、泰西劇の翻譯、新脚本の創作、俳優の養成、試演舞臺の建設、試演會の開催等に從事して著々と成績を擧げた。「桐一葉」「ハムレット」(逍遙譯)「人形の家」(島村抱月譯)「故鄕」(同譯)等の上演は、當年の劇界に强い刺擊を與へたもので、最初は試演に止まつたが、追々公演して進歩した看客を引著けるやうになつた。不幸にして協會は約十年の後內訌のために分裂解散のうき目を見たけれども、とにもかくにも從來舊組織の牢獄に囚はれてゐた演劇を解放して、文學社會の中心に引出した功績は著しいもので、爾來之に倣つて試演式の劇團が踵を接いで起る有樣で、脚本も思ひ切つて舊套を脫したものが現れた。

劇の民衆化運動ともいふべきページェントの企劃、及劇の家庭引入れを試みた兒童劇の創案は、共に最近の出來事であつて、逍遙が常に劇運動の最前線に奮闘してゐることを窺ふべき有力な材料である。特に兒童劇に關する事業は、ページェントに比べて一層有意義の結果を見せることになると思ふ。

脚本はかうして文學の中樞に近づいて來た。わけて大正六年に出た逍遙の「名殘星月夜」翌年の「義時の最期」は「牧の方」の續篇になる史劇であつて、前者の人としての實朝の解釋、後者の義時の老病に對する解釋などには、從來の歴史家などの閑却してゐる人間の研究に新しい光を投げた點が見える。史劇もこゝまで進むと、頗る近代的の要求を滿足せしめることが出來るのであるが、實人生を如實に描寫したいとの要求の前には、社會劇の出現が尚一層願はしいのである。不幸にして社會劇の作者として逍

遙のやうなのが出なかつた。燃えるやうな熱心を以て外國の社會劇を取入れようとしたのは止むを得ないはめであつた。脚本の翻譯が盛に行はれて、試演に公演に外國物の並べ立てられたのは、善い社會劇を持たないからの間に合せであつた。

然しながら此の氣運は、後ればせながら脚本をして文學の主潮に近づかしめるもので、大切な意義を有つてゐるのである。而してこれを指導した多くの文學者を顧みる時に、先づ認められるものは森鷗外の大なる業績である。

一三　劇壇の啓蒙

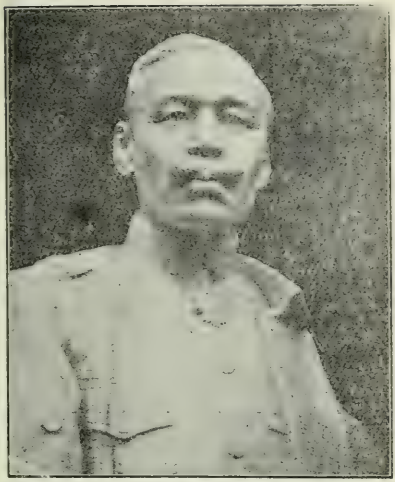
脚本の翻譯が行はれて、西洋諸國の劇の面影が我國に紹介せられたことは、可なり古いことで、小說などと殆んど同じ頃である。明治十六年逍遙がシェークスピヤの「ジュリアス・シイザア」を淨瑠璃風に譯したのは別だとしても、二十二年鷗外がカルデロンやレッシングを翻譯したものは、二葉亭がツルゲネーフの小說を譯したのと、僅か一年を隔ててるだけである。然しそれが我が脚本の創作を刺擊した力は、到底小說の翻譯に及ばなかつたのである。

二十七年「桐一葉」の出た前後には、逍遙がシェークスピヤの傑作を翻譯し初めた外、注目せられるものがなかつたが、三十四年に突如としてイ

フセンの社會劇が譯出せられた。高安月郊が「社會の敵」「人形の家」の二篇を譯して「イブセン作社會劇」と題して公にしたものがそれである。後年劇壇の新潮を捲起した此の北歐の社會劇が、既に當年に紹介せられてゐるのを見ると、甚だ意味深い現象と思へるのであるけれども、狂飈時代の大動搖も即時には影響を及ぼさなかつたほど後れてゐる劇壇では、直接此の翻譯から學ぶほどの用意が出來てゐなかつたやうである。

舞臺にかけられる方面でも、「ハムレット」や「エニスの商人」あたりの月並のところで、一かど新しがつてゐたのであるから、外の文學に比べて約十年後れてゐるわけである。小說界では、却つてイブセン等の脚本から著しい刺擊を受けて、社會問題に觸れ解放せられた新人を描くやうな作風が現はれ、題材や着想に深甚の影響を蒙つたのであるが、作劇方面ではまだ目覺めるところまで行かなかつた。

然るに三十九年イブセンの訃音の傳はつた頃から、氣運が少しく動き初め、社會劇の試作が二三提供せられるやうになつた。それらはイブセンやハウプトマンの暗示に從つてゐる跡が見えすいて、まだ渾成したものではないけれども、當年　記念する意味で注目せられる　創作はかうしてまだ不振ではあつたが、新社會劇の要求が俄かに起つて翻譯界が活氣を帶んで來た。近代の社會劇の作品が廣く大陸諸國からあさり求められ、得るに從つて譯出せられるといふ狀況であつた。此の間に處して絕えず外國劇を紹介して斯壇を刺擊し



（森鷗外胸像）

指導してゐたのは、即ち鷗外であつた。

鷗外は三十六年以來「玉匣兩浦島」「日蓮上人辻說法」等、十餘の創作を出してはゐたが、その業績はやはり翻譯の方に著しいのである。四十二年に出した「一幕物」に收めた脚本は、シュニッツレル、バール、ショルツ、ウエーデキンド、ズーデルマン、ハウプトマン、ホフマンスタール、すべて獨墺近代作家の社會劇である。翌年の「續一幕物」には更に英のワイルドや、白のマーテルリンクや、瑞のストリンドベルグ、以のダヌンチオ等の近代作家を網羅し、尙大正二年の「新一幕物」にはビヨルソン、ショー、シュミッドボン等に手を下してゐる。別に又アンドレーエフの「人の一生」、ハウプトマンの「寂しき人々」、イブセンの「ボルクマン」「幽靈」「ノラ」、シュニッツレルの「戀愛三昧」等、三幕以上のものの翻譯があつて、量に於いても質に於いても、當年の翻譯界に卓越してゐた。

鷗外の翻譯は近代作家のに限られたわけではない。或はゲーテの大作「ファウスト」を譯し、或はシエークスピヤの「マクベス」をも出し、十八世紀以前のロマンチシズムの作家のものにも手を下してゐるが、直接劇壇を刺撃したのは、やはり獨墺及スカンデネビヤの近代作家のもの、即ち大陸のナチユラリズム以後の作である。

狂飇時代以後にもなると、外國文學を味ふのには必ずしも翻譯によらなくてもよろしいわけである。英國文學は云ふまでもない、獨逸文學でも佛蘭西文學でも、讀める文學者はいくらも出來て來た。イタリヤのは佛譯で讀めばよろしく、白耳義もさうである。ノルウエーのは獨譯でわかるし、スウエーデンのもその通りである。だから大陸近代の劇文學を讀味ふにしても、大略原作のまゝで濟むわけである。苟りにも新しい劇に手を染めるやうな作家なら、必ずしも鷗外の手引を借りないで、最新

の外國物を知悉し得るはずである。然しながら既にそのスタートで立後れをしてゐる脚本界では、今正に啓蒙の時期に在るので、鷗外のやうな開拓者によつて多大の刺撃を與へられるのであつた。

鷗外の翻譯は、斯のやうな時期に最もふさはしいものであつた。大陸近代の新しい作となると、二三の著しいものの外、其の名をも知らなかつた當時、作家にしても一二の名高い人の外すべて耳にすることのなかつた當時に、廣く大陸諸國に亘り、色々の流派に亘り、十數人の作家に亘つて、夥しい數に上る作品を矢繼早に紹介したのであるから、一般讀者は言ふまでもない、專門の劇作家乃至劇に携はる人々にとつては、實に感謝すべき好手引であつたのである。近頃やつとイブセンの名を知つたやうな文壇の人々へ、シュニッツレルを教へ、ウェーデキントを知らせ、ホフマンスタールを紹介し、ストリンドベルグを案內したのであるから

斯道の先覺として何人も追随することの出來ない地位にあつたのである。

たゞに近代の耳新しい劇文學を紹介したといふだけでない。我國の劇界がちやうど要求してゐた社會劇、要求はありながらもどんな纒め方、どんな取扱方にしたらばよいかといふことに就いては、まだ先蹤もなく試驗も積んでゐなかつた近代的の社會劇、鶴屋南北や河竹默阿彌の世話物以後、最近新日本の社會生活に觸れた作を有たなかつたが爲に、特にその出現を望んでゐた新しい社會劇、さう言つた方面に多大の暗示を與へ、直接の作例を示すやうな大陸の社會劇を紹介したのであるから、鷗外の翻譯脚本の選擇に又特殊の意味が加はるのである。

且その文体に於いても、劇文學に一つの區切りをつけるものと言つてよいのである。これらの翻譯に用ひた文体は、極めて輕い平かな氣取らない枯れたものであつた。今まで脚本の翻譯に用ひた文体を顧みるに、

その手始めとも言ふべき明治十六年の「自由太刀餘波（なごり）鋭鋒（きれあじ）」、即ち逍遙がシェークスピヤの「シイザア」を譯したものは、七五調の淨瑠璃休であつたが、二十二年鷗外がレッシングの「エミリヤ・ガロッチイ」や、カルデロンの「ザラメヤ村長」を譯した時には、すべて歌舞伎言葉であつた。鷗外の弟三木竹二との共譯ではあつたが、譯者の努力は如何にして外國の語を日本の歌舞伎の用語、即ち江戸時代の大名武士等の言葉、大奥女中連の言葉に引直さうかといふ所にあつた。此の努力は三十年にレッシングの「俘」を譯する時になつても續けられてあつた。

扨ては身は眞實俘にせられたか。全く俘にせられた。身がつはものになる修行の月日の天晴な手始。あゝ神々。あゝ身が父上。これがみな夢ぢやというて、われとわが身を欺いて濟むことなら、どれほど氣が安いであらう。……俘第一節太子獨語。

逍遙がシエークスピヤの「ハムレツト」を譯し始めたのは、二十九年早稲田文學」の誌上にであつたが、これも全く歌舞伎言葉で通したので、ハムレツトは大名の若君、ホレーシオは腹心の近習といふ体裁である。特にハムレツトの獨語になると、すつかり擬古調で行つた。

オヽ此の硬き剛き肉の、などて此儘に溶解けざるぞ。此儘溶解けて露ともならば、又は自殺を大罪と、神の掟てさせたまはざりせば、オヽせんすべもあらんずもの、オヽ神。……第一幕第二場。

これが小説の世界で口語体文章の勢力の動かすことの出來ぬ基礎を据えた明治三十年前後の譯出法だとは、どうしても受取れないほど芝居といふものに拘泥してゐたのである。

然るに四十二年の「ボルクマン」の翻譯になると、極めてさら〳〵とした日常口語で、もう歌舞伎言葉を顧みることをしてゐない。これ一つには、

四十年以後のものは概ね社會劇であるから、自然現代口語になつたのだともいへるけれども、史劇の翻譯にも同様此の体を用ひてゐるのだから、譯者の趣旨はやはり此の點に在ることを認めなければならぬ。元來劇の文章は韻文であつて、ドラマは即ち劇詩であつたが、近代の劇には散文で書いたのが出て來て、イブセン以後になると、すべて散文になつてしまつた。此の變化に應ずる上からも、自由な現代口語になるのが最も自然なのであるが、鷗外の譯文は此の變化に步調を合せたといふのではないにしても、「おもひませばまはすほど、うとましやあぢきなや、」といふやうな調子づいた歌舞伎言葉を棄てて、さら〳〵とした現代口語を採つたことは、作劇に志す者に少からぬ影響を及ぼしたのである。

等しなみに西洋劇曲の翻譯と言つても、「ハムレット」や「ヱニスの商人」などは、所謂大時代物で、譬へば忠臣藏を見たやうなものである。三十九

年逍遥等の組織した文藝協會にもこれらを試演してゐたが、それは一般文學界の形勢からは、十年位後れてゐると言ふべき現象である。さすがに逍遥はシエークスピヤ一天張でなく、三十七八年から既にイブセン研究をやつてゐるので、シエークスピヤとイブセンとを對比して富士と淺間とに譬へたりしてゐるところ、洞察の行屆いたものではあるが、歌舞伎趣味に愛著の深いと同時に、シエークスピヤにも離れ難かつた。文藝協會の中の急進主義の人達が分れ去つた因縁の一部にはこれがある。鷗外は此の點ではむしろ新潮に棹して若い人達の先に進んだ。鷗外は雜誌「スバル」の若い人達に對する關係を、イブセンの「建築師」に於けるソルネスのヒルダに對する關係に譬へてゐるけれども、當年の若い作家達は、却つて鷗外の後を追かけて歩いた形である。

けれども鷗外は、劇の實際に關する運動を起してその革新を計るやう

な事業はしなかつた。此の種の實際運動にかけては、逍遙は常に一代の指導者たるの概がある。史劇改革の事はいふまでもない。三十七年の新樂劇運動でも、三十九年の文藝協會の組織でも、最近のぺージエントや兒童劇の運動でも、すべてその道での先頭に立つてゐるのである。此の方面では、四十二年に創めた小山内薫の自由劇場の運動も亦注目すべき事業であつて、近代劇を實演に運んだことに關しては、大きな功績を殘したのである。鷗外はこれらと趣を異にして、始終新しい脚本を提供して斯界を刺擊する役を勤めたわけである。自由劇場の旗揚げに出したのも、鷗外譯の「ボルクマン」であつた。其後一時新劇團がやたらに出來たことがあつたが、その出し物には概ね鷗外譯の近代社會劇が取られたのである。

此の近代歐洲大陸の社會劇なるものは、種々の點で過去の戲曲とちが

つてゐるのであるが、最も重な特質はやはり現實の描寫である。此の種の劇の大立物は、無論イブセンであつて、近代劇の父と言はれてゐるのであるが、その作品に具はる特色を擧げると、おのづから近代劇の註釋になるのである。蓋しこれらの劇は我等の日常生活の劇であつて、ヒロイックライフの劇ではない。その脚色も科白も、共に日常の言動の通りにする。所謂セリフがゝりで言つたり、見えや圖を切るなどのことはしない。事件の經過も一代記風とか御家騷動風とかでなく、概ね短時間の事件で、僅かに一日中の出來事又は一夜の出來事に止まり、極端なのになると、女優が興行を終つて次の興行地へ出發しようとする時の三十分間の出來事だけといふのがある。舞臺面も一家の内に收まつて、三幕物なら三幕が皆同一の室を出すものさへある。道具も平凡な室内家具で濟まし、テーブルと倚子二三脚と石油ランプとで濟む場面もある程で、出

場人物の數も至つて少數、扮裝も極めて自然素朴である。イプセンは「我が劇曲は奥の一室の壁を一方だけ取拂つて内部の模樣を見物人に見せるのである」と言つたさうだが、近代社會劇の總べてが此の傾向を有つてゐる。畢竟日常生活の平凡にして眞實な事件をそのまゝ取扱つて見せる生きた劇である。

眞實であり、生きた事件であるが故に、これらの劇曲は何等かの意義を有ち、看る者をして深く考へしめる。作者は唯人生の一斷片ともいふべき短時間の出來事を提出するだけであるが、看る者は長い過去と將來とをこれから暗示せられ、色々の問題を與へられる。そしてこれが解決を任せられる。而もその問題は、すべて餘所事ならず感ぜられる現實の問題である。自己の生活に關する適切な事例を提供せられ、その批評をも聞かせられるやうなものだから、看る者は自然により善い生活に赴く

やうに制衡を受けるのである。

斯の種の劇はおのづから長曲たるを必要としない。人生の回轉機に當るやうな、きはどい事件の勃發しさうな刹那を捉へれば宜しいので、その前後は自然と想像がつくやうにするから、大体短曲で事足りる。事足りるのみならず、短曲である方が集中的の緊張味があつて、却つて効果を高める。幕が上るといきなり主人公が出て、事件の中心に立つて唯ならぬ言動を見せる。一幕の運びの中に自然と事の由來を明にして行く。由來が明になると同時に、ぬきさしのならぬ必至的の運命に陷つてゐることが分つて來る。分つて來ると共に急轉直下で終結の大破裂が來る。此の樣式で行くと幕數は極少くて濟む。多くて五幕、並で三幕、少くすれば一幕でよろしい。近代劇に一幕物が多くなつたのは主として此の由緣からである。此の樣式は、西洋では近代の悲劇に用ひられる嶄新なも

のになつてゐるけれども、日本の劇文學では、既に近松の世話淨瑠璃にある型である。否淨瑠璃よりも先きに、謠曲に通有の型であることを注意しなければならぬ。

鷗外の譯したものは、「寂しき人々」の五幕を始め、「ボルクマン」の四幕、「ノラ」「幽靈」の三幕、いづれも近代式の短曲であるが、わけて一幕物を二十篇も出してゐることは、右に述べた樣式上の特質を我が文壇に知悉せしめる上に、大きな効力があつたので、これにも啓蒙の現象が見えてゐる。謠曲の昔から日本に有つた型でも、その意義を新にして現はれると、恰も全く新しい樣式のやうに感ぜられるのである。

社會劇はまだ啓蒙期に在るので、作家も作品もまだ貧弱である。逍遙は明治のシエークスヒヤであると言へるけれども、大正のイブセンと言へる人はまだ出ない。

一四　青年の文學から壯年の文學へ

明治の文學も大分年取つて來た。もう壯年期に達したのである。壯年期に達したといふのは、年數を經過したことだけをいふのでない。文學の性質そのものが壯年期的になつたことを指すのである。文學そのものの性質が壯年期に達するといふことは、文學の作者が壯年になつたことと直接に關係するのである。

文學作品には人氣の多少といふことがあり、流行の大小といふことがある。それは讀者の多少、賣高の大小といふことに關するのであるが、文學の讀者といふものは、昔も今も大体に於いて青年が大多數を占めて居り、購買者も亦さうである。だから人氣とか流行とかは、概ね青年讀

者にもてるか否かによつて定まる。作者から言へば、青年讀者の同情を繋いでゐる間は人氣があり、流行兒でありi得るのである。

そこで青年讀者といふものの性質が、文學の消長に至大の關係を有つことになると同時に、作者の年齢といふことが、文學の性質に密接な關係を有つことになる。この二つの事實が如何樣に組合はされて、如何樣に我國の文學に影響して行くかは、可なり興味ある文學史上の現象である。作者から言つて、大略幾歳頃までの作品が青年讀者を引附け得るか、讀者から言つて大略どの位の性質の文學までを愛讀し得るか、これらを事實に徵して考へて見ると、明治大正の文學に對して一種の側面觀察が成立つのである。

ロマンチシズムからナチユラリズムへ。此の進展は十九世紀の西洋文學史上の事實であつて、文學そのものの變遷が正にかくあらねばならぬ

やうに見えるのであるが、實は作者の年齡の青年から壯年へと進むにようて引起される作品の性質の變化であるとも考へられる。同時に又讀者その人の年齡も作者と共に長じて行くところから、おのづから共間に理解が出來て行くが爲に、斯くの如き文學の變遷が時代の潮流になるのだとも思へる。明治二十年頃に曙光を放つた我國の新しい文學も、これと同樣の事情のもとに、作者と讀者との年齡の進むに伴うて、遂に四十年代の文學になつたのではないか。

詩から散文へ。此の變化は歐米近代の抒情詩界にも劇文學界にも見える現象であるが、これも文學そのものに起るべき當然の變遷のやうに見えるけれども、作者一個の心理的進展の上にも、詩を棄てゝ散文に入るべき時期があるのである。律語文學を棄てゝ散文文學に移ることを要求する機會が來るのである。青年期は詩の時であり、律文の時である。壯

年期は散文の時であり、無律文の時である。これは讀者に就いても同樣である。明治大正の新休詩の發展と變化とはその著しい例であるが、詩人から小說家に變るといふことも、作者個人の身の上に起つた適切な例である。

明治以後の文學の進んで來た道を顧みると、大体に於いて現實描寫の一筋に集まつてゐる。逍遙の提唱した摸寫、紅葉等の作風である寫實、子規等の標語である寫生、四十年以後の文學に於ける現實、これらは總べて略同一の歸趨を有つもので、之を一語に約して現實の道といへるなら、明治文學の大道は即ち現實描寫であるといへる。然しながら同じく現實描寫と言つても、其の觀察の深淺、其の研究の廣狹、其の描寫の精粗等は必ずしも一樣でない。現實そのものの解釋は云ふまでもなく、現實に對する態度に就いても、甚しくその趣を異にしてゐる。而してその

差異を年代的に見ると、それがちようど人間の年齢の進み方と相伴ふのである。

明治二十年前後に文壇の新人として出現した作家達は、何れも二十歳前後の青年であつた。試みに明治二十年に於ける年齢を算へて見る。逍遙の二十九、鷗外の二十六は最も長じてゐるが、二葉亭は二十四、紅葉露伴子規は同じく二十一、透谷と美妙齋とが二十で、皆人生の春であり、詩の時代であり、希望の時代であり、感情の時代である。寫實を尊び寫生を主とすると言つても、蕭殺の秋氣で人情世態に對する透徹した觀方をすることはまだ出來ない。理知の眼をあけて幻像の破滅を痛切に体驗するにはまだ早い。地上の平凡生活を營む人間であることを自覺して、美しい天上の星を歌ふことを止めるにはまだ年が若かつた。作家もさうであるが、評論家も同樣で、「六合雜誌」の批評家大西操山は二十四、「國民

の友」や「讀賣新聞」の評論家も、多くその年輩であつた。」
それが三十五年になると、鷗外は四十一、二葉亭は三十九、漱石は三十六、樗牛抱月獨步花袋秋聲が三十二、藤村碧梧桐が三十一、泡鳴が三十、柳村虛子が二十九、風葉が二十八、天外天溪有明が二十七であつて、四十年にはこれらが皆三十五歲前後の壯年になつたのである。藤村の小說「春」には、二十五年頃に於ける青年文學者の群がどんな心境でゐたかを描いてあるのだが、內部生命を高唱して舊式文藝を排斥し、人生の文學を主張して傳習的の遊戲藝術を攻擊する青年詩人青木駿一を始めとして、その周圍の若い人達は、何れも明治の現實思潮には觸れてゐるのである。而も青春の血潮高鳴りする彼等は、やはり純情のロマンチストであつて、徹底的のレアリストにはなれなかつた。然しながら年を經るに從ひ、經驗を積むに伴ひ、ロマンチックな藝術生活と底力で迫つて來る實際生活

との扞格に懊惱するやうになり、終にその靑春の夢破れて嚴肅な現實に眼覺めるのである。四十年頃の壯年文學者は、正にその境地に到り着いてゐたのである。

「春」の結末に、主人公岸本捨吉が此の嚴肅な現實に眼覺めようとした時の模樣を描いて、友人某が雜誌に書いた文章の相變らず空想的夢幻的なのを「笑はずにゐられなかつた」としてあるが、それは文學觀の進化のためで、ロマンチツクの文藝に浸つてゐたものがナチュラリズムの文藝に移らうとする時の心境から來てゐると同時に、岸本の年齡の長じて來たためでもある。此の心境の變遷は、卽ち作者藤村の經驗したところであつて、又他の作家評家の等しく閱歷するところである。藤村が文學界に現はれたのは二十五歲、「若菜集」の新体詩を公にした時で、戀を謳ひ詩を歌ひ、天才を稱へ藝術を頌するやうな純情の詩篇を以て有名であつたが、

三十歳「落梅集」の諸篇を出した頃になると、詩題が頗る實際的自然的にな り、純情でなくて實行になり、藝術でなくて事業になり、すべて沈靜の調を帶んで考察反省に傾いて來た。戀愛なども、美しい華やかな熱い烈しいものでなくして、人生の戰線に立てる者にしんみりした慰藉を與へるものと取扱はれてゐる。「壯年の歌」「勞働雜詠」などは此の標本である。これが即ち作者の心境の現實的になつて來たことを證するもので、正に「春」の記事を裏書するものである。

然るに藤村は尚も之に滿足しないで、遂に新体詩そのものを棄てて散文文學に手を下したのである。「落梅集」を出した翌年、「舊主人」「藁草履」の短篇を公にしてから以後は、專ら小說家として立ち、「爺」「老孃」「水彩畫家」「津輕海峽」「朝飯」を經て、三十九年に長篇「破戒」を出したのは三十五歳の時であつた。これらの長短諸篇はいづれも美しい詩の題材を取扱つたものではは

なく、人間の内部にこびりついてゐる美しからぬ性情、而もそれをどうすることも出來ない自然の力、人間日常の言動や思考がむしろ之によつて動かされてゐるところの强い存在、かういつたものに著目した作品である。表現の文体も之に伴うて、事實をありのまゝにポツ〳〵と敍して行くやうな風で、散文といふ中でも特に虛飾や誇張を避けたものである。尤も詩人藤村は、自己革命を試みると言つても、一朝にして感傷の甘さを脫却することがむつかしいけれども、之を詞藻華やかな詩篇に比べると、今迄ぼかされてゐた人間の欲情が、可なり露骨に明るみへ寫し出されたことが看取せられる。こゝまで來ると、藤村の文學は、題材の變遷と同時に文學の種類も變遷したことになる。而してこれが又年齡の關係を離れ得ないことである。

花袋の自己革命に就いては、既に述べたが、此の作者も本來詩人であ

つて、獨步國男玉茗等と共に、「國民の友」に純情の詩篇を出してゐたので、小說を書いても新体詩見たやうな風であつた。それが「女教師」の一篇に眼を覺ました三十六年が三十三歲であり、「蒲團」の一篇に大膽な自己告白を試みた四十年が三十七歲であつて、恰も藤村の「破戒」を著した年齡に相當する。獨步も同じく詩人から起つてレアリストになつたので、「女難」や「正直者」を書いたのが三十三歲の時である。秋聲は始めから詩人ではなかつたが、「おのが縛」で新潮流に乘り出したのが三十六歲の時である。風葉は硯友社の才筆であつて絢爛の技巧家であつたが、「青春」に作風の一轉を見せ、「戀ざめ」に現實の實相に入らうとしたのが、三十一歲から三十三歲にかけての事である。

詩歌の方でも同樣の現象が見られる。星と菫の歌人と言はれた與謝野晶子が、「春泥集」に夫婦生活家庭生活の實際に題材を取るやうになつたの

は、三十四歳の時であり、泡鳴が「悲戀悲歌」に實生活の暗黑面に著想したのは三十三歳の時であり、有明が銀行や鐵工場を詩の中に引出して「春鳥集」の象徴詩を作つたのは三十歳の時であり、すべて青年から壯年への進程を實證してゐる。

評論界で樗牛は流星のやうに光りながら滅したけれども、抱月や天溪や泡鳴やが、自然主義の文學論をふりかざして出たのは、皆所謂中年の時代である。泡鳴が自然主義的表象詩論を發表したのは三十六歳で、その前に神秘的半獸主義を出したのは三十四歳、天溪が幻像破滅を論じ始めたのは三十一歳、花袋の露骨なる描寫を提唱し出したのは三十四歳、抱月の自然主義論を整理して美學上の土臺を置かうとしたのは三十六歳の時である。わけても抱月の後半生を見ると、文學に對する年齢の關係を明にすることが出來る。抱月は、湧返るロマンチシズムの血潮と、冷

えきつた理知の重石との間に、久しく惱みを續けてゐたので、十年若かつたら一擧して血潮に殉じたであらうし、十年年取つてゐたら分別して重石に從つたらうが、その中間にゐる唯今は、何れをも棄てかねて苦痛に堪へないと言つてゐたが、遂に思ひ切つて幻を棄てて實に就き、美しい理想を拋つて眞實の欲求に趨つたのは四十一歳であつた。文藝協會の內訌は中年者壯年者の幻像破滅の惱みに因ること少くはないのであるが、抱月の半生は恰も之を代表してゐるかのやうに見えるのである。

明治四十年代に樹立せられた近代的文學、即ち自然主義的文學は、先に述べたやうに、明治時代を貫通する文學の大道が、行著く所に行著いた現象には相異ないが、それをこゝまで持つて來たのは、作家評家乃至讀者が同じ步調で年取りながら進んで來たことに由るのである。換言すれば、明治末年の文學は、中年の文學であり壯年の文學である。青年の

若さは失はれて、世の中の裏表を見盡した分別顏の見える文學である。中年の作家や評家は、之を文學の至極として誇り、文學の本流だ主潮だと自惚れ、苟も此の作風に異なるものは、クラシックだ第二流だと排斥し去つた。讀者が之に共鳴し贊同し得る間はそれでも宜しいが、讀者の大勢が一旦之を離れかけると、忽ち文壇の主勢力たる地位を失ふのである。讀者も、評家や作者と共に年取つて來るから、或る點までは步調を共にして來るが、而もその大多數は、中年に入ると文學の讀者たることを止めるやうな實狀で、壯年の讀者は、もはや文壇に勢力のないものに變つてしまふ。その代りに次代の青年讀者が擡頭して來るのであるが、彼等はこれら壯年中年の文學を見ると、先づ之をぢゞむさく感ずる。潑剌たる青春の意氣から之を薄暗く感ずる。現實の奧底に徹して、その濁りをも渣をもほじくり出して見せてくれるのを痛快とは思ふが、また餘り

に殺風景に感ずる。從つて之に共鳴することが困難になつて、むしろ他の種の文學をと求める。自然主義の文學が下火になるのは、此の關係に出ることが多いのである。

一五　近代文學の一生面

明治四十三年、現實暴露の文學が盛に行はれてゐた頃、「三田文學」と「白樺」との二つの雜誌が發刊せられた。此の雜誌を中心として出た作品は、「早稻田文學」などに出る自然主義的の作品と色彩を異にしてゐた。前者は享樂耽美の傾向があり、後者は理想的人道的の傾向があつたのである。同じ頃に谷崎潤一郎、鈴木三重吉、森田草平などの新作家が出て、各自特色のあるものを出した。或者は惡魔的で、或者は浪漫的で、何れも自然主義的のものと作風がちがつてゐた。

「白樺」に出た作家に武者小路實篤、志賀直哉、有島武郎、長與善郎、里見弴などがある。武者小路は四十三年の「おめでたき人」から始めて、創作

にも評論にも最も努めた。志賀は四十五年の「留女」から此の方、小說に優れた腕前を見せた。有島は少しく遲れて大正四年頃から現はれて、多作第一の觀があつた。而してこれら作家の作物を通覽すると、著しい共通點が具はつてゐる。

第一には普通の人情を主とした點である。自然主義の解剖的科學的批評的精神が、動もすれば情を沒した冷酷さを有つてゐるのに對し、並の人間らしさを回復したことである。例へばこゝに意見を異にするところから衝突を起し、仲違をした二人の者がゐるとする。特に年齡もちがひ、敎育もちがひ、思想もちがふ時には、二人は到底理解が出來ない。徹底を要求し、妥協を排斥する自然主義の考から行くと、二人は遂に調和すべからざるものである。然しながら親身の關係の者なら、いつまでもその狀態であることは、堪へられぬ苦痛である。普通の人情からは到底忍

びきれない不自然な有樣である。どんな努力を拂つても、之を取除く工夫をしなければならぬ。これが人情の自然の姿である。

第二には愛といふものを靈的に取扱ふ點である。自然主義が生物學的に引ずり降ろした物質的動物的境地から、再び引上げて靈的のところへもつて行くのである。戀愛などは決して種屬保存の本能に過ぎないなどと濟ましてゐられる性質のものでなく、もつと深く高いところに根ざしてゐるといふのである。例へば兩性は共に完全な人格の半分だけしか有ち合せてゐないもので、他の半分を見出して結合しようと努力するものだと見る。世の中を歩き回つて共の半分に出會ふまでは、動搖が止まないので、それに出合はせて始めて落附き、始めて納まると考へる。だから一對の男女をしてその人格完成を遂げしめるが爲には、自分の愛人としてゐた者をでも、潔く讓り與へねばならぬ。これが即ち靈的の愛にな

るわけである。

第三には愛情の性質が廣汎なものになつてゐる點である。愛は個人的利己的のものと解せられる考へ方に對して、廣く人類を愛するといふ汎愛の意義を有つてゐる點である　己が妻子や愛人だけを愛するのではなく、全人類を愛するのである。だから愛の反面の憎といふものが無いわけである。如何にもコスモポリタンで、銘々の仕事も全人類の幸福を目標として爲されてゐるわけになる。作品はおのづと世界的になつて、國民的又は個性的特色を帶びない。だから日本人のやうな固有名詞を使つてあつても、少しも日本人らしくなく、日本の地名のやうな固有名詞を用ひてあつても、少しも其のローカルカラーが出てゐない。勿論英國人でもなければ佛國の或町でもない、漠然とした世界人であり、茫然とした世界の或土地である。人名などは本來ＡＢＣで澤山であつて、地名も

イロハでよろしいわけである。

是等の共通點は、その善い特性であると同時に、その惡い特質である。然しながら自然主義的の文學の外に新機軸を出したことだけは認めておかなければならぬ。そしてそれが西洋大陸諸國の最近二世紀に亙る文學史上の現象と似通つてゐるところに史的意義を認めなければならぬ。但し此の事は、それが自然主義の時代を通過した後に到り得た境地でなければ許されない事で、唯の空想や唯の憧憬に過ぎないものなら、それは世間知らずのおめでたい人達のおもちやといふだけのものである。

これに比べると「白樺」以外のものは、自然主義の强壓を通りぬけて來たらしい閲歷の豐富さを持つてゐる。世の中は臭いもので、蓋をしたつて無くなるものではないが、蓋を取除けてひつかきまはせば益々臭いばかりである。自然主義の文學のやうに現實を暴露するだけでは仕方がない。

暫くでも宜しい、こんな臭いものの存在しない世界を建立して、そこに生きがひのある生活を營みたいものである。それならこんな世界は實際世の中に在るものか。又は世の中に本當に造れるか。曰く大に在る。大に造れる。次に揭げるやうな文學にそれが見えてゐる。

彼等の或者は、過去の文學に見えた社會狀態の中で、好ましいと思つたものを、今日の世に、自分自身に實現しようとする。假令好ましいと思つても、今の日本に實現せられさうもない社會狀態ならば、それは空想であり、憧憬に過ぎない。平安朝貴族の生活は、いくら好ましくとも、今日自分達に再現することは不可能である。江戸時代の戲作に見える社會狀態ならば、よし安永天明の頃と同樣には行かないまでも、或程度まで實現することが出來る。江戸趣味の生活は今の東京でも可なりに實現せられる。これが一つ。

又或者は、同樣の要求から、異國情調の世界を建立して、そこに生きがひのある世界を見つけようとする。これも憧憬してゐるだけではいけない、實際自分の生活にするのである。大体の傾向は江戸趣味を追求するものと似てゐる。又新開地情調を喜ぶ流義も此の類である。これが又一つ。

又或者は、神經の連續的刺戟で快美な世に生きてゐるといふ意識を失はないでゐようとする。これは連續して絕えないことを必要とする。一瞬でも斷絕すると、卒然としていやな世の中を感知するのだからたまらない。片時と雖も神經をだまくらかして、氣持善からしめるやうな刺戟を受けることを怠つてはならぬ。ボカンとして元の杢阿彌に返らないやうに用心しなければならぬ。無論刺戟は五官のそれであるから、美音よろしい、美色よろしい、美味もとより結構、芳香亦大に可なりで、絕え

ず新奇な刺戟を神經に與へることを努めるのである。これが昂じると、突飛異常な刺戟を求めるやうになり、變態心理の狀態に浸り込んで、やつと一時を滿足するやうになり、頗る惡魔的な行き方になる。これが又一つ。

次に又或者は、此の實人生を藝術化して、その技巧的の感興を味ふといふことに生活の意義を見附けようとする。例へばこゝに一人の男がある。相手たる女がかう言つてくれると善い、斯う動いてくれると善いと考へる。自分が斯うはたらきかける時にはかう反應してくれると善いと思つてゐる。幸に注文通りに行つた時に心ゆく生の滿足が味へる。女が自發的にそれが出來ぬならば、豫め教へてやつてもよろしい、脚本通りに言つたり動いたりしてくれさへすれば、こゝに生の樂みが湧く。痛ましい生活、くだらない實際生活、そんなものを改造し破棄してしまつて、

居宅を舞臺にし、居室を場面にし、已れ及周圍の人々を役者にして、そこに詩的藝術的技巧的の世界を建立するのである。但しこれが唯の幻想であつてはいけない、どこまでも現實の生活であらねばならぬ。そこに同じやうな考へ方でも古今新舊の相異點がある。これも一つ。

斯う擧げて來ると、こんな世界は隨分多いものである。色々共の相は違つてゐるけれども、現實の厭はしさを承知してゐながら、之に見きりをつけることなく、絶望の淵に臨んでゐても、そこから引返すところに共通點が認められる。

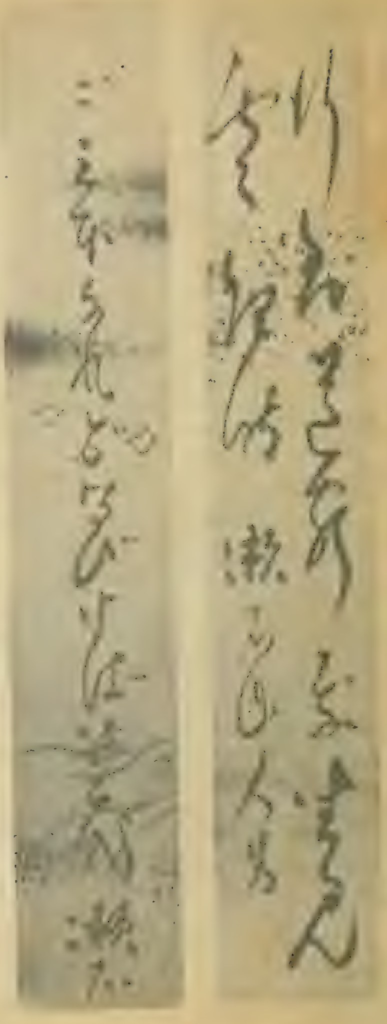
以上述べ來つたところを總括すると、享樂主義だの、耽美主義だの、惡魔主義だの、人道主義だの、新理想主義だの、新浪漫主義だの、諸種の名前のもとに攝せられるけれども、之を通觀すると、何れも人生を肯定して、どうにか唯今の狀態を切拔けて生活の意義を見つけようとして

ゐる。蓋し此の考へ方は、此の世を否定し ドス黑い厭世觀に落込みたくはなく、絶望的な決定觀に推附けられるのに滿足しないところから起るので、そんな時に開かれる一方の血路は、唯どんな方法かによつて人生を肯定する行き方だけである。人生を肯定すると言つても、昔からの樂天觀に通有の空想的な夢幻的な回避的な肯定なら、何等珍らしいことは無いのであるが、一旦否定しなければならないやうな世相に面接して、その暴露された醜さに戰慄した後に、それでもこれをどうにかしようと立上がつて來る肯定觀なら、本當に世路の辛酸を嘗めたものだけが有ち得る心境であつて、可なり複雜微妙な味に到達してゐるのである。此の種の肯定觀の重味は、一旦否定觀を通過して來てゐるところに存する若しさうであるなら、やはり現實の實相に根柢を置いての考へ方であつて、明治文學の大道には外れない現實重視の文學が出來るはずである。

但し當時出現した文學は、此の點に於いて稍々物足らないもので、今までドッシリした足並で歩いて來た自然主義の文學に對して、更に一歩を進めた重みがないのみならず、どうかするとまだ自然主義の難所を踏みも見ない甘いものだと思へるやうなのも無いではなかつた。然しながらとにもかくにも現實暴露の泥海から這上つて來た史的地位に立つもので、將來の發展を期待することの出來るものであつた。

これらの文學と比べると、一見甚しく性質がちがつてゐるやうに見えて、實はその根柢に自然主義的文學と反對の人生觀を抱く點で相通ずる一種の文學があつた。それは夏目漱石及その一流の文學である。

漱石は本來子規派の俳人であつたが、三十八年始めて散文の文學作家として現はれた。現はれると直ぐに「我輩は猫である」と題する、小說ともつかず隨筆ともつかぬ長篇を出して、文壇に重きをなした。爾來「坊ちや





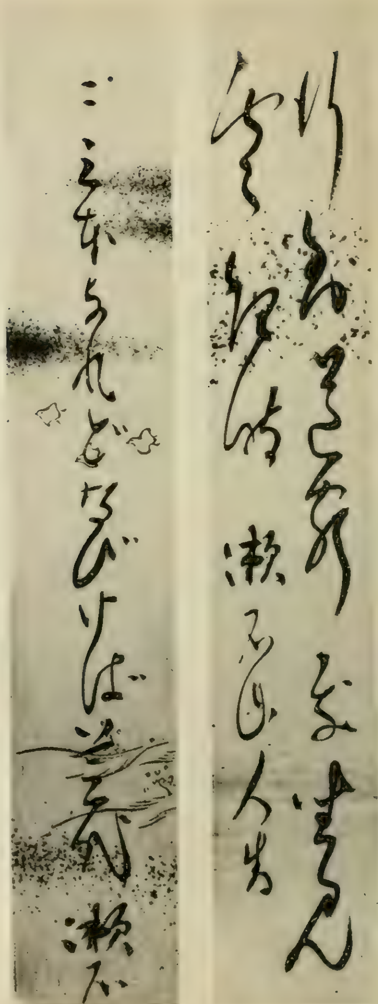
夏目漱石の筆蹟と其の肖像

但し當時出現した文學は、其の點に於いて稍々物足らないもので、今となつてこそかうした事を書いて居るが、自然主義の文學に對して、更に一歩を進めた處ものがないのみならず、どうかするとまだ自然主義の難所を踏み得ないものだと思へるやうなのも無いではなかつた。然しながらとにもかくにも從來の寫實主義の型から離れて來た主觀的傾向に立つもので、時事の意義、夏目漱石の筆の顯はれ、其の首途だ。

これらの文學と比べると、一見著しく色彩がちがつてゐるやうに見えて、實はその傾向に自然主義的文學と反對の人生觀を抱く點で相通ずる一種の文學があつた。それは夏目漱石及その一派の文學である。

漱石は本來子規派の俳人であつたが、三十八年始めて創作の文學作家として現はれた。現はれると直ぐに、其筆は圓熟して人を驚かせる、小說ともつかず隨筆ともつかぬ長篇を出して、文壇に重きをなした。處女作「坊つちや





んや「草枕」等の短篇を經て、四十二年「それから」等の長篇に移り、大正五年「明暗」を未完にして死ぬるに至るまで、長短の小說隨筆を出して大きな足跡を斯道に殘したのである。漱石の作に見える人生は、やはり自然主義的の文學に現はれたやうな苦悶の人生である。然しながらその生き方は、そのいやな世の中にこびり附いて苦悶を續けるのではない。一度は此の境界を脫却して之を客觀し得る心境を作り、更に此の世の中に歸り住んで、その脫越の態度で人生を味ふのである。だから人生に對するに愛憎の差別を現はさない。悠々とした餘裕があつて何物にも拘泥しない廣さが感ぜられる。當時自然主義的文學の全盛時であつたから、此の餘裕のある態度がひどく異彩を放つて文壇を驚かしたのであつた。

世間では此の態度を稱して俳諧的といつた。それは當つてゐる。人間の生死問題や自己の煩悶苦患をも、月花と同じに眺め得る點は俳諧的で

ある。例へば重病に苦しむ、困憊の極に達する、その心持を文學に作り、その瞬間に文學的解脱の境に入るのである。又例へば世の中は不合理に出來てゐて、持つて生れた正義感を滿足せしめない。利欲の肉塊名聞の臭骸、何れを見てもいやになる。これを舞臺上の喜劇を見る氣持で眺める。その刹那そのいやな味から解放せられるのである。此の觀方は即ち俳諧に立脚したもので、江戸時代のものに比べると甚しく嚴肅味を加へてはゐるが、やはり芭蕉の建立した世界を近代的にしたものといへる。

世間では又之を回避的だといつたが、それは當らない。眞正面から人生にぶつつかつて其の苦悶を經驗するやうなことは、既に自然主義的文學の方で十分爲し盡してゐる。今更其の中へ飛込むことも要はなく、さればと言つて回避することもいらぬ。恐れず憎まず一段の高所から之を包愛しようと言ふのである。人生の實相は醜であるが、之を醜として暴

露することはもう濟んでゐる。之を平かに受取つてその總べてを包愛し、十分の餘裕を以て此の生を味はうとするのである。だから回避的でなくて、むしろ低徊的といふ方が當る。

漱石が「それから」を出し「門」を出した時、自然主義風に變つたと言つた評家があつたけれども、それは此の肯定的態度を見逃した爲の誤りである。東洋風の特に日本的の對人生の態度であつて、新理想主義とか、新浪漫主義とか、人道主義とか、すべて西洋文學に見られるイズムの名稱を之に當てはめるのは無理であるが、絶望せず、ヤケにならず、靜に生の味ひに徹しようとするところは、正に肯定觀の文學である。而して肯定觀の文學としては、大正の初頭までに出たものの中で最も特色のある、又最も見ごたへのあるものであつた。それは現實のどん底を見極めて來てから、さて之を振返つて眺める境地に立つてゐるからで、即ち自然主義

的の難所を經過してしまつてゐるからである。

以上述來つた文學は、明治の終に芽を出したものであるが、大正に入つて段々生長して來て、自然主義的の文學が行詰まつた頃から、おのづと之に代るやうな形勢になり、中年以上の評家や作家が自然主義的の立場から烈しく非難し擯斥したに係はらず、青年讀者の同情を集めて漸次文壇の大樹と繁茂したのである。但し此の類の文學は、自然主義的文學の時代のやうに一種類に統一せられてゐないから、おのづと紛雜混亂して見えるので、どうかすると共通する根柢を見落すやうになるのである。

一六　人生肯定の文學

此の類の文學は、自然主義的の文學に對する反動の性質を有つてゐる。其の出現は必ずしもそればかりに因るのではないが、出てからは反動の勢に乘つた氣味が無いではない。此の點で、これらの文學は、西洋文學史上二十世紀の初めに出た新文學の性質に似てゐる。日本文學の變遷は、西洋文學の歷史と同一の徑路を取るとは定まつてゐないが、自然主義以後の文學の潮流は、會々似通つた狀勢に在るのである。蓋しナチュラリズムの文學は、事物の眞相を表出するに遺憾は無かつたが、どうもいやに學術的で、殺風景で、味もそつけも無いものが出來たりした。中には人生の眞相を描寫しようとしながら、却つて人情の自然に遠いものが出

來たりしたのである。極端まで推して行つて行詰つて、こゝに反動が起つたのである。こゝで又西洋文學とのパラレルが引かれる。

ナチュラリズムがどうして行詰まつたか。そは第一に、科學的の人生觀が世の中の不思議の滅絶しないのに閉口して身代限りをした事に由るのである。第二に、この種の文學作品に取扱ふ題材は、確實なファクトに相違ないが、人間といふものは現に在る通りの事實では滿足しないもので、日常平凡の事物以外に、偉大な事、英雄的な物を要求し、醜惡暗黑な事物の外に光明的な快美な事物が欲しく、現實的なものばかりでなくて理想的なものも有りたく思ふのであるから、文學の題材にも之を要求するやうになつたのである。第三に、科學的研究法で精細に探究しようとはしたが、人生には他の生物や自然界の事物のやうに實驗といふ方法を適用することの不可能であることが分つて來たのである。同時に描

寫法に就いても、人格を沒した客觀寫實は到底出來ない相談であつて、心を明鏡止水にするの、無念無想になるのといふけれども、それは畢竟論理的の遊戯だといふことが分つて來たのである。

此の行詰りから反動を引起したのが、西洋では大略一八八九年前後といはれる。それはフランスやベルギーで、理想主義、唯心說、自由意志論に關する著書や創作が頻りに出初めた時を指していふのである。此年あたりを回轉軸として新しい世界が開けて來て、フランスは勿論、ロシヤ、イタリヤ、ドイツ、オーストリヤ、ベルギー、デンマーク、ノルウエー、スウエーデンなどの大陸諸國は、すべて此の仲間入りをなし、ナチユラリズムの流行に外れてゐたイギリス、アメリカまでも此の新潮を汲むやうになつた。

大体に於いてナチユラリズムの反動であるから、主觀唯心の思潮の復

活となつて現はれるはずである。即ちナチユラリズム以前に榮えたロマンチシズムの復興となるわけである。然しながら以前のロマンチシズムがそのまゝ再興するのでないことは言ふまでもない。むしろナチユラリズムを併合した新しいロマンチシズムの興起といふ方が適當である。即ちナチユラリズムの破壞的精神や、消極的悲觀的人生觀や、無理想無信仰の生活や、醜惡病的な事物の描寫などを抜きにして、ロマンチシズムの理想主義、情緒主義、內容主義、獨創主義、直觀主義などを取入れたものと見てよろしい。此のイズムをNeo-Romanticism又はNeo-Idealismと名づけるのは、これらの特質からである。

此のイズムの人生に對する態度は、何よりも先づ之を肯定することである。この生を愛し、この生を創り、生ほし立てて行かうとすることである。即ちすべてナチユラリズムの否定憎惡破壞の反動である。「生れ、

現はれ、滅ぶ、此の中の一番後の語を忘れてしまへ、人間は死なないものと考へて生活し、唯今の刹那が永遠に續くものと考へて之を味ふが善い」といふのは、即ち此の人生觀を端的に言現はしたものである。だから宗教を取るにしても、現世に活動することを基礎とするものを取つて、從來のやうに未來の救濟を主旨とするものを取らない。ナチユラリズムで破壞せられた宗教といふものが、新たに復活するにしても本のまゝではいけない。エレン・ケイの宗教觀などが好い例である。又自我の觀念が益々强烈にはなつて來るが、權威の破壞だけで滿足しないで、新生活を建設しようと努力するやうになる。ロマン・ローラン等が廣い愛を唱へるのは、人類愛を以て此の世を改造し、自我を基礎とする新生活を樂しむことが出來るといふ考へからである。無論これは、ナチユラリズムの否定觀を一旦味はひ來つた後に到り得た境地であつて、世の中を知らない

坊ちやんの空想では無い。

次に、此の人生觀の特色とするところは、唯心唯物の混一、靈と肉との一致といふ點にあつて、ナチユラリズムのが專ら唯物的肉休的であつたのと違ふのである。これには色々種類があつて、一概に考へると誤解の起る處がある。此の世は無趣味であり、不愉快であり、醜惡であるから、せめて自己の快樂だけでも求めて、それに生きがひのある人生を見つけようと努力するのも、其の一つである。これは一寸見ると安つぽい樂天觀のやうであるが、實は絕望的な世の中でも直ぐに見切りをつけないで、一度は見直して行かうとする根氣な努力があるのである。又一寸見ると怖ろしい世の中に面と向ふのがこはくて逃廻る卑怯な觀方と考へられるけれども、よく檢べて見ると、死ぬかヤケになるかの瀨戸際をやつと蹈みこらへて此の世にへばりつき、飽くまで快樂を貪つて、一刻の

油斷なく新たな刺戟を求め、自分に與へられる總べての快味を吸取らうとする積極的な見方である。

又、心靈界の神秘は不可知なものだとして諦めるにも及ばず、神秘は無いものだと多寡をくゝるにも及ばない、人間には肉の世界から靈の世界を覗きこむ直觀といふ力がある。これによつて髣髴と事物の本体を見ることが出來ると觀ずるのも其の一つである。之を見るのは無論科學的の明晰さからでなく、漂渺たる情調の中からである。無形の實相を有形の事物に寄せて見るのである。肉の中に靈を見るのである。即ち靈肉の合致した觀方である。

又、科學的研究を尊重して生物進化の學說を承認はするが、それがために宿命觀に陷らないで、更に人間以上のものに進化しようと心がける行き方もその一つである。人間は進んで現在のものよりも優越な健康と

頭腦とを有するものに爲らねばならぬ、少くとも人の中の英傑になり、更に進んでは人の中の神にならねばならぬといふのである。

又、唯物的宿命的の人生觀では、自己を否定してその生滅を蟲けらの生死と同様に見てるたが、生命は捨てたくない、生きられるだけ生きたいから、生活を改造し人生をより善くしてその中に長らへ住まうといふのもその一つである。之はナチユラリズムが捨てた理想といふものを、復た拾ひ上げたのである。生命の愛、人間の愛、人類愛、人生愛、すべて獸道に對する人道を行かうとする人生觀である。

以上述べるやうな人生觀を抱持してるるのであるから、その題材として取るものは大略推定し得られるのであるが、試みにナチユラリズムの文學に見えなかつた事物に就いてだけ檢べて見よう。

第一に、心靈の力を描き、靈魂の覺醒を寫し、ナチユラリズムに虐げ

られてゐた人間のたましひの人生におけるはたらきを書き出すのである。但し此のたましひは、肉と離れてはたらき、肉を苦しめて始めて光輝を放つと思はれてゐる舊式の靈ではない。肉の中に宿り肉と共に消長するもので、どんな惡黨にも、どんな困窮の中にも、依然として光り輝くものである。

次には、神秘の境地不可思議の世界に著目し、科學の限界の外にあつてナチュラリズムの眼力の及ばない事物を取扱ふのである。人間の能力にも豫感だの、直覺だの、透視だの、夢想だの、奇蹟だのと、種々の不可思議のものがある。又人間生活にも五官で知覺し得ない、靈魂だけが到達し得る神秘の世界がある。それを感得し來つて表現するのが最高級の文學である。つまり事實を知り盡して、それによつて其の奥にある實体を見ようとするのであるが、それは科學的研究や論理的推測ではだめ

であつて、主觀の力で直覺するより外に方法がない。而して其の實体なるものが即ち事實の生命であり意義であつて、これがなければ自然主義の方で尊重する事實といふものも、大に價値を失ふのである。事實といふものは唯實体を象徴するところに意義を有つので、從つて現實界は心靈界の象徴として、肉は靈の象徴としてその價値を保つだけである。だから「目に見ゆる世界だけが現實でなく、見えない世界が必しも夢幻でない」ので、見えないところにも現實は存する。これが舊式のロマンチシズムの神秘と違ふところで、二者の區別は、現實の上に立脚してゐるか否か、ナチユラリズムを通過して來てゐるか否かにあるのである。此の題材を取扱つたのをSymbolismの文學と言つてゐる。

次によく取られる題材は、人工の世界、技巧の生活であつて、現在の世の中は厭はしく住むかひもないから、自分だけにでも氣持の善いやう

な世界を求めて、こゝに生きがひのある生活を營まうといふのである。實物の女の顔よりも繪に書いた女の方が好きだとか、本ものの水や樹よりも芝居の舞臺に使ふ拵へものの方が好きだとかいふのは、病的な嗜好だと言つてしまへばそれきりであるが、本物に愛相をつかした時には、誰れでも反動的にこんな心持になるものである。藝術を實生活に移すなどもこの仲間であつて、昔風に此の世ならぬ別世界として藝術の天地に遊ぶのでなく、自らの生活そのものを藝術化するのである。又突飛な異常な强烈な刺擊を持續的に神經に與へて、之を昂奮せしめ緊張せしめて、そこに生きがひのある生を享樂しようといふのもその仲間である。こんな事は一種の變態心理で、近代文明の生んだ病的狀態とも見えようけれども、マックス・ノルダウが躍起となつて非難するほど悲觀すべきものでもなからう。神經質ではあるが、普通ならば到底堪へられさうにもない

強い刺擊に堪へ〳〵て行くのだから、却つて神經が強いのだとも言へる。又同じ仲間に、現前のいやな生活を避けて、過去の世に見る生活、異國に見る生活を摸倣したり實行したりして、そこに生きがひのある生活を求めようといふのがある。これも昔風に別天地に心を遊ばしめるといふやうな空想的のものではない。まして古人を友とするなどといふ殊勝な心がけのものではない。憧憬だけでなくて本當に己れの生活にするのである。此の條の文學は、或ものはAestheticismと呼ばれ、或者はDiabolismと呼ばれ、或者はDecadentsと稱せられてゐる。

次によく出る題材は情意生活であつて、これはナチュラリズムの理知偏重の反動である。但し情意を取扱ふと言つても、前のロマンチシズムのやうに理知を輕視するのではなく、どこまでも經驗に立脚し知識に基礎を置き、聰明な知力を働かせて冷靜嚴肅な態度で之を取扱ふのだから、

狂熱とか盲動とか、感傷とか頽廢とかに陷らない。愛情を取扱ふにしても、戀は神聖だとしてすべての物の上に置くとか、戀人を崇拜してその前に跪くとか言ふやうな風でなく、人格の完成のために自己の缺陷に補充を求めるのであるとか、兩性の接近には性愛の外に友情が存するのを認めるとか、すべて理知で裏づけられた情意の動きを觀察するのである。

又、ナチユラリズムの文學が、有るがまゝの世の中を描いたのに對し、あらねばならぬ世の中を寫すことを特色と見なければならぬ。これも黄金世界を空想したり、古の盛時を追懷したり、此の世以外に天國や極樂を憧憬したり、未來に淨土や樂園を期待したりするのでなく、現在の生活の上に實行し、渾身の努力で之を實現するのである。單に精神的に其の境に入るのでなくて、心身同時に、肉靈共にそれを獲得するのである。これには又色々の種類がある。ニイチエが人類の進化を認めて超人を說

いたのもその一例である。ニイチエの考へ方が日本に紹介せられたのは、ナチユラリズム風の文學の行はれるよりも以前であつて、樗牛の文明批評家としての文學者を書いたのは、三十四年のことである。恐らく當時にあつては、ニイチエの思想史上乃至文藝史上の地位を正當に理解することはむつかしかつたであらう。自然主義の主張者が、ナチユラリズムをニイチエよりも新しいと信じてゐたほどであるから、ニイチエの思想の思想史的文藝史的地位を理解しての論評が少かつたことは、想像するに難くない。無論ニイチエほどの人は、色々の方面から色々に觀らるべきもので、一方に片つけることは無理だとも言へるが、大体に於いて新浪漫主義乃至新理想主義の中の一つと見ることが出來るのである。又イブセンが劇に第三帝國、即ちギリシヤ・ローマ風の唯物でもなければガリリア人の唯心でもなく、キーナスやヂオニソスの帝國でもなければゴツ

ドやキリストの帝國でもなく、自己の優越を知る人間の肉靈一致の帝國を說いたのも、其の一例である。イブセンはロマンチシズムからナチュラリズム、更にネオ・アイヂアリズムと、近代文藝史上の變遷を一身に體してゐるのであるが、三十四年月郊の翻譯が出た時分は、そんな意義など少しも知られてなかつた。樗牛の評論に出た時でも尙その通りであつた。三十九年彼れの訃音の傳はつた頃になると、その自然主義的の一面だけが、やつと我が國に知られたのである。然し彼れの晩年の作は神秘的象徵的で、二十世紀の新浪漫主義の風格を具へてゐるのである。又彼のトルストイやドストエフスキイがナチュラリズムが捨て去つて顧みなかつた理想を拾ひ上げたのも、その一例である。トルストイの我國に知られたのは、二十四年頃であるが、その作品がこんな地位を占めるものだとは、曾て思ひ寄らなかつたドストエフスキーの「罪と罰」が翻譯せられ

たのは、二十五年であるが、此の人の作が、あるがまゝの人生を觀て、共の醜惡を知り盡しながら、之を捨てず、どこまでも愛護して之を改造しようとするものだとは何人も知らなかつた。トルストイは貴族中の平民主義者、「罪と罰」は探偵小説の高級なものといふ位の理解でゐたのである。けれども彼等の作の中心思想は、何れも現實の上にしつかりした足場を置いた理想主義であつて、即ち新理想主義の中に數ふべき第一のものである。又かのロマン・ローランの題材は最近に於ける著しい例であつて、悲觀すべき人生に出遭つて之を避けたり棄てたりすることなく、まともに之に對向する勇氣を振ひ興し、悲痛な運命と奮闘して之に打勝たうと努力する實行生活を描寫してゐるのである。此の作者の我國に知られたのは、上述の人々とちがひ、新氣運がめぐつて來てからの事で、言はゆる眞勇主義など全く新しい發見である。此の考へ方は、人生の暗黑

な一面と光明の他面とを併せ觀る者でなければ爲し得ないだけでなく、暗黒の一面の中にも内部に潜む光明を認め得る者でなければ爲し得ぬところである　肉の生活にも靈を見、肉体の運動にも思索の影の躍動するを觀取し、濁穢の中にも清淨を認め、俗の中にも雅を發見し得る者でなくては、爲し得ぬことである。以上述べたものは、或は新浪漫主義といはれ、或は新理想主義といはれ、或は Humanism といはれる文學の取る題材である。

右の題材を一歩進めると、文學特有の世界から人生の巷に出で、實行世界を取扱ふことになる。象牙の塔を出て實行の生活に入るわけである。人生派といはれるのは此の類のものである。國家、社會、政事、軍備、産業、勞働、民衆、娯樂、その他諸種の實際問題を取扱つて、之を愛し之を樂しみ、熱意を以て現前の生活を遂げる勇氣ある事實を描寫する。

人生とは何ぞやといふやうに、その目的や意義を云々する代りに、直ちに實行生活の内容に立入るのである。此の傾向は、ロシヤを發祥地として世界の各地に弘まりつゝあるので、ロシヤ近代の小說戲曲は本來客觀的に解剖分析を試みるナチユラリズム風でなくて、人間を離れず社會事情を離れぬヒユマニズム風の傾向を有つてゐたのである。

一七　暗示の文學と理想主義の文學

此の類の文學は、その創作に方つて、題材の研究調査に精細な確實な方法を取ることは、ナチュラリズムの文學と同樣であるが、唯その方法の可能に限界のあることを承知してゐる。世の中にはその限界以外の不思議な事柄がある。それを知り明らめるには、科學的客觀的研究だけでは覺束ない。どうしても直觀の力を借りなければ出來ないことがあると考へる。直觀に由るのだから、科學的研究のやうなまだるつこしい順序と方法とを具へた組織的のものでない。一擧して事物の生命をつかむ綜合的のものである。ナチュラリズムのやうに人生の斷片を描出するのでなく、絶えず流動し進展する人生の全体を直觀して、その中心生命をつ

かみ出すのである。

かくの如き制作方法を取るのだから、之を表現する手法も、如實と精細とを主とした寫實的描寫だけではもの足りない。事物の微妙な内容、心靈の幽玄なはたらき、神秘の世界の不可思議の實相は、口舌の能く寫し文筆の能く描き出し難いかどを有つてゐる。そこで已むを得ずその雰圍氣を描き、その情調を現はし、その中に髣髴として作者の直觀し得た實体を暗示しようとする。即ち寫實の筆法だけではいけないから、暗示の筆法を用ひるのである。而してその描くところの雰圍氣は即ち客觀の事物であらねばならず、情調も亦具体の事物で表はれねばならぬ。その客觀の事物、具体の事物を通じて今描き出さうとする題材の實相、靈魂、本体を暗示するのである。此の場合に取られた有形の事物を名づけて象徴といふのである。これは描寫法としては最も微妙なものであるから、

説明解釋はむつかしいが、用ひる手段が巧妙に行くと、その外のどんな方法よりも善く當てはまつた表現になるのである。

制作上の此の技巧は、詩にも用ひられ、小說にも用ひられ、脚本にも用ひられる。ホーフマンスタールの脚本に「チヽアンの死」といふのがある。大なる畫家の死を描くのを主題としてはゐるが、舞臺にはチヽアンが出て來ない。舞臺上に見る客觀の事物は、すべて大人物の死が人心に與へる動搖不安の心持を表現するものであつて、即ち無形の不安動搖の心持を暗示する象徵として描き出されてゐる。小說や詩にも各々此の例があるのである。此の技巧が我が國に行はれ始めたのは、詩の方からであつて、二十九年の頃既にフランス象徵詩人の作品が傳へられ、三十一年にはそれらサムボリストの作風が紹介せられてゐた。然し當時はまだ研究として解說として發表せられてゐただけで、作家の中心の要求から、作

詩の上に實際に用ひたのではなかつた。爾來此の新しい技巧が、フランス近代詩人の作品の翻譯によつて其の用ひ方を指南せられ、追々實地に試作するやうになつた。其の翻譯で斯界を刺撃したのは、上田柳村であつて、三十九年に出した「海潮音」がその記念であり、創作に用ひて斯界に先鞭をつけたのは、蒲原有明と薄田泣菫とであつて、三十八年の有明集「春鳥集」と三十九年の泣菫集「白羊宮」とが共記念である。「海潮音」にはボードレエル、ヱルレエン、ヱルハアレン、ローデンバッハ、レニエ、モレアス、マラルメを始めとし、フランス、ベルギーの象徴詩人の作を紹介し、「春鳥集」には三十七年頃から試作した象徴詩を收めてゐる。その自序に言ふ。「自然と我とは一なり。自然の呼吸を我に感じ我の影を自然に見る。既に詩想に此の新意あらば、其の表現に新なる方式を要するは自らなる勢なり。かの音節格調措辭造語の新意に適はんことを求むると共に、邦

語の制約を寛うして近代の幽致を寓せ易からしめんとするは、洵に已み難きに出づ」と。又「白羊宮」には三十八年以來の象徵的の作を收めてゐる。多くは自然物に人間生活の趣致を寓せたものである。以上は皆まだ試作に屬するもので、技巧としてもまだ完全でなく、晦澁朦朧といふ謗りを受けないわけにはいけなかつた。つまりフランスのデカダン派の詩風を摸倣したもので、變轉期の時流に乘じたに過ぎないから、おのづと共の弊が見えるのだとも言へるが、其の神秘的、主我的、官能的、現實的な特色は、やはり近代新傾向の作風として認めなければならぬ。四十一年「有明集」が出た頃になると此の技巧も著しく進んでゐる。

文章に就いては、ナチュラリズムの文學が、無技巧、無飾、露骨、平面的といふやうな標語の示すやうな新しい文体を用ひたのに倣つて、ナ体は慣用の技巧を排し舊式の修飾を斥けて、平易自由なスタイルが工夫

せられてゐる。但しその新工夫は、常に事物の實相を表現しようとする努力なのであるから、時代を下るに從つて益々微妙になつて、色々の修辭法が現はれて來るのである。

此の種の文學は、自然主義的文學の冷嚴さを、ロマンチシズムの詩趣で和らげたものであるから、文學讀者に對する關係は甚だデリケートである。曩に述べたやうに、文學讀者の多數は青年であるが、青年は概ね感情的で、感傷し感激する素質に富み、純一純眞で正義感が強い。又多くは精神的靈性的で多く神性を保有し、理想的空想的で常に未知の世界を翹望し憧憬する傾向を有つてゐる。これらの特性は、それぞれ中年以後の人間の概して理知的で妥協性を有ち、物質的肉休的で動物性をも保ち、現世的散文的で實用に傾くのに比べて、一層明かにせられる。此の特質が即ち青年の若々しさである。此の若々しさを有つ青年讀者に愛好

せられる文學は、おのづと此の特性に適合するもの、又は此の特性を有する人物を描寫したものでなければならぬ。

自然主義的の文學は、その現實暴露の深刻さと敎權破壞の痛快さとで、一時青年讀者を動かしたとはいへ、冷嚴な態度、荒寥な人生觀は長く之を引つけて置くことは出來なかつた。その間の距離が漸次大きくなつて、遂に二者は離れてしまふやうな現象が見られた。獨歩の作がその文名に伴ふほどの讀者を得なかつたのは、別段の理由によるとしても、花袋が大正七年に出した「殘雪」が一部中年の讀者を除いて一般的に何等注意を惹かなかつたのは、讀者の多數を占める青年の心を離れたからだと見ることが出來る。藤村の大正六年に出した「新生」も亦之に準じて考へられるものである。秋聲の筆が大正年間に入つて、「爛」から「あらくれ」へと益々圓熟して來るに係はらず、讀者を得ることの思はしくないのは、是亦青年の

若々しさを缺いてゐるからである。抱月の評論の情理を盡した筆致は容易に他の追隨を許さないものであるが、その落附拂つた中年の趣味は、これも多數讀者に味解せられなかつたやうである。

此の點に於いて新理想主義乃至人道主義の文學は、青年の若々しさを具へてゐると言つてよろしいもので、從つて多數讀者の共鳴を得る要素を有つのである。先きに自然主義的文學の青年讀者に喜ばれた點、即ち教權破壞の痛快さや、原始的な簡素な自然狀態に復歸することのすがすがしさや、自我の尊重正義の主張等の小氣味よさなどといふ點は、此の新理想主義の文學にも存在するところで、特に自然主義的であるから喜んだのではなかつた。之に反して新理想主義等の文學では、これらの特質を備へてゐるだけでなく、其の上に青年の若々しさを有つてゐるのであるから、一方に經驗的知識を過度に尊重し、平凡醜惡な現實生活を過

度に價値づけ、虛無的宿命的科學的機械的人生觀を過度に唱道した自然主義的文學が下火になるに從ひ、漸次頭を擡げて遂に之に代つて文壇の主流となるに至つたのである。

然しながら最近の青年讀者は、同じく青年の名で呼ばれるにしても、二十年前の青年に比べると著しい差別がある。感情的である、純眞である、精神的である、理想的である、詩歌的であると言つても、二十年前のそれとちがつて、世間知らずのお大名の若さでない。從つて其の愛好する文學も、若々しい文學といつても、一時代前の浪漫主義でなくて、世の中を知り悉した自然主義以後の新興浪漫主義の文學である。イプセンの劇が年譜の順に三階段をなして變つたことは前に述べたが、目下の青年はその第三階段の新理想主義の時期に在るものと見てよろしい。即ち感傷的にのみ流れた甘い作品に同感せず、唯に研究的思索的なむつか

しい作品にも共鳴せず、世の中の酸いも甘いも知り盡して而も感激の種切れになつてゐない作品を要求するのである。

明治の終から大正にかけての我國の新文學は、盡く此の性質に該當するとは言へないが、讀者との關係は大体此の範疇に入れて考へることが出來るのである。

歐洲大戰の思想界に及ぼした影響は甚だ深刻なものであるが、文學に對しても之に伴うて大きな陰影をかけてゐる。その中で特に目立つものは、自然主義的文學の極端に進んだものと、理想主義的文學の極端に走つたものとの二つである。就中後者は最も絶望的な境遇に陥つたドイツの文學界に起つた。それはExpressionismの名で呼ばれる文學である。

有るがまゝの人生を描いたのはナチユラリズムである。見るがまゝに寫し取つたイムプレッショニズムはこれと大差はないので、ナチユラリ

ズムの一種と見てよろしい。然し主觀の挿入せられるところに、後に起る新ロマンチシズムの豫言がある。新ロマンチシズムは即ち有らんとする人生、又は有らねばならぬ人生を描寫したものであつた。エキスプレツシヨニズムは更に之を極端にしたものであつて、大戰の慘禍に逢つて絕望のどん底におとし入れられ、その底から這上つて來た者の文學である。絕望が烈しかつただけ反動が烈しくて、極端な人生肯定に飛込んだわけである。

ロシヤ及スカンヂネビヤの作家を通じて見られる特色は、悲觀すべき現實を見つめながら、之に征服せられないで、熱意を以て其の中から浮び上らうとすることである。泥の中からでも眞珠を見つけ出さうとする態度である。此の人類愛の思想が、大戰のために絕望的の境に追込まれたドイツ青年作家に移されて、こゝに文學上のエキスプレツシヨニズム

が起つたのである。エキスプレッショニズムは、始めは繪畫に起り、次に劇に入り、詩歌小說に推及ぼして來たものであるが、まだ渾沌として海のものとも山のものとも分らない。大作家といふべきほどの人もなければ、傑作と稱すべきものもまだ出ない。唯今までに出たものを見ると、作者の主張が强調されて出てゐるだけで、具体の重みを有たない主觀の露出がなま〳〵しく見られるばかりである。脚色あり、人物があり、事件があつても、それは結論を引出す道具に使はれるだけで、實在の人物であり事件であるといふ感じが起らない。讀者には、結論を了解しさへすれば、途中の事實はどうでも善いものになつてしまふ。要するに藝術としてはまだ未熟なもので、後日大作の出る可能性はあるが、まだ反動藝術の動搖期に屬する。無論我が國にはまだ見られない作風である。然しながら、ドイツの青年作家はこんなものを作らないではゐられなかつ

たのであるから、是亦一つの新理想派の文學として、文壇の大勢に關與することを認めなければならぬ。

一八　人間味の文學

文學に取扱はれる人間、乃至人間生活には、大略三種の型がある。第一は高うして仰ぎ見るべきもの、第二は低うして見下すべきもの、第三は高からず、低からず等分に見比べて親しく接すべきもの。

茲に英雄あり、神機妙算立ろに成り、行動すべて人間業とも思はれない。こゝに藝術家あり、藝道のためには多年の恩を棄てて師匠に背き、絶ち難い戀を絶つて愛人をも棄てる。こゝに忠臣あり、最愛の一子を主君の身代りに捧げ、忍ぶべからざる慘苦にも甘んずる。其の他高僧哲人烈女のやうな傑出したものを始め、科學者教育家事務家のやうな尋常の業務に從事するものに至るまで、此の種のヒロイックな生活を營むもの

は、即ち第一種の型に屬するのである。

一青年あり、奸智と世才と美貌とを用ひて誘惑を試み策略を弄し、利欲のためには爲さゞるなしといふ狀態で、薄給の雇會社員から大新聞の社長に成上る。又一人の壯年男子あり、少年の日の純潔心と正義感とを失つて、甚しく肉體的になり、食色をあさつて本能に殉ずるやうな所業をなすに至る。其の他酒毒の遺傳で荒みきつた淫蕩生活をする女がある。父の因果が子に報いて精神的缺陷の年と共に暴露して來るものがある。泥路を引ずつて行くやうな頽廢した生き方で、何時晴々しい日を拜むといふ希望もなしに、どん底の生活に甘んずる青年がある。此の種の獸のやうな生活を營むものは、即ち第二種の型に屬するものである。

一人の高僧がある。法を求めて異鄕に旅した。此の旅もとより生還を期せられないし、家鄕に未練を殘すはずもなかつた。而も積年異人の間

に住み同行の人に死別れて、孤影私かに悲みを懷ふやうになる。偶々故國の產物を目にしては淚せずにはゐられなかつた。病に臥してはすゞろに鄕國の食が戀しくなつた。此の種の生活は卽ち第三種に屬するもので、手の屆かない高い所にゐると思つた人も、之を見ると親しむべきなつかしいものになる。

以上三つの生活相は、文學の題材として取扱はれた跡を見ると、大体歷史的に次序をなして現はれてゐるので、三者が互に波をなして相消長してゐる樣子が分る。卽ち第一の相は舊浪漫主義の文學に現はれるもので、大体に於いて十九世紀以前の文壇に榮えたものであり、第二の相は自然主義の文學に現はれるもので、大略十九世紀半ば以後の文壇に行はれた題材であり、第三の相は新浪漫主義の文學に現はれるもので、大凡二十世紀の文學界に主要な題材として取扱はれるものである。

右三種の中第三のものは、我が文壇に於いても、最近可なり目立つて行はれる題材である。假りに之を人間性に立脚した著想と言ひ、或は又人間味の描寫と言ふなら、最近文壇の主要題材の一つは、神にあらず獸にあらぬ人間であると稱して善からう。無論此の人間性といひ人間味といふ言葉は、哲學的又は科學的の名稱でなくて、全く常識的の稱呼である。神人、佛陀、天使、仙人、聖賢、高僧、英傑、忠臣孝子、節婦烈女等が、神性を帶び神味を有つてゐるのに對し、又鬼魔、凡人、俗物、狂者、デカダン等が、獸性を帶び獸味を有つてゐるのに對し、凡俗にも聖賢にも人性を認め人味を見ると言ふ程の意義に用ひるのである。

人間は本來一むきに偏つてゐるものでない。本居宣長が源氏物語の評論に用ひた言葉を借りていへば、漢文に見える人物評のやうに一かたにつきぎりのものではない。常に變化流動するものであるから、色々の性

情を兼ねてゐる。神性と獸性とを併せ有ち、聖人と惡人とを兼具してゐる。凡夫にして佛性を具へてゐるのが即ち人間である。斯うしたライフは、第一のライフが高うして近づき難く、眞似難きに對し、又第二のライフが低うして近づき難く、親しみ難きに對し、最も親しくなつかしく覺えるものである。

此の見方でライフの描寫を試みた文學が、最近の文壇に可なり著しく見られる。例へばイエスといふ人物を扱つて小說を作るに、神の子と扱ひ、超人間的性格を附與し、清淨受胎で出生せしめ、奇蹟を行はしめ、復活せしめ昇天せしめるのは、第一の見方であるが、凡庸の腕白で惡戲もすれば喧嘩もする唯の子供であるものが、救主出現の豫言と故國現狀の衰廢とを照し見てすゞろに英傑憧憬の念に堪へず、時勢の促すところ救主の自覺を起す者世に輩出するを聞いて、我こそ救主キリストではな

いかといふ信念を持つやうになつた一個の宗教的天才と見るのが、即ち第三の見方である。イエスは救主の自覺を起した人間の中の一人であつて、決して神秘不可思議の存在、人間以上の靈物でない。聰明で熱意があり、神經が鋭敏で頭腦の透徹した、自信の強い人間である。肺病を病んで生理的に此の傾向を進め、且當時の傳說や豫言から精神的に暗示を得、遂に神の子といふ確信を有つたのである。確信といつても人間のことであるから、時にぐらつくこともある。地上の天國を建設することの可能を信じて猛進の意氣を振ひ起すこともあるが、そんな大力量のないやうに思ひくづをれることもある。奇蹟は催眠術だから、自信の旺盛な時にはよく行はれるが、自疑の念一たび萠すと直ちに失敗する。肉體的欲求の淡泊であるのは病弱のせゐであるけれども、靑春の情で戀を思ふことが無いでもない。萬民の父にならうと志すものが、一家の夫となり

父となることは妥當でないが、マグダラのマリヤを妻にと思ふこともある。萬人を愛する神の心をと志すのであるが、我が直弟子十二人をすら同等に愛することが出來ないで、ユダを憎まずにはゐられない。怒りの心勃發して亂暴に近い所業もないではなく、凡人同樣に後悔の念に惱みもするのである。說教も亦譬喩の巧妙と天賦の辯才とで、人を烟に捲くだけで、論理も體系もなく、大切の神の解神の國の說などでさへ判然と組織立つてゐなかつた。却つてマリヤやユダの說によつて啓發せられる始末である。その奇蹟も催眠術のかゝらない連中には効果がないので、祭司の徒に捕へられる時に何の力も現はし得なかつた。復活は彼れの信念ではあるが事實にはならない、マリヤが紅淚を濺いだ墓の中にいつまでもそのまゝに橫はつてゐるのである。

耶蘇をこんな見方で取扱つたのが、江原小彌太の「新約」であるが、救世

主イエスがこれによつてみじめに引ずりおろされたやうにも解せられるが、又却つて親しむべき一個の人間になつたとも言へる。同じく引ずりおろすにしても、反動がきゝ過ぎて彼れの物欲を描いたり、衝動的な行爲を寫したり、殘忍性の發動を想像したりして、ひたすら獸性をのみ强調するのでは、これ亦人間に遠くなる。昔ダンテは神曲を書いたが、十九世紀のゾラは獸曲を作つた。何れも人生の一面を穿つてはゐるが、近より難い畏ろしさ氣味わるさがある。二者の中間を行つたのが即ち普通の人間の曲でなければならぬ。

例へば親鸞を題材にする時に、佛よ權現よと崇め立て、人間ならぬ聖人行者と祭り上げるのは、第一の見方である。之に反して肉食妻帶の欲求に燃え、色食の本能を暴露した破戒僧と見なし、獸性の一面を强調して描寫するのは第二の見方である。二者の中を執つて人間親鸞を認める

のが、即ち第三の見方である。

彼れは人類の導師として自ら標置したり、佛菩薩の自覺を宣したり、權威を以て教を說いたりしない。自ら稱して惡人と言ふ通り、愛憎の念が胸中に往來し、戀の煩悶も經驗してゐる。若い血に狂ふ弟子を叱り得ないのみならず、佛を信じ得ぬ實子をも叱ることが出來ない。裁きは佛陀のみがなし得る事と思つてゐるのである。人の世には惡がある不調和がある、けれども又善がある調和がある。そこに冥々の中に動く佛の力を認めないわけにいかぬ。すべてを許容する彌陀の大願を信じないわけにいかぬ。此の彌陀に我をも人をも任せる、彼れの心には此の絕對他力の信仰だけが燃えてゐる。斯う見るのが卽ち人間としての親鸞の取扱である。

日蓮を强い人とばかり理解すると、第一の見方になる。樗牛が彼れを

超人の適例と觀察したのを始めとして、逍遥の脚本「法難」に描き出した人物に至るまで、すべて勇猛果敢な人格に作り上げられてゐる。强い人は神人と同樣に人間味に遠いので、人間はもつと弱い者である。老子は從來普通に觀察せられるところでは、精悍の氣眉宇に溢れ、眼睛に人を凌ぐの勢を藏する强い人であるが、之を無抵抗の愛に生きる消極的な人と理解する時には、弱い人に見える。哲學者道士といふいかめしいものでなくて、一個の人間になるのである。

此の取扱方をしたものに、尙ほ法然があり、孔子があり、マホメットがあり、すべて從來神性の方面からのみ解釋せられてゐたものを、人間に引直して見たものである。

以上は過去の人物、歷史上の著名な人格を取扱つた例ばかりを擧げたが、此の見方は廣く人類に亘るのだから、現代の通常人に對しても用ひ

られるので、惡人にも人間味を認め、英俊にも人間性を見出すことになる。新浪漫主義の名で總稱せられるものの中に、最近重きをなす作風は即ちこれである。

一九　開拓者の悲劇（跋に代へる）

少年の日の追懷から執り始めた筆が、記憶を辿つて段々近い頃の事に及んで來た。その間約三十年に過ぎないが、隨分目まぐろしい變遷と開展とを經て來たものである。古代文學を研究してゐると、短くて五十年、長くば一世紀の間も、同樣の狀態で經過してゐるのを見受けることが往々あるが、明治大正はさすがに文學に於いても多事であつた。特に明治二十五年から四十五年に至る二十年間は、古今の歷史を通じて類例の少ない開展を遂げた時期である。

此の時期を劃してその光輝を今日に殘した明治の御代の終末は、自分に取つて忘れ得ぬ思出である。當時書附けた斷想の綴りを繰りあけて見

ると、「明治は遂に逝つた。文化のあらゆる方面に燦然たる光芒を發して永へに去つた。餘事は暫く措き、文藝の方面に於ける明治時代の名は、重大な意義のある劃期的の名である。その明治は去つたのである。なつかしい明治よ」と記してゐる。又「赫々たる天日が中空にして突如其の光を隱したやうな出來事である。七月三十日の御事は、草莽の微臣たる我等には、眞に寢耳に水であつた。擧措度を失ふ程の深い驚駭から辛うじて回復して見れば、我等はもはや明治の御代を過去の時代として眺めねばならぬ地位に立たされてゐるのであつた。爾來文壇の事を思ふ毎に、何とはなしに明治の文學といふ考が先に立つて來る。單に文學界の過去の時代といふのでなしに、明治の文學といふところに一の大きな意味があるやうに思へるのである」とも書いてゐる。自分は曾て「明治文學史」といふ小著を公にした。それは四十年の頃、まだ明治の時代といふものが斯う

も纒まりの附いた時期を劃するとは豫想しなかつた時の述作である。今にして思へば、明治文學史といふ名も、有り合せのお手輕な名でなかつた。

こんな時代にたちはたらいた文學者は、はたらきがひはあるが隨分骨が折れたのである。千歳一遇の好時節に生れ合せた幸福はあつたが、苦勞は又一通りではなかつた。骨が折れても、苦勞を重ねても、それに報いられたものは結構であるが、縁の下の力持に終つたり、犬骨折つて鷹に取られたり、いはゆる時代の犧牲になつたものは誠に涙ぐましいほど氣の毒である。明治時代のやうに目まぐろしい變遷を遂げ、華々しい開展をなした時代を追憶すると、文壇の犧牲といふことを考へないではゐられない。

急激な開展は革命である。革命を起す者は先覺者である。先覺者は鍬

のまだはいらない曠野を開拓する人である。開拓者は命がけの努力を續けて遂にその道に仆れるものである。後繼者のためには有難い事業ではあるが、當人のためには氣の毒な悲劇である。文壇の開拓者も、往々こんな運命に回り合せる。先驅者の悲劇といふことは、斯の如き時代に最も多く現はれる。

ヘーゲルが思想開展の法則を說いた辯證法は、有らゆる事物の歷史的開展の說明に應用せられるもので、正反合の開展形式は長へに繰返され、何事にも行はれるものである。歷史が繰返すといふのは此の形式の反覆を指すのである。形式は反覆するが、內容は常に新しいものを加へて行つて、こゝに開展を遂げる。其の生面を開き進展をなす所以は、即ち反斷の出現によるので、反斷の內容が新しければ新しいほど、優れてゐれば優れてゐるほど、史的開展は飛躍的のめざましさを見せるのである。

文學の開展も亦此の法式による。

此の反斷の提供せられるのは、沈滯固定爛熟の境に入つて、習俗に安んじ、因襲に囚はれ、現狀維持の外に策のないといふやうな時勢に必ず有ることで、文學界の江戸時代末期から明治の初年までは正しく之に該當する。こんな時勢には必ず反斷を提げて起つ新人が出るので、文學の新しい開展がこゝに始まる。

これらの新人は、多くは青年であつて、純眞潔白、利害を度外にして文學界の爲めに盡さうといふ熱意をもつてゐる。思慮分別は二の次にして思ひきつた冒險をやるのである。彼等は又多くは天才肌で、夢想家の素質をも有つてゐて、神來の逸興によつて清新な精神的活動をするのである。彼等は又多くは自我の人で、安協を排し徹底を求め、强情で我儘で、因襲と教權とを棄却して始めから出直して來ようとするのである。

而して彼等は又多くは悲劇的人物であつて、苦悶を閲し落魄を味ひ、性格的に惱みを負うてゐるが故に、時には狂死し自殺するやうな人々もあるのである。

文學史上古來その例少くはないが、明治以後、最近三十年間に於いても、先覺者として痛ましい一生を文學に棒げた悲壯な努力を追憶することが出來る。

江戸時代末期の頽唐文學に對して反斷の提供をなした二葉亭四迷の事業は、即ちその一例であつて、明治二十年といふ時代に、二十四歳の青年の身で、ゴンチヤロフ張りの「浮雲」を書いた作者は、誠に天才肌で神經質な詩人であつた。詩人でありながら政事經濟外交の實務に本領を有するものと考へてゐたことなどは、最よく彼れの面目を發揮してゐるのである。而も小說界の開拓者、翻譯文學の先覺者としての功績を知られて、

心ゆくまでその誇らしい得意さを味ふことなくして、不滿の狀態のまゝ印度洋上に客死したのである。

又北村透谷が、元祿時代の遊戲的道樂的氣分の文學に摸倣した明治二十四五年の小說壇に對して、手ひどい攻擊を加へたのも、反斷提供の一つの實例である。二十五歲の靑年詩人であつた透谷が、文壇知名の大家達を向うに廻して文學界の革新を叫んだ事實は、眞に先驅者の悲壯な奮鬪であつた。而もその事の成果を見屆けることなしに、不滿感傷の聲を擧げて、自ら天命を縮めたのである。小說「春」は彼れの性格と事業との痛ましい消息を描寫して、よく此の間の事情を盡してゐる。

又かの樋口一葉が、婦人運動といふことの未だ夢想だもせられなかつた時代に、無告の日本婦人のために代辯者として、虐げられたものの懊惱を二十餘篇の小說に描き出したことは、獨り文學を人生に觸れしめた

先覺の事蹟であるのみならず、我が婦人界に於ける開拓者の貴重な努力である。「たけくらべ」や「濁江」は、たゞに當年の小說に稀れな新しみと深みとを有つのみならず、二十四歲の青年女子が選手として戰つてゐる勇ましさと痛ましさとを現はすものである。而も其の盛名に伴ふ正當の報酬を享受することなくして、寂しい家庭の中、生計の勞苦の間に、二十五歲で病死したのである。

又かの短詩革新の旗をあげて、從來の遊戲的空想的の詩歌を破壞した正岡子規は、反斷提供者として最も著しい事業を成した人である。彼れの革新的精神は、たゞに短詩界だけでなく、廣く文學の全般に亘る大規模のものであつて、燃えるやうな熱意と湧くが如き才思は、あらゆる文學の分野に革命の火を點けないでは措かなかつた。二十六歲の一靑年俳人は、蕉蕪以後の第一人と言はれたのみならず、短歌に新体詩に、小品

文に短篇小說に、各其の足跡を印したのである。此の間の消息は、小說「柿二つ」によく寫されてゐる。而も永年の病苦、惠まれざる物質的生活、滿されない家庭の快樂、斯うした寂しさの中に世を辭したのである。

又かの高山樗牛が、十九世紀文明の弊を慨し、文學界の沈滯を歎いて、美的生活を唱へ、近代主義の文學を論じ、現代の超越を說き、文明批評の文學を叫んだのは、すべてこれ先覺の聲であつて、たゞに當年の耳目を聳動しただけでなく、却つて次代の靑年讀者に深く理解せられた豫言的の論議であつた。彼れの性格と事蹟とは、紛ふ方ない先驅者のそれであつて、狂飈時代の勇將として陣頭に目覺ましい戰死を遂げる資質を十分に具へてゐた。自分は曾て彼れを明治年間最大のロマンチケルだと稱したことがあるが、彼れの一生は誠に一篇の悲劇であつた。

其の他新体詩界の中西梅花や磯貝雲峰にしても、小說界の川上眉山や

國木田獨歩にしても、皆夫々の意味で斯道のためにはたらいて、土臺を築く仕事に從つた人達で、而もその功績に報いるだけの滿足を得なかつた人達である。土臺を築くのは最も困難で、且つ最も割の惡い仕事である。それを承繼いで其上に建物を築くのは、比較的容易で、而も事功のよく見える仕事である。開拓者は即ち此の容易にして且つはでな仕事を後の人に讓つて、自らは一將の功を成さしめんが爲に枯骨となることを辭さないのである。

要するに、此の種の人々は文壇の殊勳者にして且つ犧牲者である。言はば多く與へて少しく酬いられる人々である。美しくして且つ脆い寶玉である。後の文學社會は彼等から受けた大なる恩惠を感銘しなければならぬ。

附錄　明治大正文學年表

明治大正文學年表

安政六年

坪内逍遙生る（五月）

萬延元年

三宅雪嶺生る（五月）

文久元年

廣津柳浪生る（七月）

落合直文生る（十一月）

同二年

森鷗外生る（一月）

同三年

德富蘇峰生る（一月）

元治元年

二葉亭四迷生る（二月）

大西操山生る（八月）

慶應三年

夏目漱石生る（一月）
齋藤綠雨生る（三月）
正岡子規生る（九月）
尾崎紅葉生る（十二月）
幸田露伴生る

明治元年

江戸を東京と改稱す。
東京に遷都す。
大政官日誌、中外新聞、江湖新聞出づ。

山田美妙齋生る（七月）
北村透谷生る。

明治二年

宮中歌御會復興せらる。
出版條例新聞條例を發布せらる。
府縣に小學校設立せらる。
大學校成立す。
福澤諭吉著世界國盡出づ。
川上眉山生る（三月）

明治三年

假名垣魯文作西洋道中膝栗毛第一編出づ、同五年完結。

中村正直譯西國立志編出づ。

府に中學校設置せらる。

巖谷小波生る（六月）

明治四年

日刊新聞始祖横濱每日新聞出づ。

魯文作安愚樂鍋出づ。

留學女生五名米國に渡る。

島村抱月生る（一月）

高山樗牛生る（一月）

國木田獨歩生る（七月）

田山花袋生る（十二月）

德田秋聲生る（十二月）

土井晩翠生る。

明治五年

東京日々新聞、郵便報知新聞出づ。

福澤著學問のすゝめ初編出づ。九年第十七編を出して完結す。

東京に女學校を設く。

東京に圖書館を開く。

學制を頒布す。

太陽暦を用ひる。
島崎藤村生る（二月）
樋口一葉生る（三月）
河東碧梧桐生る。

明　治　六　年

東京外國語學校設置せらる。
森有禮等明六社を起す。
福澤著文字の教出づ。
綱島梁川生る。
岩野泡鳴生る（一月）
與謝野鐵幹生る（二月）

泉鏡花生る。

明　治　七　年

民選議院設立の建議起る。
明六社明六雜誌を發刊す。
朝野新聞、讀賣新聞出づ。
羅馬字採用論起る。
高濱虛子生る（二月）
上田柳村生る（十月）

明　治　八　年

洋々社談發刊せらる。

新島襄京都に同志社を起す。
明六雜誌廢刊。
小栗風葉生る（二月）

明治九年

蒲原有明生る（三月）

明治十年

鹿兒島に反亂起る、九月平定す。
團々珍聞、穎才新誌出づ。
大學校東京大學と改稱す。
薄田泣菫生る（五月）

中村吉藏生る（五月）

明治十一年

民權自由說唱へらる。
新富座開かる。
有島武郎生る（三月）
與謝野晶子生る（十二月）

明治十二年

學士會院を設く。
大阪朝日新聞發刊せらる。
教育令公布せらる。

國會開設の請願建白出づ。
織田純一郎譯花柳春話出づ。
正宗白鳥生る（三月）
長塚節生る（四月）
永井荷風生る（十二月）

明治十三年

東京大學文學科始めて卒業生を出す。
六合雜誌發刊せらる。

明治十四年

東洋學藝雜誌發刊せらる。
國會開設の大詔發せらる。
自由黨結黨せらる。
小山內薫生る（七月）

明治十五年

時事新報發刊せらる。
外山ゝ山等作新体詩抄出づ。
第一回繪畫共進會開催せらる。
中江兆民譯民約譯解。
東京專門學校早稻田に設立せらる。
竹內節編新体詩歌出づ。
小川未明生る（四月）

明治十六年

兆民譯維氏美學出づ。
矢野龍溪譯經國美談出づ。
逍遙譯自由太刀餘波鋭鋒出づ。
志賀直哉生る(二月)

明治十七年

藤田鳴鶴作文明東漸史出づ。
成島柳北死す四十八歳。
かなのくわい起る。
荻原井泉水生る(六月)

明治十八年

紅葉等硯友社を結ぶ。
逍遙著小說神髓出づ。
同作當世書生氣質出づ。
官制を改革し內閣を設置す。
ローマ字會起る。
鳴鶴譯繫思談出づ。
雪嶺等政教社を結ぶ。
武者小路實篤生る(五月)

明治十九年

反省雜誌發刊せらる。

帝國大學令發布せらる。

明治學院設立せらる。

末廣鐵腸作雪中梅出づ。

演劇改良會起る。

美妙齋作風琴調一節出づ。

柴東海散士作佳人の奇遇初編出づ。

蘇峰著將來の日本出づ。

石川啄木生る(二月)

明治二十年

蘇峰民友社を設け雜誌國民の友を發刊す。

哲學雜誌發刊せらる。

鐵腸作花間鶯出づ。

鹿鳴館假裝舞蹈會開催せらる。

學位令公布せらる。

二葉亭作浮雲上卷出づ。

美妙齋雜誌以良都女を發刊す。

出版月評發刊せらる。

東京音樂學校設立せらる。

東京美術學校設立せらる。

美妙紅葉作新体詩選出づ。

明治二十一年

二葉亭作浮雲第二編出づ。
政教社の雜誌日本人發刊せらる。
硯友社の雜誌我樂多文庫發刊せらる。
東京朝日新聞發刊せらる。
二葉亭譯あひびき國民の友に出づ。
美妙齋集夏木立出づ。
小說雜誌都の花同小說萃錦同大和錦發刊せらる。
二葉亭譯めぐりあひ都の花に出づ。
女學雜誌發刊せらる。
大阪每日新聞發刊せらる。
壯士芝居起る。
末松青萍譯谷間の姬百合出づ。

明治二十二年

美妙齋作胡蝶逍遙作細君思軒譯探偵ユーベル國民の友に出づ。
矢崎嵯峨の屋作初戀都の花に出づ。
雜誌新小說發刊せらる。
大和田建樹作いさり火出づ。
憲法發布せらる。
露伴作露團々都の花に出づ。
新聞日本發刊せらる。
紅葉作色懺悔新著百種に出づ。

高田半峰著美辭學出づ。
眉山作黄菊白菊出づ。
饗庭篁村集むら竹第一編出づ。
鷗外等譯詩於母影國民の友に出づ。
二葉亭作浮雲續篇都の花に出づ。
露伴作風流佛新著百種に出づ。
東京專門學校文學科創立せらる。
鷗外等雜誌柵草紙を發刊す。
歌舞伎座落成す。
柳浪作殘菊新著百種に出づ。
演藝協會設立せらる。

明治二十三年

鷗外作舞姫國民の友に出づ。
新島襄死す。
蘇峰國民新聞を發刊す。
宮崎湖處子作歸省出づ。
國學院設立せらる。
教育勅語發布せらる。

明治二十四年

中西梅花作新体梅花詩集出づ。
中村正直死す、六十歲。

紅葉作二人女房都の花に出づ。
逍遙等雜誌早稻田文學を發刊す。
綠雨作油地獄及かくれんぼ出づ。

明治二十五年

鷗外譯作集水沫集出づ。
露伴作五重塔出づ。
子規俳句革新運動を始む。
直文淺香社を結ぶ。

明治二十六年

古河默阿彌死す、七十八歲。
透谷等雜誌文學界を發刊す。
子規論集獺祭書屋俳話出づ。
逍遙史劇論早稻田文學に出づ。
內田不知庵譯罪と罰出づ。
民友社同人著十二文豪出づ。

明治二十七年

透谷死す、二十七歲。
清國と開戰す。
柵草紙廢刊。
魯文死す、六十六歲。
逍遙作桐一葉早稻田文學に出づ。

透谷集出づ。

明治二十八年

雜誌帝國文學發刊せらる。
雜誌太陽發刊せらる。
雜誌文藝俱樂部發刊せらる。
淸國と講和す。
雜誌文庫發刊せらる。
一葉作濁江及たけくらべ出づ。
南新二死す。
閨秀小說出づ

明治二十九年

鷗外等雜誌めざまし草を發刊す。
逍遙作牧の方早稻田文學に出づ。
紅葉作多情多恨讀賣新聞に出づ。
若松賤子死す、三十二歲。
鐵膓死す、四十九歲。
雜誌新小說再興せらる。
竹越三叉等雜誌世界の日本を發刊す。
二葉亭譯片戀出づ。
一葉死す、二十五歲。
鷗外論集つき草出づ。

雜誌新聲發刊せらる。

明治三十年

紅葉作金色夜叉讀賣に出づ。
一葉全集出づ。
藤村作天馬及深林の逍遙出づ。
晩翠作破鐘の響帝國文學に出づ。
二葉亭譯浮草太陽に出づ。
新体詩集抒情詩出づ。
鷗外喜美子翻譯集かげ草出づ。
藤村詩集若菜集出づ。
逍遙作沓手鳥孤城落月新小說に出づ。
森田思軒死す、三十七歲。
雜誌文學界廢刊。

明治三十一年

子規の短歌革新論日本に出づ。
子規等の句集新俳句出づ。
國民の友廢刊。
早稻田文學廢刊。
雜誌ホトトギス發刊せらる。

明治三十二年

德富蘆花作不如歸國民新聞に出づ。

反省雜誌中央公論と改題す。

高等女學校令私立學校令發布せらる。

晩翠詩集天地有情出づ。

矢田部尚今死す、四十九歳。

泣菫詩集暮笛集出づ。

子規寫生文ホトトギスに出づ。

明治三十三年

外山ゝ山死す、五十三歳。

新詩社の雜誌明星發刊せらる。

操山死す、三十七歳。

雜誌小天地發刊せらる。

明治三十四年

樗牛ニイチェ論太陽に出づ。

清澤滿之等雜誌精神界を發刊す。

福澤諭吉死す、六十八歳。

獨歩短篇集武藏野出づ。

子規等句集春夏秋冬出づ。

晩翠詩集曉鐘出づ。

大橋乙羽死す、三十三歳。

藤村詩集落梅集出づ。

樗牛美的生活論太陽に出づ。

泡鳴詩集露じも出づ。

晶子歌集亂れ髪出づ。

兆民死す、

高安月郊譯イプセン作社會劇出づ。

明治三十五年

子規死す、三十六歲。

鷗外譯卽興詩人出づ。

透谷全集出づ

樗牛死す、三十三歲。

明治三十六年

鷗外脚本玉匣兩浦島出づ。

俳優尾上菊五郞死す。

專門學校令發布せらる。

有明詩集獨絃哀歌出づ。

滿之死す。

子規等作寫生文集出づ。

俳優市川團十郞死す。

紅葉死す、三十七歲。

直文死す、四十三歲。

大西博士全集第一卷出づ。

明治三十七年

紅葉全集樗牛全集出づ。

露國と開戰す。
綠雨死す、三十八歲。
原抱一庵死す、三十九歲。
俳優市川左團次死す。
小泉八雲死す、五十四歲。
逍遙著新樂劇論及同作新曲浦島出づ。
子規歌集竹の里歌出づ。
雜誌新潮發刊せらる。

明治三十八年

漱石作我輩は猫であるホトトギスに出づ。
風葉作靑春讀賣新聞に出づ。
梁川見神論雜誌新人に出づ。
有明詩集春鳥集出づ。
啄木詩集あこがれ出づ。
薫詩集小野のわかれ出づ。
梁川著病間錄出づ。
露國と講和す。

明治三十九年

早稻田文學再興せらる。
柳村譯詩集海潮音出づ。
福地櫻痴死す、六十六歲。
逍遙文藝協會を設立す。

藤村作小說破戒出づ。
獨歩集運命出づ。
雜誌文章世界及趣味發刊せらる。
漱石集漾虚集出づ。
直文作萩の家歌集出づ。
泡鳴論集神秘的半獸主義出づ。
京都帝國大學文科を開く。
二葉亭作其の面影東京朝日に出づ。
秋聲作己が縛萬朝報に出づ。
岩城準太郎著明治文學史出づ。

明治四十年

漱石集鶉籠出づ。
白鳥作塵埃趣味に出づ。
思軒全集第一出づ。
花袋作蒲團新小說に出づ。
梁川死す、三十六歳。
陸羯南死す、五十一歳。
白鳥集紅塵出づ。
秋聲作凋落讀賣新聞に出づ。
文部省第一回美術展覧會を開く。
薫等雜誌新思潮を發刊す。
二葉亭作平凡朝日新聞に出づ。

明治四十一年

虛子集鷄頭出づ。
未明集綠髮出づ。
虛子作俳諧師國民新聞に出づ。
藤村作春朝日新聞に出づ。
花袋作生讀賣新聞に出づ。
泡鳴詩集闇の盃盤出づ。
眉山死す、四十歲。
獨步死す、三十八歲。
二葉亭譯血笑記出づ。
長谷川天溪論集自然主義出づ。
服部撫松死す、六十八歲。
白鳥集何處へ出づ。
雜誌アララギ發刊せらる。
雜誌明星廢刊。

明治四十二年

鷗外等雜誌スバルを發刊す。
森田草平作煤烟東京朝日に出づ。
碧梧桐俳句の新傾向論日本人に出づ。
同編日本俳句抄出づ。
北原白秋詩集邪宗門出づ。
抱月論集近代文藝の研究出づ。

荷風集歡樂出づ。
二葉亭死す、四十六歳。
白鳥集二家族出づ。
子規句集出づ。
三木露風詩集廢園出づ。
鷗外譯脚本一幕物出づ。
同譯ボルクマン國民新聞に出づ。
眉山全集出づ。
岩城準太郎著增補明治文學史出づ。
小山内薫自由劇場を設立す。
自由詩社起る、口語詩論唱へらる。
荷風作冷笑東京朝日に出づ、
依田百川死す、七十七歳。

明治四十三年

藤村作家讀賣に出づ。
雜誌白樺及三田文學發刊せらる。
鈴木三重吉作小鳥の巣國民新聞に出づ。
二葉亭全集及獨步全集出づ。
雜誌新思潮再興せらる。
長塚節作土東京朝日に出づ。
泡鳴作放浪出づ。
美妙齋死す、四十三歳。
建樹死す、五十三歳。

啄木歌集一握の砂。

明治四十四年

晶子歌集春泥集出づ。
井泉水等俳句雜誌層雲を發刊す。
文部省文藝委員會官制を發布す。
平塚明子等雜誌靑鞜を發刊す。
谷崎潤一郎集刺靑出づ。
無政府主義者幸德秋水等刑せらる。
文藝協會公演に抱月譯人形の家を演ず。

明治四十五年、大正元年

高崎正風死す。
啄木死す、二十七歲。
厨川白村著近代文學十講出づ。
改訂一葉全集上卷出づ。
文藝協會公演、抱月譯故鄉を演ず。
啄木歌集悲しき玩具出づ。
泡鳴作發展出づ。
鷗外脚本集我一幕物。
文藝委員會逍遙を選奬す。
實篤作世間知らず出づ。
直哉集留女出づ。

大正二年

鷗外譯ファウスト出づ。
幸堂得知死す、七十一歲。
伊藤左千夫死す、五十歲。
啄木歌集出づ。
文藝委員會廢せらる。
文藝協會解散す。
抱月藝術座を組織す。
齋藤茂吉歌集赤光出づ。
新劇團連りに起る。
大野洒竹死す、四十二歲。

雜誌スバル廢刊。

大正三年

俳句集自然の扉出づ。
藝術座公演に抱月譯復活を演ず。
歐州大戰始まる、青島を攻略す。
西洋文學の飜譯物多く出づ。

大正四年

節死す、三十七歲。
瀨沼夏葉死す、四十一歲。
子規遺稿出づ。

碧梧桐等俳句雜誌海紅を發刊す。
中村吉藏作新社會劇出づ。
土居春曙死す、四十六歳。

大正五年

花袋全集第一出づ。
漱石作明暗朝日新聞に出づ。
角田浩々歌客死す、四十八歳。
柳村死す、四十三歳。
里見弴集善心惡心に出づ。
漱石死す、五十歳。
雜誌新思潮三興せらる

大正六年

長塚節歌集出づ。
芥川龍之介集羅生門出づ。
逍遙作名殘星月夜中央公論に出づ。
有島武郎著作集第一死出づ。
花袋作殘雪出づ。
直哉作和解出づ。
倉田百三作出家と其弟子出づ。
高安月郊著作集出づ。

大正七年

漱石全集第一卷出づ。
藤村作新生東京朝日に出づ。
逍遥作義時の最期中央公論に出づ。
鷗外集高瀬舟出づ。
實篤論集新しき村の生活出づ。
菊地寛作忠直卿行狀記出づ。
抱月死す、四十八歳。
歐洲大戰終る。
福田德三吉野作造等黎明會を起す。

大正八年

抱月全集啄木全集出づ。
婦人問題論ぜらる。
雜誌改造、解放、現代等發刊せらる。
詩話會編日本詩集出づ。
富田碎花譯草の葉第一出づ。
露風等編日本象徵詩集出づ。
宮崎三昧死す、六十一歳。
晶子短歌全集第一出づ。

大正九年

新婦人協會設立せらる。
泡鳴死す、四十八歳。
菊地寛脚本集藤十郎の戀出づ。

左千夫全集第一歌集出づ。

柳村詩集牧羊神出づ。

武郎譯ホイツトマン詩集第一輯出づ。

黒岩涙香死す、五十九歳。

須藤南翠死す、六十三歳。

中澤臨川死す、四十三歳。

雜誌人間發刊せらる。

大正十年

江原小彌太作新約・舊約、復活出づ。

西洋文學の飜譯全集多く出づ。

泡鳴全集出づ。

雜誌明星再興せらる。

逍遙作我ページエント劇出づ。

大正十一年

藤村全集第一出づ。

武郎作星座第一出づ。

篁村死す、六十八歳。

鷗外死す、六十一歳。

直哉作暗夜行路前編出づ。

逍遙作家庭用兒童劇出づ。

宮崎湖處子死す。

短詩及童謠連りに出づ。

水平社各地に起る。

大正十二年

鷗外全集第一出づ。

文部省常用漢字一九六三字選定の件を發表す。

蘇峰著近世日本國民史學士院より選奬せらる。

武郎死す、四十六歳。

花袋著近代の小說出づ。

關東に大震火災起り、出版界大打擊を受く。

明治大正の國文學索引（人名。書名。件名）

あ

惡魔主義……一九八。二二六
あひびき……三三。一三四
饗庭篁村……三
有島武郎……一九〇

い、ゐ

磯貝雲峰……五五。一五五
一葉全集……六二。六七
泉鏡花……八五
伊藤左千夫……四五
岩野泡鳴……五四。八六。九九。一四六。一八一
イブセン作社會劇……一六一。二二九
以良都女……五一
井上巽軒……四八

う、え

浮雲……一七、二七、二三八、二五一
上田柳村……一八一、二三六
運命……九七、一九六
江原小彌太……二四二

お、を

落合直文……五三、五八
己が縛……九八、一八五
大西操山……五五、一八〇
於母影……五三
荻原井泉水……一〇〇
小栗風葉……八六、一四〇、一八一
尾崎紅葉……二一、五二、八五、一三八、一八〇
小山内薫……一七二

か

海潮音……二三六
幸田露伴……二一、六二、一三五、一四〇、一八〇
柿二つ……四一、二五五
佳人の奇遇……一三三
雅俗折衷体……一二八
河東碧梧桐……四〇、一〇〇、一八一
川上眉山……七〇、八五、一四〇、二五五
蒲原有明……二四、八五、一八一、二三六

き

歸省……五五
北村透谷……二、三三、五五、七七、一八〇、一五三
伽羅枕……二
狂飆時代……八六、一〇〇、一四三、一六一、一五五
享樂主義……一九八、二二六
桐一葉……一五四、一六〇
近代主義……八四、八八、九四

く、け

草枕……二〇一

國木田獨步……三四、五八、九七、一三六、一四六、一八一、二五六
經國美談……一三三
閨秀小說……六〇
硯友社……二〇、九〇、一四八
言文一致……三九、一五〇

こ

國民の友……三三、五二、一八〇
小杉天外……八六、一八一
胡蝶……一三三、一三七
金色夜叉……八五

さ

齋藤緑雨……一七〇、二三五
殘雪……二三九

し

自由劇場……一七一
柵草紙……七八
志賀直哉……一九〇
自然主義……一〇〇、一〇六、一八七、一九一、二〇五
兒童劇……一五八
柴東海散士……一三
十三夜……六〇
島崎藤村
……一七、三四、五七、八五、九四、一三六、一四六、一八一、二三九
島村抱月……一四三、一四七、一八一、二三〇
寫生文……一四一
象徵主義……二四、二三五
春泥集……一八五
春鳥集……一八六、二三六
白樺……一九〇
新俳句……四〇
新体詩……三七、四七
新体詩歌……四八

新休詩抄……四七、四九
新休梅花詩集……五五
新曲浦島……一五六
新生……二三九
人道主義……一九八、二三一、二四〇
新約……二四二
新浪漫主義……一九一、二〇八、二三一、二四〇、二四八
新理想主義……一九一、二〇八、二三一、二四〇

す

末廣鐵腸……一二三
薄田泣菫……五四、二三六
鈴木三重吉……一九〇

せ、そ

青春……一八五
小說神髓……二、二六、四一、二三七、二五三
層雲……二〇〇

た、ち

當世書生氣質……二五、二三三
高山樗牛……二〇、八〇、九四、一〇一、一四一、一四三、一八〇、二一八、二四〇、二五五
高濱虛子……四〇、一四七、一八一

高安、月郊……一六一、二二九
たけくらべ……六一、六六、二五四
多情多恨……一四〇
獺祭書屋俳話……三八
爛……二二九
谷崎潤一郎……一九〇
玉匣兩浦島……一六三
田山花袋……三四、五八、九〇、一三六、一四六、一八一、二二九
探偵ユーベル……一二五
耽美主義……一九八、二二六
女學雜誌……一一、五二

つ

坪内逍遙……一一、二五、一三三、一三七、一四〇、一五二、一六〇、一六八、一七〇、一八〇、二四五
土井晩翠……五八、八五、九九
綱島梁川……八一
妻……九〇

て

帝國文學……五八、一四〇
デカダン……二六、二三七
天地有情……五八

と

東洋學藝雜誌……四八、五三
透谷集……五七
透谷全集……一三、一七
戸川殘花……五五
德富蘇峰……一二三
德富蘆花……八六
德田秋聲……八六、九八、一四六、一八一、二三九
外山ゝ山……四八

な

長塚節……四五
中西梅花……五四、二五五
中江兆民……八〇
名殘星月夜……一五八
夏木立……一二九
夏目漱石……四〇、一四七、一八一、二〇〇
成島柳北……一二三

に

にごり江……六一、二五四
日蓮上人辻說法……一六三
日本新聞……二六八、一一四

日本派……四〇
二人女房……一二九
根岸派……四七
人形の家……一五七、一六一

は

破戒……九四、一八三
白羊宮……二三六
長谷川天溪……一八一
馬場孤蝶……一七、五五
春……一七、九六、一八一、二五

ひ

樋口一葉……六〇、一四〇、二五三
一幕物……一六三
廣津柳浪……八五、一三〇、一三八、一四〇
悲戀悲歌……九九、一八六

ふ

福地櫻痴……一三二、一五三
福澤諭吉……一四四
二葉亭四迷……一三三、一三七、一三七、一八〇、二五二
蒲團……九四、一八五

文學界……一七、三一、五五、六一
文藝協會……一五七、一七〇、一八七

へ、ほ

表現主義……一三二
ページェント……一五八
沓手鳥孤城落月……一五四
ほとゝぎす……四三

ま

牧の方……一五四
正岡子規……三七、四〇、五八、一四一、一八〇、二五四
正宗白鳥……一四六
松岡國男……二四、五八、一八五

み

三田文學……一九〇
明星……四五、八五、九八
都の花……三三、六一
宮崎湖處子……五五

む、め

武藏野……一二六、一三三
武者小路實篤……一九〇

明暗……二〇一

めぐりあひ……三三、二三五

も

森鷗外……五三、一四〇、一四三、一六〇、一六三、一八〇

森田思軒……二一四

森田草平……一九〇

や

矢崎嵯峨の屋……五五、七八、一三八

矢田部尚今……四八

矢野龍溪……一三三

山田美妙齋……五一、一三六、一三七、一八〇

よ

與謝野鐵幹……四五、五八

與謝野晶子……九七、一九八

義時の最期……一五八

ら、わ

落梅集……一八三

若菜集……五八、九四、一八二

わかれ道……六八

我輩は猫である……二〇〇

早稻田文學……………………………………〔四〇〕〔五三〕〔一九〕

索引終

大正十四年六月一日印刷
大正十四年六月五日發行



明治大正の國文學奥書

定價 貳圓五十錢

著者 岩城準太郎
東京市神田區美土代町三丁目一番地

發行者 博多久吉
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地

印刷者 井下精一郎
大阪市西區阿波座中通二丁目四番地

印刷所 井下書籍印刷所

發行所 成象堂
東京市神田區錦町三丁目一番地
大阪市南區大寶寺町西之丁二十二番地
振替東京五二六〇七番
大阪七三三三番
電話特南壹壹七七番

大正十四年六月十二日
SAKIKO